

令和7年度八幡公民館主催事業 5月5日より先着受付

第20シリーズ

30人募集

八幡史学館

回	月日	内容	講師
1	6月10日(火)	郷土の力士 —市原市から誕生した力士たち—	時田光夫 氏
2	7月8日(火)	飯香岡八幡宮と八幡	平澤牧人 氏
3	8月12日(火)	市原市における 漢文学	辻井義輝 氏
4	9月9日(火)	八幡の地理学	小関勇次 氏
5	10月7日(火)	八幡史学館に寄せて —公民館の歴史—	山岸弘明 氏

5回講座です。すべての会に参加できる方が対象です。

時間:午前9時30分から11時30分

場所:八幡公民館 視聴覚室

参加費:無料

5回目講師
山岸弘明氏



公民館天井絵

※キャンセルや欠席の場合は、必ず公民館にご連絡願います

山口 達画伯「四季草花図」

八幡公民館0436(41)1984

令和7年度 八幡公民館 主催事業

『八幡史学館』 第1回 資料

国技である大相撲を知ろう



令和7年6月10日(火)

講師

八幡公民館運営員会副会長

時田 光夫氏

国技である大相撲を知ろう

相撲とは

裸でまわしをつけ、素手の二人が土俵内で相手を倒すか、または土俵外に出すことによって勝負を争う競技、古くは武術・農耕儀礼、神事として行われた。平安時代には宮中の年中行事として行われ、室町時代に至っては職業力士が生まれ、近世になり土俵や決まり手禁じ手が定められ、一般に日本の国技とされる。

相撲と大相撲は違う

相撲と大相撲はよく似た言葉ですが、意味が全然違うことをご存知でしょうか、「相撲」というのは文字通り相撲という競技のこと、「大相撲」とは、日本相撲協会が主催する相撲興行のこと、例えていうなら野球とプロ野球の違いに似ています。すなわち相撲が野球で大相撲がプロ野球です。

明治期に文明開化が行われた影響で古臭い相撲は存続の危機に陥りましたが、天覧相撲が繰り返されたこと、そして天皇賜杯が下賜されたことが面目を保ちました。そして1925年に東京相撲・大阪相撲が合併し日本相撲協会が誕生、勧進相撲は大相撲へと受け継がれた。しかし大相撲はただのスポーツ興行ではありません。長い歴史の経緯もあって未だ神事としての側面を強く持っている。例えば両国国技館の土俵の上にあるつり屋根、これは天照大神を祀る伊勢神宮のご神木が使われている。

また、力士たちの所作にもそれぞれ意味が込められています。

- ・「四股」は地面に潜む邪悪などを封じ込める
- ・「力水」は身体を水で清める
- ・「塩まき」は土俵の邪気を払い清めケガのないよう神に祈る

これが相撲の長い歴史の中で徐々に養われたものであるが、実際に生で見るとものすごい迫力があることがわかります。単なる儀式というだけでなく、見栄えもするからこそ現代まで生き残ってきたと考えられます。

大相撲の力士になるにはどうするの？

1. 新弟子検査合格が第一の関門

力士になるためには、新弟子検査に合格しなければいけません。日本相撲協会の規則では、義務教育を終えた23歳未満の男子で、親の承諾書や本人の意思確認書などの書類を提出し、健康診断や検査に合格した者が採用される。

今の検査の基準は、身長167cm以上体重67kg以上です。中学を卒業する者が多く受ける春場所の新弟子検査は、中学卒業見込みの者に限って身長165cm体重65kg以上と少し基準が下げられている。

2. 新弟子は土俵で披露されて力士の仲間入り

検査に合格した新弟子は、本場所の土俵で一番下の階級の序の口の取り組みより前に新弟子同士で相撲を取る、これを前相撲と言います。そして親方や兄弟子の化粧まわしをつけて本場所の 8 日目に土俵で披露されます。次の場所から晴れて番付に名前が載りますが、序の口は四股名の文字が小さいから「虫眼鏡」という別名もありました。

3. アマチュア相撲優勝者の規定

アマチュア相撲の 4 大会優勝者

- ・アマチュア横綱
- ・学生横綱
- ・実業団横綱
- ・国体横綱

この 4 つのタイトルの内 1 つを取って 1 年以内の者を幕下 15 枚目各からスタート、また 4 大会で準々決勝に進出した者は、1 年以内は三段目(最下位)でスタートするという優遇措置がある。

相撲の階級

1. 相撲の階級と定員数

階級	定員数
・幕内	42 名
・十両	28 名
・幕下	120 名
・三段目	200 名
・序二段	なし
・序の口	なし

相撲の力士は、階級によって扱いが大きく変わると言われていますが、そもそも大きく変わる階級の境目は十両以上です。ちなみに幕下以下は、力士ではなく力士養成員です。力士養成員は下記の事柄で処遇が異なります。

- ・月の給料の支払いがない
- ・取り組み数が少ない
- ・大銀杏がゆえない
- ・化粧まわしをつけての土俵入りができない
- ・まわしの材質が違う
- ・タオルが使えない

そうしたことに加え、力士養成員は力士(十両以上)の世話や部屋の雑用などをしなければなりません。

化粧まわし: 相撲で関取衆が土俵入り用に使うエプロンのような美しい回し。後援会など

が昇進を祝って贈ることが多い、帯の生地幅は日本婦人の丸帯と同じ 68cm であるが、長さは 2 倍近い 6m~7m もある。化粧まわしは、(締め込み)から分化したものとされ、元禄年間(1688~1704)頃に色絹、色地紋に刺繍に刺繍が施された締め込みで取り組みが行われていた。しかし、刺繍糸が手指に絡むので締め込みから分離し、土俵入り専用の「化粧まわし」に作られた。天明年間(1781~1789)頃には現在とほぼ同じ化粧まわしが確立した。

気になる化粧まわしの値段: 最低でも 100 万円は下ることはなく、数百万円から高いもので数千万単位のものも珍しくないというから驚きだ。史上最高額を記録したのは、元大関若嶋津関の化粧まわしだった。後援会から贈られたというその化粧まわしは、前垂れにデザインされた鷲の足に 10 カラットのダイヤモンドが織り込まれており、総額なんと 1 億 5 千万円という驚愕の値段だった。

相撲の格付け

相撲には、階級の他に下記に挙げる格付けがある。

- ・横綱
- ・大関
- ・関脇
- ・小結
- ・前頭
- ・十両
- ・幕下二段目
- ・三段目
- ・序二段
- ・序の口

格付け最高位は横綱、そして大関、関脇、小結は三役と呼ばれている。

力士の給料

相撲の力士は年俸制ではなく、それぞれの格付けで決められた給料が毎月支払われる。そのため階級や格付けが上がれば貰える給料は増え下がれば減ります。ちなみに支払われる給料の全額は時代によって異なっています。今回は現代の相撲の階級(格付け)別に給料をまとめました。

階級	給料
・横綱	300 万円
・大関	250 万円
・関脇	180 万円
・小結	180 万円

- | | |
|-----|--------|
| ・前頭 | 140 万円 |
| ・十両 | 110 万円 |

十両未満の力士は、力士養成員のため毎月の給料の支払いはありません。

この月額支払われる給料の他に、優勝すれば賞金 1,000 万円を獲得、活躍すれば殊勲賞・敢闘賞・技能賞それぞれ 200 万円が授与される。

その他、力士報奨金という仕組みもあります。この金額も格付けによって異なる。

力士養成員は毎月の給料は貰えないが、その代わり本場所ごとに（年6回）場所手当の支給がある。この場所手当は

- ・幕下二段目 16万5千円
- ・三段目 11万円
- ・序二段 8万8千円
- ・序の口 7万7千円

また勝ち星と、勝ち越し星によっては、幕下以下奨励金も場所ごとに貰える。

他に幕内力士は、取り組みにスポンサーから懸賞金が出れば、その取り組みで勝てば懸賞金が獲得可能、また平幕が横綱に勝って金星をあげた場合には、その力士に4万円（金星1つにつき）が支払われる。

懸賞は1本6万2千円。日本相撲協会が事務経費として5千300円を取り、力士の所得税にあてるため、預かり金が2万6千700円です。力士が実際に受け取る金額は、懸賞1本につき3万円です。

番付表とは

相撲における力士の番付は、場所の結果で上下する。上下した新たな格付けは、次の場所前に番付表で発表される。番付表が発表されるのは、本場所前ですから、年に 6 回発表されることになる。

階級を上げるには

相撲は場所で勝ち越すことで階級の順位(何枚目)が上がり、負け越すと下がります。

そして、格付けは筆頭(順位が一番上)で勝ち越せば、格付けが上がり格付けが最下位で負け越すと1つ下の格付けになります。つまり勝ち越しの数が多ければ多いほど番付の上がり方は大きく、逆に負け越しの数が多ければ多いほど番付の下がり方は大きくなるということ、同じ格付け内の順位は勝ち星が基準です。

特殊な条件

[橫網]

相撲で横綱の階級に上がるためには、大関の地位で 2 場所連続優勝かそれに準ずる成績を満たすことが条件、また単に場所での成績が良かっただけではなく、横綱に相応しい相撲

29. V 795-7 7. 7. 81 V
IV 技 師

内容であることも条件です。

その条件を満たしている力士の昇進を相撲協会の理事長が、相撲審議委員会に諮問し横綱審議委員会が該当の力士の横綱昇進を検討、その検討で横綱審議委員会の推薦を受けると、相撲協会が正式に横綱昇進を決定する。

ちなみに 2 場所連続優勝の場合は無条件で、それに準ずる成績の場合は、委員の 3 分の 2 以上の賛成が有れば横綱昇進に推薦されるのが通例です。

一度横綱に昇進すれば場所で負けても(場所休場)大関に陥落しない。

[大関]

相撲では小結・関脇の階級から直近の 3 場所での勝ち星の合計が 33 勝以上することが大関昇進の条件、陥落の条件は負け越しですが、場所で負け越してもすぐに陥落というわけではありません。負け越した次の場所は角番という状態となりこの角番となった場所で、さらに負け越すと関脇に陥落してしまいます。角番場所で勝ち越せば角番が取り消されます。

また関脇に陥落した場所で10勝すると再び大関に返り咲くことができます。

〔關脇・小結〕

相撲では関脇と小結の階級の定数はあります。(東西1人ずつ)

そのため現在その格付けにいる力士が負け越して陥落するか、関脇の力士が大関に昇進しないと下の格付けにいる力士が、どんなに勝ち越しても昇進することはありません。

このように関協と小結には、大関や横綱と比較しても厳しい条件が課せられることがあります。

土俵入りとは

大相撲では、大勢の力士が土俵をぐるりと囲む様子を見たことがないだろうか、これは観客に力士を紹介する顔見世「土俵入りという儀式」土俵入りのとき、力士たちはそれぞれのとっておきの化粧まわしをつけて土俵に上がる。この土俵入りが行われるのは2回、十両取り組みの前に十両力士全員が、そして幕内の取り組み前には大関から前頭の幕内力士が行う。だがこのとき力士の最高位である横綱は、この土俵入りには顔見世をしない、大相撲では特別な階級があり、横綱には「横綱土俵入り」という特別な土俵入りが用意されています。

横綱土俵入り

横綱土俵入りは、幕内力士の土俵入りが終わった後に行われる。行司を先頭に真っ白な綱を腰に締めた横綱が、露払い・太刀持ちという力士二人を従えて土俵に上がる。この露払いと太刀持ちは、横綱と同じ部屋の幕内以上三役以下の格付けの力士が担う。部屋に力士

が不足している場合は、一門から務めることもある。

露払い、土俵入りの際に横綱の前を歩く、かつて武将や大名がいた時代には梅雨で濡れた草花で主人が濡れて汚れないように主人の前を歩く役割である「露払い」をする家臣がいた。横綱土俵入りの露払いも同じ役割であり横綱を土俵まで先頭する役目を持つ、一方の太刀持ちは、武将の後ろで刀を持って控えていた家臣や小姓に由来する。横綱土俵入りの際にはタケミツが使用される。

横綱は武将大名に匹敵する特別な存在なのである。土俵に上がる横綱を中央に、向かって左に太刀持ち、右に露払いが並ぶ、横綱は柏手を打ち、右足で四股を踏みせり上がる。左足で四股を踏み、の順で行う。四股を踏む際には観客から「よいしょ」と掛け声が上がるのが横綱土俵入りの定番であり盛り上がりのポイントでもある。

又、土俵入りでは四股踏みの間に行われるせり上がりする方法、そして腰に締める綱の形が異なる2つの形がある。それが雲龍型・不知火型です。

土俵入りの型

① 雲龍型

せり上がる際に左手を胸のそばに持っていき、右手を伸ばして行う型が「雲龍型」だ、かつて雲龍久吉という力士が行っていた土俵入りの形を起源とされる。又、綱の結びは輪を一つだけ作る。 貴乃花・朝青龍・鶴竜・稀勢の里・豊昇龍

② 不知火型

不知火型は、不知火光右衛門という力士が行っていた土俵入りのスタイルが由来とされている。せり上がりの際には両手を伸ばすのが特徴で両手を広げ低い体勢からダイナミックに上がるため、大柄な力士が行うと迫力のあるせり上がりとなる。綱の結び目は輪を2つ作るため不知火型の綱は雲龍型のものより重くなる。

日馬富士、白鵬、照ノ富士

最後の勇姿「引退相撲」の土俵入り

横綱は、たとえ何度負け越しても大関に陥落することはない、だが陥落のリスクがないからといって衰えても横綱を続けてよいわけではない、もちろん横綱に上り詰めた力士は誰一人としてそんな甘い考えはない、自分の衰えを感じたとき潔く引退することで、自身の横綱としての名誉と誇りに報い、そして大相撲への敬意を示すのだ。

現役を引退し年寄を襲名した元横綱が引退相撲を行う際、断髪式の前に最後の横綱土俵入りが行われる。これが横綱としての最後の晴れ姿となる。

長寿のお祝い 還暦土俵入り

現役時代横綱を経験した力士が、還暦を迎えた際に行われるのが還暦土俵入りであり、いわゆる長寿のお祝いなのだ。世間一般で還暦といえば「赤いちゃんちゃんこ」といわれて

いるが、この還暦土俵入りでは赤い綱が使用されている。還暦を迎えた時に親方として日本相撲協会に属している場合は、両国国技館で開催されるが、それ以外の場合は別の場所で行う。最後に行われたのは、2015年5月に行われた故千代の富士貢(当時の九重親方)の還暦土俵入りだ。この時の露払いを日馬富士関、そして太刀持ちを白鳳関の横綱二人が務めた。

現在の相撲部屋数 45部屋

浅香山・朝日山・安治川・荒汐・雷・伊勢ヶ濱・伊勢ノ海・追手風・阿武松・大島・大嶽
押尾川・音羽山・尾土・春日野・片男波・木瀬・九重・境川・佐渡ヶ嶽・式秀・綴
芝田山・高砂・高田川・武隈・田子の浦・立浪・玉ノ井・出羽の海・時津風・常盤山
中村・鳴門・西岩・錦戸・二所ノ関・八角・放駒・秀の山・藤島・二子山・湊・武蔵川
山響

相撲部屋での外国人力士の枠

原則的に1部屋1人と決まっている。

日本に帰化して拔け道を利用する部屋があったので、現在は帰化しても外国出身力士は1部屋1人です。部屋が閉鎖されてすでに外国出身力士がいる部屋と合併するときは、例外的に2人いても認められる。また北青鵬のように入門前に日本に10年以上の居住実績があると、日本出身力士として扱われます。(北青鵬はモンゴル生まれですが、5歳から北海道に移住しており北海道を出身地にしています)

相撲はいつから始まったの？歴史と由来について

相撲の歴史はとても古く、神話の時代にまでさかのぼると言われています。古事記や日本書紀の中にも、相撲の取り組みと考えられる力くらべの話が出てきます。

古事記では、建御雷神(タケミカズチノカミ)建御名方神(タケミナカタノカミ)という2人の神様が力くらべをしたと記されている。

神話の時代天照大御神(アマテラスオオミカミ)が出雲の国を自分の領土にしようと武御雷神(タケミカズチノカミ)を使わし、出雲の国の大国主命(オオクニノミコト)に領土を差し出すか、国を滅ぼされるかの二択を迫りました。

その話を聞いた大国主命(オオクニノミコト)の息子のひとり建御名方神(タケミナカタノカミ)が武御雷神(タケミカズチノカミ)に力くらべを挑み出雲の国を守ろうとしますが負けてしまい、その時の傷がもとで命を落としたというものです。

日本書紀では、大和の国当麻蹊連(タイマノケハヤ)という怪力の持ち主と出雲の国の力

自慢の野見宿弥(ノミクスネ)という男2人の対決の話が出てきます。

当麻蹴連(タイマノケハヤ)はこの世の中に自分と互角に力くらべができるものはいないと豪語しており、この話を聞いた垂仁天皇(スイニンテンノウ)紀元前23年7月7日に宮中で対決することとなりました。現在の相撲とは異なり、お互い蹴り合うことで決着をつけるもので、野見宿弥(ノミクスネ)の蹴りにより肋骨や腰の骨を砕かれ当麻蹴連(タイマノケハヤ)は亡くなりました。これが、日本最古の天覧相撲と言われています。

最初のころ相撲は、農作物の収穫を占う儀式や感謝の儀式として行われており、神事として行われていたようです。8世紀の初め頃から宮中で相撲が行われていたと考えられていますが、記録に残っているのは734年です。古事記

奈良時代(710年~794年)の734年7月7日に聖武天皇が日本書紀の当麻蹴連(タイマノケハヤ)と野見宿弥(ノミクスネ)の古事にちなみ諸国から相撲人を集め宮中で相撲を取らせた。日本書紀以降では、これが天覧相撲の最も古い記録です。後にこの天覧相撲は相撲節会(スモウセチエ)という公式行事となり毎年7月7日に七夕の宮中行事として開催され、およそ400年続きました。

鎌倉時代(1185年~1333年)になると源頼朝が相撲を奨励しました。このころの武家社会では神事としてよりも、武士が心身鍛錬や戦闘訓練を目的として相撲が行われるようになり、武家相撲とも呼ばれた。1189年源頼朝は鶴岡八幡宮で上覧相撲(将軍が観戦する相撲)を開催するなど相撲が盛んにおこなわれた。

室町時代(1333年~1573年)には各地の大名がすもうの強いものを家臣として取立たり相撲見物を楽しむようになり、中でも相撲が大好きだった織田信長は、各地から力士を集め相撲を楽しみ、土俵の原型を考案したと言われている。

江戸時代(1603年~1868年)になると相撲を職業とする人たちが現れ勸進相撲が行われるようになった。

勸進相撲とは、神社や寺の修繕・建築の募金を目的とした相撲のことで、江戸・大阪・京都を中心に日本各地で行われていた。この勸進相撲が現在の相撲の原型と考えられており次第に庶民の楽しみの一つとなっています。その後大相撲として様々なルールが決められ、スポーツとしての形態を整えました。

明治時代(1868年~1912年)になると日本相撲協会が誕生し勸進相撲は大相撲となり現在に至ります。

相撲の歴史が神話の時代にまでさかのぼるとは驚きました。日本で誕生し、とても古い歴史があったものなので、日本の国技と思うのも自然なことだったのかもしれませんが。現在は、海外出身の力士も増えており、外国人観光客が大相撲を楽しんでいる姿もよく見かけます。日本だけではなく、世界中で愛されているのは嬉しいことです。

相撲部屋の一日

午前 6:00	起床
6:30	稽古
11:00	風呂
12:00	昼ちゃんこ (昼食)
14:00	昼寝
16:00	掃除・トレーニング
18:00	夜ちゃんこ (夜食には鍋はつくらない、炒め物や煮物などをつくる)
21:30	門限・消灯

相撲が由来の言葉まとめ! アノ言葉も相撲が由来だった!

・揚げ足を取る	人の言い間違いや言葉尻をとらえて非難すること
・勇み足	調子づいてやりすぎたり仕損じたりすること意味
・大一番	今日の試験が大一番だ 出来事
・いなす	かわす・外す 拍子抜け
・受けて立つ	勝負する
・うっちゃり	投げ捨てる つまらない仕事うっちゃっつけ
・押し切る	強引な行動
・押しも押されず	強い
・押しの一手	無理にでも自分の意思を通そうとする
・同じ土俵に乗る	一堂に会する
・肩透かし	意気込んで向かってくる相手をまともに受けず上手くかわす
・勝ち越す・負け越す	勝ち負けの数が他方より多いこと 千秋楽での結果
・がつぶり四つ	物事を真っ向から取り組む様子
・ガチンコ・ガチ	ガチンと音がすることから真剣勝負を意味する
・かわいがる	稽古をつけ上達させる
・変わり身が早い	動きが早い
・禁じて	やってはいけないしぐさ
・金星	平幕が横綱に勝つ
・軍配が上がる	勝負が決まる
・腰砕け	後が続かない

- ・ごっちゃん 花(お金・品物)をいただく
- ・逆手に取る 逆な行動
- ・仕切り直し 転じて物事を初めからやり直す
- ・四十八手 決まり手の数の豊富さを表す
- ・死にたい 不可能と判断された状態
- ・勝負あり 決まる
- ・序の口 相撲番付の最下位の地位 (物事の始まりを指す)
- ・白星・黒星 勝ち負けを表す
- ・相撲にならない 優劣の差が多すぎる
- ・捨て身 身を捨てて事に当たる
- ・タニマチ 力士の後援会、スポンサー 大阪の地名谷町から出たもの
- ・ちゃんこ 食事全体
- ・土がつく 負ける
- ・てんでんばらばら 相撲が終わった際打ち鳴らす跳ね太鼓の音、観客がそれぞれの岐路に散っていく (てんでんばらばら)の変化
- ・土俵際 境界線
- ・どざえもん ふくれあがった水死体を、江戸の力士成瀬川土左衛門の色白の肥満体に見立てて言い出したものと言われている。
- ・泣き相撲 一歳児の子供の健やかな成長を願う神事
- ・猫だまし 意表を突く
- ・残る 勝負がまだ決まっていない
- ・番狂わせ 下位の力士が上位の力士に勝つ
- ・番付 順位表
- ・人の^{たぐい}禰で相撲を取る 他人の物を利用して自分の利益を図る。自分は犠牲を払わずに平気で人のものでことを行うたとえ
- ・独り相撲 神様を喜ばせ方策を願う江戸から明治にかけ大道芸として行われていた (神事として行われていた)
- ・懐が深い 相手に思うようにさせない
- ・札止め 切符の売り切れ、締め切る
- ・ぶちかます 体当たり
- ・^{たぐい}禰を締めてかかかる 十分に決心して取り掛かる。気持ちを引き締めて事に当たる
- ・星 勝敗の数 白黒星
- ・待ったなし 先に延ばすことができない、時間が差し迫っている
- ・物言いがつく 異議、抗議、言いがかり 意見がある

- ・満員御礼 入場者が一定の数に達した時 札止めにお礼を言う
- ・水入り 十両以上において、双方の力士が疲労などのために取り組みの進捗が見られない時に行事が審判の同意により取り組みを一時中断する 概ね3~4分と決まっている
- ・胸を貸す 一般には実力のあるものが下の者の練習の相手をしてやる。稽古をつけてやる
- ・八百長(八百屋の長兵衛) 八百長さんは大相撲の年寄り伊勢ノ海と囲碁の仲間、囲碁の実力は長兵衛さんの方が上、しかし商売上の目算からわざと負けて伊勢ノ海のご機嫌を取った
- ・脇が甘い 守りや用心が足りずに付け込まれる
- ・痛み分け 現在のルールでは片方がケガをして続行不可能になり、片方は元気で続行可能な場合には不戦勝・不戦敗となります。従って痛み分けでは、双方がケガをして取り組みの続行が不可能にならない限り起こりません
- ・一年を二十日で暮らす良い男 力士たちの暮らしぶりを歌った川柳です。現在の大相撲は年間6場所で各場所15日ですから年90日制ですが、江戸時代には相撲は年1度行われ、10日ほどしかありませんでした。そのうち春と秋の年2場所制になり1年を20日で暮らす良い男という言葉も生まれたようです。
- ・相撲を角力と言うのか 歌舞伎では角力と書くことの方が多い、中国では角^{かく}・角力とも呼ばれている。頭と頭でぶつかり合うものと、相手と組み合^あってねじ伏せるもの(相撲)が混ざって誕生したとされている。

相撲絵の力士たち～千葉県は相撲王国～

- ・ 幕場所、110年ぶり、新入幕優勝
- ・ 両国勇治郎

はじめに

- ・ 浮世絵
- ・ 錦絵（多色刷り版画）

1 浮世絵の世界

- 風景画 葛飾北斎「富嶽三十六景 凱風快晴」
歌川広重「東海道五十三次 日本橋朝の景」
- 美人画 喜多川歌麿「南駅は印」
- 役者絵・芝居絵
豊原国周「佐倉惣五郎子別れの図」
- 武者絵 歌川芳員「本朝名将鏡 平親王将門」
- 相撲絵 勝川春英「雷電為右衛門」

2 千葉県は相撲王国

(1) 4人の横綱

境川浪右衛門

- ・ 第14代横綱 市川市高谷出身
- 歌川国明「境川浪右衛門土俵入り之図」
- 歌川国貞「増位山大四郎」

ちょっとより道① 横綱って免許制なの？

- ・ 吉田司家

小錦八十吉

- ・ 第17代横綱 横芝光町出身
- 玉波「千葉小錦八十吉」
- 喜楽年昌「千葉小錦八十吉」



若島権四郎

- ・ 第21代横綱 市川市原木出身
- 「若島権四郎」
- 作者不詳「若島権四郎土俵入り之図」

ちょっとより道② 東京相撲、大阪相撲？

- 歌川豊国（三代）「勧進大相撲之図」

鳳谷五郎

- ・ 第24代横綱 印西市大森出身

ちょっとより道③ 千葉県は、本当に相撲王国だったの？

- ・ 明治5年3月場所番付
- ・ 川柳「一年を二十日で暮らす良い男」

(2) 鬼若力之助

- ・ 山武市出身 のちの勝の清与右衛門
- 歌川芳廉「鬼若力之助土俵入り之図」
- 歌川豊国（三代）「鬼若力之助」
- 歌川国芳「鬼若力之助」

(3) 奉納相撲

- ・ 船橋大神宮の奉納相撲
- 毎年10月 船橋大神宮（恵富比神社）境内
- 徳川家康に子ども相撲を見せたのが起源 「喧嘩相撲」

荒馬吉五郎

- ・ 船橋市本町出身 天保12年入幕 関脇 小柳と熟戦
- 歌川芳虎「荒馬吉五郎」
- 歌川国貞「稲川荒馬取組之図」

輝ヶ嶽光右衛門

- ・ 船橋市海神出身 文久2年入幕 前頭2枚目
- 歌川国貞（二代）「照ヶ嶽光右衛門」
- 歌川広重（二代）「下総舟橋大神宮」諸国名所百景



千葉県出身の幕内力士

No.	力士名	出身地	入幕年	最高位
1	浜風今右衛門	(上総国)	宝暦10年(1760)	前頭7枚目
2	大重子峰右衛門	芝山町小原子	宝暦11年(1761)	大関
3	戸田川鷲之助	鋸南町保田	明治7年(1870)	前頭2枚目
4	鬼面山与一右衛門	富里市中沢	寛政7年(1795)	大関
5	江戸ヶ崎馬五郎	(上総国南条郡)	寛政9年(1797)	前頭6枚目
6	荒飛蒼太夫	市川市湊	寛政10年(1798)	前頭4枚目
7	戸田川鷲之助	茂原市福島	文化5年(1808)	小結
8	荒馬大五郎	千葉市花見川区幕張	文化11年(1814)	関脇
9	大浜岩五郎	(銚子市かき取市)	天保4年(1833)	前頭7枚目
10	小松山富吉	佐倉市筑木町	天保6年(1835)	前頭5枚目
11	稲川政之助	佐倉市臼井	天保7年(1836)	関脇
12	小柳常吉	市原市上高根	天保11年(1840)	大関
13	房の海喜太郎	(安房国)	天保12年(1841)	前頭6枚目
14	荒馬吉五郎	船橋市本町	天保12年(1841)	関脇
15	桂野勇吉	栄町安食	弘化元年(1844)	前頭4枚目
16	姉川浪右衛門	市原市姉崎	安政元年(1854)	前頭8枚目
17	千田川吉蔵	銚子市	安政4年(1857)	前頭7枚目
18	待乳山福之丞	旭市萬歳	文久元年(1861)	前頭8枚目
19	照ヶ嶽光右衛門	船橋市海神	文久2年(1862)	前頭2枚目
20	境川浪右衛門	市川市高谷	慶応3年(1867)	横綱
21	小柳常吉	市原市岩崎	明治元年(1868)	関脇
22	泉ヶ鼻平助	館山市北条	明治元年(1868)	大関
23	磐石力勝	市原市養老	明治元年(1868)	前頭筆頭
24	佐野山幸吉	千葉市稲毛区園生	明治2年(1869)	前頭筆頭
25	高砂浦五郎	東金市大豆谷	明治2年(1869)	前頭筆頭
26	勝ノ浦与一右衛門	山武市戸田	明治5年(1872)	前頭筆頭
27	手綱山勝司	山武市上磯堀	明治5年(1872)	関脇
28	千羽ヶ嶽泰助	神崎町神崎本宿	明治10年(1877)	前頭筆頭
29	高見山宗五郎	九十九里町栗生	明治11年(1878)	関脇
30	小錦八十吉	横芝光町横芝	明治21年(1888)	横綱
31	大綱千代吉	船橋市馬込	明治24年(1891)	前頭筆頭
32	大蛇湯大五郎	市川市鬼越	明治25年(1892)	前頭筆頭
33	鳳凰馬五郎	習志野市津田沼	明治26年(1893)	大関
34	大見崎八之助	大綱白里市四木	明治27年(1894)	前頭2枚目
35	越り鉄五郎	山武市井之内	明治28年(1895)	前頭3枚目
36	若島徳四郎	市川市原木	明治29年(1896)	横綱

No.	力士名	出身地	入幕年	最高位
37	高見山照之助	銚子市若宮町	明治40年(1907)	関脇
38	紫雲竜吉之助	大綱白里市四木	明治40年(1907)	前頭筆頭
39	五所卓荷太郎	いすみ市御町	明治40年(1907)	前頭8枚目
40	鳳谷五郎	印西市大森六軒	明治42年(1909)	横綱
41	五十嵐敬之助	印西市大森六軒	明治43年(1910)	前頭4枚目
42	龍ヶ崎松太郎	大綱白里市四木	明治43年(1910)	小結
43	緋城祐光	市原市	大正5年(1916)	前頭17枚目
44	稲葉嶽光之助	市川市河原	大正5年(1916)	前頭14枚目
45	千葉ヶ崎俊治	富里市七栄	大正6年(1917)	大関
46	若葉山健	千葉市緑区平川町	大正9年(1920)	関脇
47	銚子源右衛門	銚子市本町	昭和6年(1931)	前頭14枚目
48	大ノ浜勝治	銚子市川口町	昭和7年(1932)	前頭4枚目
49	金渡仁三郎	船橋市金杉町	昭和9年(1934)	前頭5枚目
50	一渡明	我孫子市本町	昭和14年(1939)	前頭18枚目
51	竹旺山友久	銚子市仲町	昭和23年(1948)	前頭16枚目
52	神若津三	長生郡一宮町	昭和25年(1950)	前頭12枚目
53	松登晟郎	松戸市松戸	昭和26年(1951)	大関
54	星甲昌男	浦安市当代島	昭和30年(1955)	前頭4枚目
55	房錦勝比古	市川市相之川	昭和32年(1957)	関脇
56	若錦利正	木更津市文京	昭和36年(1961)	前頭3枚目
57	麒麟児和春	柏市中央町	昭和49年(1974)	関脇
58	岩波重広	木更津市畑沢	昭和52年(1977)	前頭8枚目
59	富士乃真司	船橋市高根台	昭和61年(1986)	前頭筆頭
60	琴富士孝也	千葉市花見川区長作	昭和63年(1988)	関脇
61	旭臺山和泰	市川市中国分	平成元年(1989)	前頭9枚目
62	小城ノ花昭和	市川市大野町	平成2年(1990)	前頭2枚目
63	大刀光電右衛門	千葉市花見川区検見川	平成4年(1992)	前頭15枚目
64	小城錦康年	市川市大野町	平成5年(1993)	小結
65	敷島勝盛	船橋市日の出	平成6年(1994)	前頭筆頭
66	翠龍宏央	市川市原木	平成8年(1996)	前頭筆頭
67	闘牙進	市川市香取	平成10年(1998)	前頭筆頭
68	若孜清気	市川市	平成13年(2001)	前頭12枚目
69	春日錦孝洋	いすみ市御町	平成14年(2002)	前頭5枚目
70	若荒雄匡也	船橋市	平成21年(2009)	小結
71	舩乃山大晴	印旛郡栄町	平成23年(2011)	(現役活躍中)
72	旭日松広太	野田市	平成24年(2012)	(現役活躍中)

【大相撲人物大事典】(「相撲」編集委員会 平成13年)を参考とした。

ちょっとより道④ 天保水滸伝

・飯岡助五郎と笹川繁蔵

歌川芳虎「於下総国笠河原競力并岡豪傑等大闘争図」近世水滸伝

歌川豊国(三代)「井岡の捨五郎」近世水滸伝

歌川豊国(三代)「笹川鼈蔵」近世水滸伝



ちょっとより道⑤ 一番強かった力士は?

雷電為右衛門

・明和4年(1767) 長野県生まれ 6尺5寸、45貫

・土俵生活24年、大関17年33場所、優勝25回、勝率962

・佐倉市臼井に墓

勝川春亭「雷電為右衛門」



3 市原出身の力士たち

小柳常吉

・上高根出身 本名高石桂治 墓は上高根・宝寿院

・嘉永5年11月大関に昇進 優勝6回

歌川豊国(三代)「小柳常吉」

歌川豊国(三代)「小柳・荒馬立合之図」



小柳常吉(春吉)

・岩崎出身 本名御藤納春吉 小柳(阿武松)の門人

・慶応4年入幕 関脇

歌川国貞(二代)「小柳春吉」

磐石力勝

・養老出身 本名古茶〇〇

・慶応4年入幕 前頭筆頭 美男力士

歌川国貞(二代)「磐石力勝」

緋城(ひおとし)祐光

・蕨出身 本名鈴木勇作

・大正5年入幕 前頭17枚目

姉川浪右衛門

・姉崎出身 嘉永7年入幕 前頭8枚目



国技である大相撲を知ろう

相撲とは

裸でまわしをつけ、素手の二人が土俵内で相手を倒すか、または土俵外に出すことによって勝負を争う競技、古くは武術・農耕儀礼、神事として行われた。平安時代には宮中の年中行事として行われ、室町時代に至っては職業力士が生まれ、近世になり土俵や決まり手禁じ手が定められ、一般に日本の国技とされる。

相撲と大相撲は違う

相撲と大相撲はよく似た言葉ですが、意味が全然違うことをご存知でしょうか、「相撲」というのは文字通り相撲という競技のこと、「大相撲」とは、日本相撲協会が主催する相撲興行のこと、例えていうなら野球とプロ野球の違いに似ています。すなわち相撲が野球で大相撲がプロ野球です。

明治期に文明開化が行われた影響で古臭い相撲は存続の危機に陥りましたが、天覧相撲が繰り返されたこと、そして天皇賜杯が下賜されたことが面目を保ちました。そして 1925 年に東京相撲・大阪相撲が合併し日本相撲協会が誕生、勸進相撲は大相撲へと受け継がれた。しかし大相撲はただのスポーツ興行ではありません。長い歴史の経緯もあって未だ神事としての側面を強く持っている。例えば両国国技館の土俵の上にあるつり屋根、これは天照大神を祀る伊勢神宮のご神木が使われている。

また、力士たちの所作にもそれぞれ意味が込められています。

- ・「四股」は地面に潜む邪悪などを封じ込める
- ・「力水」は身体を水で清める
- ・「塩まき」は土俵の邪気を払い清めケガのないよう神に祈る

これが相撲の長い歴史の中で徐々に養われたものであるが、実際に生で見るとものすごい迫力があることがわかります。単なる儀式というだけでなく、見栄えもするからこそ現代まで生き残ってきたと考えられます。

大相撲の力士になるにはどうするの？

1. 新弟子検査合格が第一の関門

力士になるためには、新弟子検査に合格しなければいけません。日本相撲協会の規則では、義務教育を終えた 23 歳未満の男子で、親の承諾書や本人の意思確認書などの書類を提出し、健康診断や検査に合格した者が採用される。

今の検査の基準は、身長 167 cm 以上体重 67 kg 以上です。中学を卒業する者が多く受ける春場所の新弟子検査は、中学卒業見込みの者に限って身長 165 cm 体重 65 kg 以上と少し基準が下げられている。

2. 新弟子は土俵で披露されて力士の仲間入り

検査に合格した新弟子は、本場所の土俵で一番下の階級の序の口の取り組みより前に新弟子同士で相撲を取る、これを前相撲と言います。そして親方や兄弟子の化粧まわしをつけて本場所の 8 日目に土俵で披露されます。次の場所から晴れて番付に名前が載りますが、序の口は四股名の文字が小さいから「虫眼鏡」という別名もありました。

3. アマチュア相撲優勝者の規定

アマチュア相撲の 4 大会優勝者

- ・アマチュア横綱
- ・学生横綱
- ・実業団横綱
- ・国体横綱

この 4 つのタイトルの内 1 つを取って 1 年以内の者を幕下 15 枚目各からスタート、また 4 大会で準々決勝に進出した者は、1 年以内は三段目(最下位)でスタートするという優遇措置がある。

相撲の階級

1. 相撲の階級と定員数

階級	定員数
・幕内	42 名
・十両	28 名
・幕下	120 名
・三段目	200 名
・序二段	なし
・序の口	なし

相撲の力士は、階級によって扱いが大きく変わると言われていますが、そもそも大きく変わる階級の境目は十両以上です。ちなみに幕下以下は、力士ではなく力士養成員です。力士養成員は下記の事柄で処遇が異なります。

- ・月の給料の支払いがない
- ・取り組み数が少ない
- ・大銀杏がゆえない
- ・化粧まわしをつけての土俵入りができない
- ・まわしの材質が違う
- ・タオルが使えない

そうしたことに加え、力士養成員は力士(十両以上)の世話や部屋の雑用などをしなければなりません。

化粧まわし: 相撲で関取衆が土俵入り用に使うエビ¹⁰ロンのような美しい回し。後援会などが昇進を祝って贈ることが多い、帯の生地幅は日本婦人の丸帯と同じ 68cm であるが、

長さは2倍近い6m~7mもある。化粧まわしは、(締め込み)から分化したものとされ、元禄年間(1688~1704)頃に色絹、色地紋に刺繍が施された締め込みで取り組みが行われていた。しかし、刺繍糸が手指に絡むので締め込みから分離し、土俵入り専用の「化粧まわし」に作られた。天明年間(1781~1789)頃には現在とほぼ同じ化粧まわしが確立した。

気になる化粧まわしの値段: 最低でも100万円は下ることはなく、数百万円から高いもので数千万単位のものも珍しくないというから驚きだ。史上最高額を記録したのは、元大関若嶋津関の化粧まわしだった。後援会から贈られたというその化粧まわしは、前垂れにデザインされた鷲の足に10カラットのダイヤモンドが織り込まれており、総額なんと1億5千万円という驚愕の値段だった。

相撲の格付け

相撲には、階級の他に下記に挙げる格付けがある。

- ・横綱
- ・大関
- ・関脇
- ・小結
- ・前頭
- ・十両
- ・幕下二段目
- ・三段目
- ・序二段
- ・序の口

格付け最高位は横綱、そして大関、関脇、小結は三役と呼ばれている。

力士の給料

相撲の力士は年俸制ではなく、それぞれの格付けで決められた給料が毎月支払われる。そのため階級や格付けが上がれば貰える給料は増え下がれば減ります。ちなみに支払われる給料の全額は時代によって異なっています。今回は現代の相撲の階級(格付け)別に給料をまとめました。

階級	給料
・横綱	300万円
・大関	250万円
・関脇	180万円
・小結	180万円
・前頭	140万円

十両

110万円

十両以下の力士は、力士養成員のため毎月の給料の支払いはありません。

この月額支払われる給料の他に、優勝すれば賞金1,000万円を獲得、活躍すれば殊勲賞・敢闘賞・技能賞それぞれ200万円が授与される。

その他、力士報奨金という仕組みもあります。この金額も格付けによって異なる。

力士養成員は毎月の給料は貰えないが、その代わり本場所ごとに(年6回)場所手当の支給がある。この場所手当は

- ・幕下二段目 16万5千円
- ・三段目 11万円
- ・序二段 8万8千円
- ・序の口 7万7千円

また勝ち星と、勝ち越し星によっては、幕下以下奨励金も場所ごとに貰える。

他に幕内力士は、取り組みにスポンサーから懸賞金が出れば、その取り組みで勝てば懸賞金を獲得可能、また平幕が横綱に勝って金星をあげた場合には、その力士に4万円(金星1つにつき)が支払われる。

懸賞は1本6万2千円。日本相撲協会が事務経費として5千300円を取り、力士の所得税にあてるため、預かり金が2万6千700円です。力士が実際に受け取る金額は、懸賞1本につき3万円です。

番付表とは

相撲における力士の番付は、場所の結果で上下する。上下した新たな格付けは、次の場所前に番付表で発表される。番付表が発表されるのは、本場所前ですから、年に6回発表されることになる。

階級を上げるには

相撲は場所で勝ち越すことで階級の順位(何枚目)が上がり、負け越すと下がります。

そして、格付けは筆頭(順位が一番上)で勝ち越せば、格付けが上がり格付けが最下位で負け越すと1つ下の格付けになります。つまり勝ち越しの数が多ければ多いほど番付の上がり方は大きく、逆に負け越しの数が多ければ多いほど番付の下がり方は大きくなるということ、同じ格付け内の順位は勝ち星が基準です。

特殊な条件

[横綱]

相撲で横綱の階級に上がるためには、大関の地位で2場所連続優勝かそれに準ずる成績を満たすことが条件、また単に場所での成績が良かっただけではなく、横綱に相応しい相撲内容であることも条件です。

その条件を満たしている力士の昇進を相撲協会の理事長が、相撲審議委員会に諮問し横綱審議委員会が該当の力士の横綱昇進を検討、その検討で横綱審議委員会の推薦を受けると、相撲協会が正式に横綱昇進を決定する。

ちなみに2場所連続優勝の場合は無条件で、それに準ずる成績の場合は、委員の3分の2以上の賛成があれば横綱昇進に推薦されるのが通例です。

一度横綱に昇進すれば場所で負けても(場所休場)大関に陥落しない。

【大関】

相撲では小結・関脇の階級から直近の3場所での勝ち星の合計が33勝以上することが大関昇進の条件、陥落の条件は負け越しですが、場所で負け越してもすぐに陥落というわけではありません。負け越した次の場所は角番という状態となりこの角番となった場所で、さらに負け越すと関脇に陥落してしまいます。角番場所で勝ち越せば角番が取り消されます。

また関脇に陥落した場所で10勝すると再び大関に返り咲くことができます。

【関脇・小結】

相撲では関脇と小結の階級の定数はあります。(東西1人ずつ)

そのため現在その格付けにいる力士が負け越して陥落するか、関脇の力士が大関に昇進しないと下の格付けにいる力士が、どんなに勝ち越しても昇進することはありません。

このように関脇と小結には、大関や横綱と比較しても厳しい条件が課せられることがあります。

土俵入りとは

大相撲では、大勢の力士が土俵をぐるりと囲む様子を見たことがないだろうか、これは観客に力士を紹介する顔見世「土俵入りという儀式」土俵入りのとき、力士たちはそれぞれのとっておきの化粧まわしをつけて土俵に上がる。この土俵入りが行われるのは2回、十両取り組みの前に十両力士全員が、そして幕内の取り組み前には大関から前頭の幕内力士が行う。だがこのとき力士の最高位である横綱は、この土俵入りには顔見世をしない、大相撲では特別な階級があり、横綱には「横綱土俵入り」という特別な土俵入りが用意されています。

横綱土俵入り

横綱土俵入りは、幕内力士の土俵入りが終わった後に行われる。行事を先頭に真っ白な綱を腰に締めた横綱が、露払い・太刀持ちという力士二人を従えて土俵に上がる。この露払いと太刀持ちは、横綱と同じ部屋の幕内以上三役以下の格付けの力士が担う。部屋に力士が不足している場合は、一門から務めることもある。

露払いは、土俵入りの際に横綱の前を歩く、かつて武将や大名がいた時代には梅雨で濡れた草花で主人が濡れて汚れないように主人の前を歩く役割である「露払い」をする家臣がいた。横綱土俵入りの露払いも同じ役割であり横綱を土俵まで先頭する役目を持つ、一方の太刀持ちは、武将の後ろで刀を持って控えていた家臣や小姓に由来する。横綱土俵入りの際にはタケミツが使用される。

横綱は武将大名に匹敵する特別な存在なのである。土俵に上がる横綱を中央に、向かって左に太刀持ち、右に露払いが並ぶ、横綱は拍手を打ち、右足で四股を踏みせり上がる。左足で四股を踏み、の順で行う。四股を踏む際には観客から「よいしょ」と掛け声が上がるのが横綱土俵入りの定番であり盛り上がりのポイントでもある。

又、土俵入りでは四股踏みの間に行われるせり上がりの方、そして腰に締める綱の形が異なる2つの形がある。それが雲竜型・不知火型です。

土俵入りの型

① 雲竜型

せり上がる際に左手を胸のそばに持っていき、右手を伸ばして行う型が「雲竜型」だ、かつて雲龍久吉という力士が行っていた土俵入りの形を起源とされる。又、綱の結びは輪を一つだけ作る。 貴乃花・朝青龍・鶴竜・稀勢の里・豊昇龍

② 不知火型

不知火型は、不知火光右衛門という力士が行っていた土俵入りのスタイルが由来とされている。せり上がりの際には両手を伸ばすのが特徴で両手を広げ低い体勢からダイナミックに上がるため、大柄な力士が行うと迫力のあるせり上がりとなる。綱の結び目は輪を2つ作るため不知火型の綱は雲竜型のものより重くなる。

日馬富士、白鵬、照ノ富士

最後の勇姿「引退相撲」の土俵入り

横綱は、たとえ何度負け越しても大関に陥落することはない、だが陥落のリスクがないからといって衰えても横綱を続けてよいわけではない、もちろん横綱に上り詰めた力士は誰一人としてそんな甘い考えはない、自分の衰えを感じたとき潔く引退することで、自身の横綱としての名誉と誇りに報い、そして大相撲への敬意を示すのだ。

現役を引退し年寄を襲名した元横綱が引退相撲を行う際、断髪式の前に最後の横綱土俵入りが行われる。これが横綱としての最後の晴れ姿となる。

長寿のお祝い 還暦土俵入り

現役時代横綱を経験した力士が、還暦を迎えた際に行われるのが還暦土俵入りであり、いわゆる長寿のお祝いなのだ。世間一般で還暦といえば「赤いちゃんちゃんこ」といわれているが、この還暦土俵入りでは赤い綱が使用されている。還暦を迎えた時に親方として日

本相撲協会に属している場合は、両国国技館で開催されるが、それ以外の場合は別の場所で行う。最後に行われたのは、2015年5月に行われた故千代の富士貢(当時の九重親方)の還暦土俵入りだ。この時の露払いを日馬富士関、そして太刀持ちを白鳳関の横綱二人が務めた。

現在の相撲部屋数 45 部屋

浅香山・朝日山・安治川・荒汐・雷・伊勢ヶ濱・伊勢ノ海・追手風・阿武松・大島・大嶽
押尾川・音羽山・尾上・春日野・片男波・木瀬・九重・境川・佐渡ヶ嶽・式秀・鍛
芝田山・高砂・高田川・武隈・田子の浦・立浪・玉ノ井・出羽の海・時津風・常盤山
中村・鳴門・西岩・錦戸・二所ノ関・八角・放駒・秀の山・藤島・二子山・湊・武蔵川
山響

相撲部屋での外国人力士の枠

原則的に1部屋1人と決まっている。

日本に帰化して拔け道を利用する部屋があったので、現在は帰化しても外国出身力士は1部屋1人です。部屋が閉鎖されてすでに外国出身力士がいる部屋と合併するときは、例外的に2人いても認められる。また北青鵬のように入門前に日本に10年以上の居住実績があると、日本出身力士として扱われます。(北青鵬はモンゴル生まれですが、5歳から北海道に移住しており北海道を出身地にしています)

相撲はいつから始まったの？歴史と由来について

相撲の歴史はとても古く、神話の時代にまでさかのぼると言われています。古事記や日本書紀の中にも、相撲の取り組みと考えられる力くらべの話が出てきます。

古事記では、建御雷神(タケミカズチノカミ)建御名方神(タケミナカタノカミ)という2人の神様が力くらべをしたと記されている。

神話の時代天照大御神(アマテラスオオミカミ)が出雲の国を自分の領土にしようと武御雷神(タケミカズチノカミ)を使わし、出雲の国の大国主命(オオクニノミコト)に領土を差し出すか、国を滅ぼされるかの二択を迫りました。

その話を聞いた大国主命(オオクニノミコト)の息子のひとり建御名方神(タケミナカタノカミ)が武御雷神(タケミカズチノカミ)に力くらべを挑み出雲の国を守ろうとしますが負けてしまい、その時の傷がもとで命を落としたというものです。

日本書紀では、大和の国当麻蹴連(タイマノケハヤ)という怪力の持ち主と出雲の国の力自慢の野見宿弥(ノミスクネ)という男2人の対決の話が出てきます。

当麻蹴連(タイマノケハヤ)はこの世の中に自分と互角に力くらべができるものはいないと豪語しており、この話を聞いた垂仁天皇(スイニンテンノウ)紀元前23年7月7日に宮中で対決することとなりました。現在の相撲とは異なり、お互い蹴り合うことで決着をつけるもので、野見宿弥(ノミスクネ)の蹴りにより肋骨や腰の骨を碎かれ当麻蹴連(タイマノケハヤ)は亡くなりました。これが、日本最古の天覧相撲と言われています。

最初のころ相撲は、農作物の収穫を占う儀式や感謝の儀式として行われており、神事として行われていたようです。8世紀の初め頃から宮中で相撲が行われていたと考えられていますが、記録に残っているのは734年です。古事記

奈良時代(710年~794年)の734年7月7日に聖武天皇が日本書紀の当麻蹴弥(タイマノケハヤ)と野見宿弥(ノミスクネ)の古事にちなみ諸国から相撲人を集め宮中で相撲を取らせた。日本書紀以降では、これが天覧相撲の最も古い記録です。後にこの天覧相撲は相撲節会(スモウセチエ)という公式行事となり毎年7月7日に七夕の宮中行事として開催され、およそ400年続きました。

鎌倉時代(1185年~1333年)になると源頼朝が相撲を奨励しました。このころの武家社会では神事としてよりも、武士が心身鍛錬や戦闘訓練を目的として相撲が行われるようになり、武家相撲とも呼ばれた。1189年源頼朝は鶴岡八幡宮で上覧相撲(将軍が観戦する相撲)を開催するなど相撲が盛んにおこなわれた。

室町時代 1333年~1573年には各地の大名がすもうの強いものを家臣として取立たり相撲見物を楽しむようになり、中でも相撲が大好きだった織田信長は、各地から力士を集め相撲を楽しみ、土俵の原型を考案したと言われている。

江戸時代(1603年~1868年)になると相撲を職業とする人たちが現れ勸進相撲が行われるようになった。

勸進相撲とは、神社や寺の修繕・建築の募金を目的とした相撲のことで、江戸・大阪・京都を中心に日本各地で行われていた。この勸進相撲が現在の大相撲の原型と考えられており次第に庶民の楽しみの一つとなっています。その後大相撲として様々なルールが決められ、スポーツとしての形態を整えました。

明治時代 1868年~1912年になると日本相撲協会が誕生し勸進相撲は大相撲となり現在に至ります。

相撲の歴史が神話の時代にまでさかのぼるとは驚きました。日本で誕生し、とても古い歴

史があったものなので、日本の国技と思うのも自然なことだったのかもしれませんが。現在は、海外出身の力士も増えており、外国人観光客が大相撲を楽しんでいる姿もよく見かけます。日本だけではなく、世界中で愛されているのは嬉しいことです。

相撲部屋の一日

午前 6:00	起床
6:30	稽古
11:00	風呂
12:00	昼ちゃんこ (昼食)
14:00	昼寝
16:00	掃除・トレーニング
18:00	夜ちゃんこ (夜食には鍋はつくらない、炒め物や煮物などをつくる)
21:30	門限・消灯

相撲が由来の言葉まとめ! アノ言葉も相撲が由来だった!

・揚げ足を取る	人の言い間違いや言葉尻をとらえて非難すること
・勇み足	調子づいてやりすぎたり仕損じたりすること意味
・大一番	今日の試験が大一番だ 出来事
・いなす	かわす・外す 拍子抜け
・受けて立つ	勝負する
・うっちゃり	投げ捨てる つまらない仕事うっちゃっとけ
・押し切る	強引な行動
・押しも押されず	強い
・押しの一手	無理にでも自分の意思を通そうとする
・同じ土俵に乗る	一堂に会する
・肩透かし	意気込んで向かってくる相手をまともに受けず上手くかわす
・勝ち越す・負け越す	勝ち負けの数が他方より多いこと 千秋楽での結果
・がつぶり四つ	物事を真っ向から取り組む様子
・ガチンコ・ガチ	ガチンと音がすることから真剣勝負を意味する
・かわいがる	稽古をつけ上達させる
・変わり身が早い	動きが早い
・禁じて	やってはいけないしぐさ
・金星	平幕が横綱に勝つ
・軍配が上がる	勝負が決まる
・腰砕け	後が続かない
・ごっちゃん	花(お金・品物)をいただく

・逆手に取る	逆な行動
・仕切り直し	転じて物事を初めからやり直す
・四十八手	決まり手の数の豊富さを表す
・死にたい	不可能と判断された状態
・勝負あり	決まる
・序の口	相撲番付の最下位の地位 (物事の始まりを指す)
・白星・黒星	勝ち負けを表す
・相撲にならない	優劣の差が多きすぎる
・捨て身	身を捨てて事に当たる
・タニマチ	力士の後援会、スポンサー 大阪の地名谷町から出たもの
・ちゃんこ	食事全体
・土がつく	負ける
・てんでんばらばら	相撲が終わった際打ち鳴らす跳ね太鼓の音、観客がそれぞれの岐路に散っていく (てんでんばらばら)の変化
・土俵際	境界線
・どざえもん	ふくれあがった水死体を、江戸の力士成瀬川土左衛門の色白の肥満体に見立てて言い出したものと言われている。
・泣き相撲	一歳児の子供の健やかな成長を願う神事
・猫だまし	意表を突く
・残る	勝負がまだ決まっていない
・番狂わせ	下位の力士が上位の力士に勝つ
・番付	順位表
・人の ^{たぐひ} で相撲を取る	他人の物を利用して自分の利益を図る。自分は犠牲を払わずに
	平気で人のものでことを行うたとえ
・独り相撲	神様を喜ばせ方策を願う江戸から明治にかけ大道芸として行われていた (神事として行われていた)
・懐が深い	相手に思うようにさせない
・札止め	切符の売り切れ、締め切る
・ぶちかます	体当たり
・ ^{ふだ} を締めてかかかる	十分に決心して取り掛かる。気持ちを引き締めて事に当たる
・星	勝敗の数 白黒星
・待ったなし	先に延ばすことができない、時間が差し迫っている
・物言いがつく	異議、抗議、言いがかり 意見がある
・満員御礼	入場者が一定の数に達した時 札止めにお礼を言う

- ・水入り 十両以上において、双方の力士が疲労などのために取り組みの進捗が見られない時に行事が審判の同意により取り組みを一時中断する 概ね3~4分と決まっている
- ・胸を貸す 一般には実力のあるものが下の者の練習の相手をしてやる。稽古をつけてやる
- ・八百長(八百屋の長兵衛)八百長さんは大相撲の年寄り伊勢ノ海と囲碁の仲間、囲碁の実力は長兵衛さんの方が上、しかし商売上の目算からわざと負けて伊勢ノ海のご機嫌を取った
- ・脇が甘い 守りや用心が足りずに付け込まれる
- ・痛み分け 現在のルールでは片方がケガをして続行不可能になり、片方は元気で続行可能な場合には不戦勝・不戦敗となります。従って痛み分けでは、双方がケガをして取り組みの続行が不可能にならない限り起こりません

- ・一年を二十日で暮らす良い男

力士たちの暮らしぶりを歌った川柳です。

現在の大相撲は年間6場所で各場所15日ですから年90日制ですが、江戸時代には相撲は年1度行われ、10日ほどしかありませんでした。そのうち春と秋の年2場所制になり1年を20日で暮らすいい男という言葉も生まれたようです。

- ・相撲を角力かくりきと言うのか

歌舞伎では角力と書くことの方が多い、中国では角かく龍りゅう・角力とも呼ばれている。頭と頭でぶつかり合うものと、相手と組み合
ってねじ伏せるもの(相撲)が混ざって誕生したとされている。

1. 国号起源説話

『飯香岡八幡宮由緒本記』

夫飯香岡御宮古語傳記に曰、上麻と云國號を發る根元を茲に顯す。

抑皇國は 天照皇太神の御國にして、天下安國と平けく所知食時、國中に荒振神等、皇太神の御意に不_ニ叶賜、天磐戸に隱座賜ば、六合の内常闇と成、諸の神等神集に集賜、神議に議給て、天磐戸の廣前にて天の神樂を奉_レ奏、八尺鏡八坂の曲瓊、青幣白幣、大麻を磐戸の廣前に鍔調備て祓清め、天津神は天磐戸を押開、天八重雲を伊豆の千別に千別て、天磐座を放出賜、此時 天照皇太神は右の大麻を觀覽座て勅宣曰、其太麻は能上麻なり、何國より生出しと叡慮座時に、天津神は東なる邦より生出しと返言申しき、從_レ是而上麻の國と號すと云々、又其時天兒屋根命・太玉命猶悅賜て、此大麻は勝し麻なりと宣ふに由て、生出し所を勝麻と號すと云々。

イ、『古語拾遺』

天_{あめの}富_{とみ}命_{のみこと}、更に沃_よき壤_{じやう}を求_まぎて、阿_あ波_はの齋_い部_{みべ}を分_わち、東_{あづま}の土_{つち}に率_{あつ}往_ゆきて、麻_{あし}・穀_{こく}を播_は殖_{しよく}う。好_よき麻_{あし}生_おふる所_{ところ}なり。故_{ゆゑ}、總_{ふさ}國_{くに}と謂_いふ。穀_{こく}の木_き生_おふる所_{ところ}なり。故_{ゆゑ}、結_ゆ城_{じやう}郡_{ぐん}と謂_いふ。〔古語に、麻_{あし}を總_{ふさ}と謂_いふ。今上總_{かみつひさ}・下總_{しもつひさ}の二國_{ふたくに}と爲_なす、是_{こゝろ}なり。〕阿_あ波_はの忌_い部_{みべ}の居_をる所_{ところ}、便_{すなは}ち安_あ房_{ふさ}郡_{ぐん}と名_なづく。〔今_{いま}の安_あ房_{ふさ}國_{くに}、是_{こゝろ}なり。〕天_{あめの}富_{とみ}命_{のみこと}、即_{すなは}ち其_{その}地_ちに太_ふ王_{わう}命_{のみこと}の社_{やしろ}の立_たつ。今_{いま}安_あ房_{ふさ}社_{しゃ}と謂_いふ。故_{ゆゑ}、其_{その}の神_{かみ}戸_こに齋_い部_{みべ}氏_し有_あり。又_{また}、手_た置_お帆_ほ負_お命_{のみこと}が孫_{まご}、矛_ほ竿_{さん}を造_たる。其_{その}の裔_{すえ}、今_{いま}分_われて讃_{さめ}岐_ぎ國_{くに}に在_あり。年_{とし}毎_{まい}に調_{みづ}庸_{よう}の外_{ほか}に、八_や百_{ひやく}竿_{さん}を貢_{たてまつ}る。是_{こゝろ}其_{その}の事_{こと}等_らの証_{しるし}

なり。

ロ、『帝王編年記』

安閑天皇御宇二箇年〔…是歲四月。建_ニ上總國_ニ。〕

ハ、藤原宮後出土木簡

己亥年十月上掾國阿波評松里

2. 日本武尊伝承

『飯香岡八幡宮由緒本記』

其後飯香岡と號する根元は、人皇十二代景行天皇御宇、日本武尊東夷御征伐の時、上麻の國に御降臨座て御影山に御着陣被_レ爲_レ在、則小高き岡に爲_レ上給て、四方の景色を上覽被_レ爲_レ有所至て、景勝無雙の靈地にて、海面漂々として靜浪の音鼓の聲を發、松風森深として琴の音を起、遙々として武藏・相模・駿河の富士、筑波の山陰海水に浮、魚岸に踊景色有、尊是を御覽被_レ爲_レ在、猶御感悅不_レ斜良時刻を移し給ふに依て、官人等酒飯を調奉_レ進ば、尊殊の外御悅賜て宣く、此飯の香至極宜しと宣ふ、依て此勝地を飯香岡と可_レ謂と宣ふ、是より飯香岡と號す、其以前は御影山郷と號す、則產神の社有_レ之、祭神は、大日靈貴尊、伊弉諾尊、伊弉冉尊三柱の太神御鎮座の靈地也。

ニ、『古事記』中卷

其_{それ}より入_いり幸_{さい}でまして、走_は水_{みづ}海_{うみ}を渡_{わた}ります時に、其_{その}の渡_{わた}り

の神、浪を興たてて、船廻ひて、得進み渡りまさず。爾に其の後、名は弟橘比賣命白したまはく、妾御子に易りて海中に入りなむ。御子は所遣の政遂げて、覆奏したまふべし、とまをして、海に入りまさむとする時に、菅八重、皮疊八重、絶疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪自ら伏ぎて、御船得進みき。爾れ其の後の歌はせる御歌、「さねさし、相摸の小野に、燃ゆる火の、火中に立ちて、問ひし君はも。」故れ七日ありて後に、其の後の御櫛、海邊に依りたりき。乃ち其の櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。其より入り幸でまして、悉に荒ぶる蝦夷等を言向け、亦山河の荒ぶる神等を平和して、還り上幸ります時に、足柄の坂本に到りまして、御糧食す處に、其の坂の神、白き鹿に化りて來立ちき。爾れ其の昨遺の蒜の片端以て、待ち打ちたまひしかば、其の目に中りて打ち殺さえたりき。故れ、其の坂に登り立ちて三歎かして、「あづまはや」と詔りたまひき。故れ其の国を阿豆麻とは謂ふなり。

ホ、『萬葉集』卷一

高市岡本宮御宇天皇〔舒明天皇〕の代

天皇、香具山に登りて望國しませる時の御製歌
やまとにはむら山あれど取よろふ天の香具山のぼり立ち國見を爲れば國原は煙たちたつ海原はかまめたちたつうまし國ぞ蜻嶋やまとの國は

ヘ、『日本書紀』卷第七〔景行天皇〕

五十三春秋八月、丁卯朔、天皇、群卿に詔して曰

はく、朕、愛子を顧ぶること、何日にか止やむ。冀はくは小碓王の平むけし國を巡狩むと欲ふと。是の月、乘輿、伊勢に幸して、轉りて東海に入ります。冬十月、上總國に至る。海路より淡水門に渡りたまふ。是の時に覺賀鳥の聲聞ゆ。其の鳥の形を見さむと欲して、尋ねて海中に出でます。仍りて白蛤を得たり。是に膳臣の遠祖、名は磐鹿六鴈、蒲を以て手繼に爲て、白蛤を膾に爲りて進る。故れ六鴈臣の功を美めて、膳大伴部を賜ふ。

ト、『常陸國風土記』

郡の東十里に桑原岳あり。昔、倭武天皇、岳の上に停留りたまひて、御膳を進奉りき。時に水部をして新に清井を掘らしめしに、出づる泉淨香くて、飲み喫ふに尤好かりしかば、勅曰りたまはく、能く淳れる水かな。是に由りて、里の名を田餘と謂ふ。

チ、『萬葉集』卷一

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇〔雄略天皇〕の代

天皇の御製歌

籠もよみ籠持ちふぐしもよみふぐし持ち此の岳に菜摘ます兒家聞かな名告らさね虚見つ大和の國は押しなべて吾こそ居れしきなべて吾こそ坐せ我こそは告らじ家をも名をも

リ、『日本書紀』卷三 神武天皇

行きて筑紫國の菟狹に至ります。時に菟狹國造の祖、號

を菟狹津彦・菟狹津媛と曰ふもの有り。乃ち菟狹の川上に
一柱、あしひとのあがりのみや騰宮を造りて饗奉る。是の時、みことのり勅して、菟狹津媛
を以て、侍^{おほまつぎみ}臣天種子命に賜妻せたまふ。天種子命は是
れ中臣氏の遠祖なり。

2. 漂着神伝承

『飯香岡八幡宮由緒本記』

御神告に由御遷座

人皇五十八代宇多天皇御宇寛平六年甲寅年、當郷青野ヶ原に
奉^ニ鎮座^ニ所の御神靈、神慮に不^ニ叶給^ニ御託宣被^レ爲^ニ在、宣告
に曰、吾は是神風伊勢國百傳五十鈴の川上に坐猿田彦太神也、
國家安泰、五穀豐饒、惡魔降伏の爲茲に顯る、此地狹し、速
に太神の廣前に可^レ有^ニ遷座^ニと宣ふ、由て命の任乞賜に、早
速飯香岡へ御遷座被^レ爲^ニ有、則八幡宮御相殿に奉^ニ鎮座^ニ猿田
彦太神也、則神代の御面相を奉^ニ移し、天兒屋根命の御眞作
に座すと云々。

附、其昔當郷の人百傳度逢縣の振御影詣の時、都浪岐の社の
太神御神告被^レ爲^ニ有處、不測成哉其夜御鼻高の御神面故有て
度逢縣の海中に入と見えしか、忽浪中に隱座て不^ニ顯賜^ニ、里
人等歸國の後、當郷青野ヶ原に光生座賜ふ、靈驗不測の御神
體也。

人皇六十二代村上天皇御宇康保三寅年二月、當浦海上俄に覆
曇、風雨頻に起立、此時獵船周章騷、小船の者共元船一艘に
乗移り、漁夫等二十八人の者共艫械押立逃退むと欲、途を失

ひ難風の中に漂流し山海の見分無、更逆浪既に船中に溢入、
人命危可^レ凌手段盡果、一心不亂に當宮八幡太神を奉^レ祈所、
神明不測の御冥助船中に放^レ光賜ふ、忝も天神の御姿爲^ニ赫奕
と^ニ顯賜^ニて御神告被^レ爲^ニ有、吾社は筑紫に生坐菅家の神靈也、
年曆海中に漂事久し時成哉、汝等薄命を救むため今茲に現也、
速に大宮へ遷座可^レ有と御託宣也、依^レ之魚夫等大い悦奉^ニ感
拜^ニ所、不測成哉忽ち風雨晴渡不^レ思も八幡宮鳥居前に着船す、
漁夫等奉^レ敬、早速神官馳着御神體を奉^ニ拜見^ニに御姿彌高に
座、速に宮殿へ奉^ニ遷座^ニ、其後康保四卯年二月、御神託被^レ
爲^ニ在に由て天神社御相殿に奉^ニ鎮座^ニ、天神宮是也、神明不
測の御神像可^レ奉^ニ崇敬^ニ太神也。

因に曰、人皇六十代醍醐天皇延喜二戌年二月、菅原道眞公故
有て筑紫へ御配遷被^レ爲^ニ成賜ふ、依て其汚穢を爲^ニ拂む^ニ御自
身に御像を御眞作被^レ爲^ニ有、則身被^レして海中に御流し賜ふと
云々。

又、『上総八幡町八幡宮伝記』

古老傳へて曰く、人皇四十代天武天皇御宇白鳳二癸酉年彌

生はじめつかた、我が朋友中郎・麻野・某^{それがし}中嶋三人共に。

藤^{かじぬまのおか}瀧岡の櫻花最盛りにて溪水に移る影を詠て終日ものが

たらひける折から、中嶋がいはいく、是より都に登り古跡の
神社へ詣でて、猶まめやかならば筑紫のかたをも巡拜せば
やと思ふなり。各々如何とありければ、中村麻野兩人答へ
けるは、いやしくも中嶋氏の申さるる事と十一日來とくと
くと用意せむとて旅費の賄とり結び途出するとして、まづ阿
須波社に詣でて當郡防人帳丁諸人が庭中小柴祭など思ひ出
して神酒すゑまつり傘傾けて發足し、先づ東海の道すがら

違ひ行く。程なく帝都に至り神社巡拜恙無く、それより關西に下り筑前國御笠郡宮崎の八幡宮に詣でて干満二珠の古跡を拜し敬禮尊崇祈願のこらじ、歸國の後我が國へ大明神を齋祀奉り長く神拜奉り、希はくは神驗とたへ給へと、丹誠を抽き通夜し奉る程に、その夜不思議の神告を蒙る狀は、神前の太玉籤と楊の神楯を賜り是を汝等に授くと。正しく夢想ありける。これにより我々三人共に信心肝に銘じ伏し拜みける中に、かかる示現ましまして宜く汝等早く此の地を立去るべし、しなれば則ち楊の楯を筏となし神寶を遷しまるらせ、冀はくば東國總洲市西縣袖ヶ浦手長の磯に着せ給へと、心念祈願のこめ流しける。それより三人歸路を急ぎ、この年八月十一日、千々の葉の繁るおいみの港過ぎて、漸く我が上總驛大前に着し久々間森より高良の嶋を馬手に見て白松の丘に至り、黄昏に及び程なく阿須波社に詣て奉賽して、我が故郷に歸る道すがら、磯吹く風に蒼野が原の蘆草の靡く入江に奇く光り見えけるゆゑ、近寄り見れば筑紫にて流したる神璽なりければ各々悦び限りなく、翌十二日藤瀧岡に假殿を營み齋祭し奉る。同じ四年乙亥八月十五日より蒼野が磯の鹽の干満を宮崎の干満二珠の神寶に表し、繁茂の蘆草刈り拂ひ、下つ網根を掘り揚げて宮地を定め宮祠を造營して遷宮し奉りけるとなむ。故に貴賤歩行を運び倡仰のかうべを傾けざるはなし。その後歲霜八十四年を歴て四十六代孝謙天皇御宇天平勝寶元己丑八幡宮神託して京に向ひ常に神田を請ふ。これにより同二庚寅年八百戸を封す。同八丙申年帝の寢殿廳裏に承り、天下太平の四字自ら生ず。かくの如く再三の神託に依り帝都尊敬斜めならず、尙、諸國に於いて尊崇嚴重なれば此の所に於いて能き

宮地を撰み尊崇三度あり。野を市原郡上丁刑部直千國が教諭に就き、諸人戮力今の社地に再び額づき遷座し奉りける。この時國の君の家士日高彈正忠より過分の金穀寄進せられて宮柱太敷く建てるものなり。

ル、『神名帳考証土代』

往古、鄰村五所村の人都に至りて、ある神祠にて神像を奪ひ立退けるが、追手の者にせまられて、せんかたなきままに五所の浦に着玉へと祈念して、像を海中に投入けり。さて、其人國に歸らぬさきに、五所の海中に毎夜光る物あり。歸國の後、其よしを聞て網をおろすに、はたして像を得たり。即、其地に祭る（此地を、今は元八幡と稱す）、其後（白鳳二年と云ふ）今の地に移す。今に至るまで五所の人いたらざれば、神輿を出すことあたはず。此地國分寺に近きゆゑに、しばしば官使往來の便に隨ひて大社となると云り。今、御朱印地なり。

ヲ、『八幡宮御縁起』

冷泉院天喜年中、手長の沖に當て夜毎光明あり。直に八幡宮の本社を照らす（別當寺號神光山靈應寺と號す、この儀に因るなり。一に若宮寺といふものは菊間若宮八幡宮兼滯すればなり）。里人恐怖して夜に至れば海濱に出る者なし。

爰に三人の宿老あり。代々八幡宮に給使し奉り。親族のごとくにぞ暮しぬ（今中島中村淺野三黨の祖と云ふ）。或日共に評議し一夜小舟に乗じて海上に浮びけるに例の如く光焰赫奕として水陸ともに朗なり。則ち其の處に望み棹さ

し到りぬれば光り忽然として消ぬ。時にただ一個の神面波上近く浮べるあり。三翁大に疑惑せるうち虚空に聲ありて曰く、我々皇基守護神船玉命なり（一名猿田彦命と申奉る）。汝等往年宇佐宮へ參籠せし時、廣前に刻める我が面かかれりけるを私に奪へり。祠官是を知りて頻に追へるにより、卒に海中に投入去ぬ。其の時もし靈驗あらば吾儕が本國へ流れ寄せんと誓へるにあらずや、今縁熟して此に漂着せり。猶太神の廣前に掲よと雲に響嵐に答へて聞へたり。三翁奇異の思ひをなし急ぎ執上奉ぬ。翌日國主日高彈正朝光へ斯と訴へぬ。餘もまた今曉の靈夢を蒙しに符號せりとて則數多の金銀米穀等寄附なし奉りぬ。此に於て三翁速に修理匠にはかり先八幡宮再興造營におよび不日に功成ぬ。既に遷宮の日湯の花捧るに臨て、太神乙女の袖にうつらせ給ひて曰く、我和光の塵に交り末世の輩凶事災障を消除せんと誓願せり。今又我が廣前に船玉命を配祀する事の悦し、いよいよ民生の繁盛五穀豐饒を得さすべしと神託ありける。參詣の老少信心渴仰し實に有難くぞ覺えける（廣前の面鼻高く在すゆゑ、村童等稱して鼻高八幡と申奉る。實は猿田彦命なり）。

4. 神体山伝承

ワ、『八幡宮御縁起』

僧行基衆生化度のため天下を巡行の時、此の地を經歷、偶某の寺に説法し給ふ。道俗化を慕ひ咸く來て拜禮聽聞す。時に戴冠の異人あり。來たりて石上に坐し給ふ。僧正謹て

君は何地より渡らせ給ふと問奉りけるに、異人答て曰く我は此のわたりなる廣幡麻呂なり。師の説法の殊勝なるに感じ正に如來の本誓に力を添へんが爲なりとなん。此に於いて僧正驚かせ給ひ急に柳樹を削て楯のごとく成し給ひ、神の御後を立覆ひ給へば、異人莞爾と笑はせ給ひ須臾にかき消ごとく失せ給へり。土人恭敬し乃ち亦此に勸請し奉り、攝待に麥の餉を供す（今郡本八幡宮市原八幡宮は此時の安置なり。今市原村に麥飯面の畑あるは此の故なり）。僧正の柳楯を作り獻ぜしを太神の武を掌らせ給ふを以てなり。爾來祭祀に柳楯を備るを例とす（今藤井村守公山楊柳寺神主院、之を司る。寺號其の義に因るなり。太神影向石、今現に市原村藥師堂前に在り。意に行基は本、和泉國藥師寺僧なり。故に後人藥師堂に安置するものか）。

カ、『光善寺藥師如來縁起』

然る所に方三尺の輕石あり、毎朝に戴冠の異人此石の上に座せり。行基此を御覽有りて、何國より御來たり候と問はせ給へば、「我は是八幡大神なり。菩薩の御説法聽聞のため、且又如來の本誓に力を添へんが故に、毎朝此石上に來る」とのたまへり。行基聞こし召し喜意の思ひにて麥の飯に柳の箸を奉る。此の箸を御持參と見えけり。

それより氏子共八幡宮の祭禮には、柳のたてと名付け八幡へ捧げ奉り、彼の石を影向が石と號し、誠にあらたかなる瑞石と萬民是を貴み給ふなり。其上、御本尊を末世の尊崇利益として祕佛奉るなり。光善の二寺を寺號として光善寺と號け、結縁利生の爲に三十三年に一度御開帳はある者なり。

明治十九年、漢学者三島中洲の千葉県市原郡来訪
 一三島中洲著『南総応酬詩録』、山下亀吉著『陪遊録』から一

東洋大学東洋学研究所客員研究員
 博士 (文学) 辻井 義輝

一. はじめに

『南総応酬詩録』『陪遊録』

・・・明治十九年六月出版。三島中洲が今富村の千葉禎太郎に招かれて、次男・三島広、門下生山下亀吉 (後、千葉昌胤)、同門下生千葉貞吉 (禎太郎長男) を伴い、市原郡八幡村、今富村、宮原村、新生村、町田村などを訪れ、觴詠 (酒を飲み、詩歌をうたう) した際の出来事を漢詩文で綴ったもの。三島中洲著「南総応酬詩録」本編に、山下亀吉 (後、千葉昌胤) 著「陪遊録」が附録として付けられたかたちで出版された。原典は、国会図書館デジタルコレクションで読める。

研究は、拙稿「三島中洲、藤森天山、小永井岳、巖谷一六、川田甕江らと千葉県旧市原郡の文人たちとの交流 1~7」『江戸風雅』。



山下亀吉『陪遊録』(国会図書館蔵)



三島中洲 (『二松学舎百年史』)

三島中洲 (天保元年~大正八年)

備中国 (現岡山県) に生まれる。備中松山藩の山田方谷、伊勢津藩の齋藤拙堂、江戸の昌平黉で学ぶ。昌平黉では高杉晋作と同期。明治十年 (四十八歳)、邸内に家塾「二松学舎」 (初名「経国文社」) を興す。明治十四年、この頃までに二松学舎は年々拡張し、柳塾、本塾、梅塾の三校舎体制となる。学生数は、総計約三百名に及び、福澤諭吉の慶応義塾、中村敬宇の同人社とともに、三大塾と称せられる (1)。この春、山下亀吉 (後の千葉昌胤) 入塾。夏目漱石も同じころに入塾。明治二十九年六月、東宮侍講となる。明治天皇崩御後は、宮内省御用掛として、実質上、侍講を職務とする。大正八年、死亡。 (2)

中洲の漢学

陽明学者として著名。「義利合一説」「忠孝一致」説を主張 (3)

中洲の文学史的位置

中洲は詩文も優れる。日本文学史においては、明治後半までは、漢文学がメインストリーム。仮名文学はサブ。中洲はその漢文学なかでも卓越した存在。

→中洲は文豪クラス

山下亀吉 (後、千葉昌胤) について

山下家

・かつて現市原市八幡 1047 番地、古くは現市原市八幡 1009 番地に居住。子孫は、明治後半に八幡を出て、札幌市に移住している。

・初代源唐明 (正暦四年—993 没) が、天慶九年 (938) に「東州二下り上総國八幡山ノ下二住ス飯香岡八幡宮ノ祠官二任セラル」。以下、昭和初期の段階で、歴代四十二代に渡っている。

・江戸末期では、飯香岡八幡宮 (高百五十石) の社家十家 (市川、今井、市川、大野、市川、松本、宮好、宮好、山下、大井) のうちの一家で、高六斗四升三合であり、祝子 (はふりこ) 職を務めていた。

・歴代、教養のある人物が続いた。・・・俳句、和歌。



飯香岡八幡宮

二松学舎大学所蔵千葉昌胤書簡



山下亀吉 (後、千葉昌胤) の生涯

・慶応二年二月、山下賢治 (堅治) 唐信 (明治十八年七月二十一日没) とくめ (後に、きく) との間に、三男として誕生。

・明治十四年春、二松学舎に入学。明治二十年頃、今富村の千葉禎太郎 (すでに、姉のみつが嫁いでいた) の養子となり、「千葉昌胤」 (号、鹿峯) と名乗った。明治二十四年五月以降、二松学舎幹事・助教などを務めた。

・明治二十七年十月、井上馨の幕僚の一人 (度支部所属) として朝鮮に随行した。明治三十年代前半、帰国し、明治三十九年秋にも、第二回渡韓を遂げ、警務顧問本部勤務を経て、韓国宮内省奎章閣、さらには朝鮮総督府中枢院嘱託として、朝鮮王室の図書整理を業務とするかたわら、佐藤六石、松田学鶴、金允植 (玉養)、鄭万朝 (茂亭)、呂荷亭 (圭亭)、李載克、金榮漢らと文学的交流を重ねた。

・現在のところ、詩 百四十三首、文 二十三篇、評 十六作、詩文集『陪遊録』一冊、講演「孟子を読む」一篇、編著『利剣 (後に新寸鉄と改題)』一冊、書簡 四通を発見。

山下亀吉 (後、千葉昌胤) の人柄と文学

昌胤は、独特のユーモアを有し、陽気な人物であった。さらに、学生当初は、陸軍士官学校志望者の一人だったらしく、昌胤には意気軒昂な面もあった。また、高いプライドを有する人物でもあり、苦境に陥っても、常に前向きに立ち向かい続ける人物であった。昌胤の文学の特色は、①まず、典雅で美しく、絢爛としていて、高い品位を有するところ。しかし、②それは決して貴族趣味的な軟弱なものではなく、力強く、雄健なものであった。次に、③平明な読みやすいタイプではなく、むしろ、じっくり読み込んで、詩意を解き明かさせる性質を有するタイプであった。また、④描写力が極めて秀でており、対象の空気感をも伝えるほどであった。その上で、⑤昌胤は誠に多芸多才な技量を発揮した。



金允植 (『朝鮮紳士名鑑』)

山下亀吉（後、千葉昌胤）の評価

昌胤は学生の時から、文才に秀で、二松学舎中でも「よほど文章に巧みで少年名文家を以て聞え斬然儕輩に擢てゝ居た」と評されたりして、その才能は、すでに確定的な評価を得ていた。

その文学は、とりわけ第二次渡韓後に円熟を迎え、朝鮮末期の文豪金允植に「詩中の虎（漢詩界の虎）」と絶賛されたり、ジャーナリスト釈尾俊彦に、「漢文家としては京城で唯一人者であるのみか、東都に於ても屈指の一人であつた」と評されたが、大正七年三月二十三日に急死した。

二 明治十九年三月二十四日

・今富村の千葉禎太郎が中洲のもと（現、二松学舎大学構内）を訪れ、迎えにきた。当時、亀吉も学舎内の寄宿舎に住んでいたようだ。



二松学舎本塾のおもかげ（『二松学舎大学百年史』）

明治二十年代初頭の千葉禎太郎



千葉禎太郎

弘化四年、今富村の本陣・問屋名主根本家（後、千葉姓に改める）に生まれる。江戸に赴いて鷺津穀堂に学んだ。帰郷後は、今富村名主、戸長などを経て、明治十二年、県会議員となった（翌年まで）。明治二十一年、再び県会議員に就き、明治二十三年七月、第一回衆議院議員に当選して以後、第四回まで連続当選し、その後、第七回（明治三十五年八月）、第九回（明治三十七年三月）、第十回補欠選挙（明治四十二年七月）に当選した。その間、千葉県農工銀行頭取に就任するとともに、明治四十一年には、神国生命保険株式会社を創業した。各地の鉄道会社創立にも関わった。昭和六年四月二十一日没。

三 明治十九年三月二十五日

・小雨が降っていて寒いなか、夜明け方に、三島広、千葉貞吉と亀吉が馬車に乗って先に立ち、ついで中洲と禎太郎が人力車に乗って出発した。

・中洲は東京を立つと、ほどなくして、以下のように詠った。

僅出都門眼界清 僅かに都門を出れば眼界清し
満郊薺麥翠雲横 満郊 薺麥に翠雲横わる
一株隔水白如雪 一株 水を隔て白きこと雪の如し
非是残梅定早櫻 是れ残梅に非ざれば定めし早櫻か

（都の出口を出るや、すがすがしい視界が広がった。野外には至るところで麦畑が広がり、その上に青い雲がよこたわっていた。水沢地を隔てたところに、一本の木が雪のように白く浮かんで見えた。この木は残梅でなければ、早桜でもあったろうか。）

・「陪遊録」によれば、船橋に着くと、小雨模様が転じて、空から太陽が覗くようになり、東は麦畑や菜の花畑が、西は海原に伊豆・相模の山々が映りあい、さながら絵画のようであったという。そこで、亀吉は詠った。

菜黄麥緑一邨邨 菜黄麥緑 一邨邨
山欲眠時水欲奔 山は眠らんと欲する時 水は奔らんと欲す
風景天然靈活處 風景 天然に靈活なる處
詩乾坤又畫乾坤 乾坤を詩い 又た乾坤を畫く

（どの村を通っても、菜花の黄色と麦の緑色で満ちている。山は眠りそうであるのに対して、水は進らんとしている。目に写る風景はあるがままに活発でいきいきしている。[そこで] 至るところを詩に歌い、さらに、至るところを絵に描いた。）

・「陪遊録」によれば、亀吉らは午時（十二時～十四時）に千葉町に着き、一旦、仲兄の陵吉のもとを訪れ、酒肉の款待を受けた。
・それから、市原郡八幡宿に着き、山下家（対潮舎）に至り、ここで中洲らを待つこととした。
・伯兄与五郎は文学を好み、何度も門外に出ては、中洲の到着を待ち望んだ。



明治期の山下家の面影（市川本店提供）



無量寺内山下賢治墓

・この間、亀吉は去年に父賢治を失ったため、無量寺に墓参に赴いた。その墓参の際の想いを、亀吉は以下のように詠う。

供罷蘋蘩感有餘 蘋蘩を供え罷りて 感 餘有り
廿年蝶夢枉蓬蓬 廿年の蝶夢 枉に蓬蓬す
一言泣報黄泉下 一言 泣いて黄泉下に報ず
兄解勤家弟讀書 兄は解く家を勤め弟は書を讀むと

（[墓石に] 御供えをすると感慨があふれた。[亡父との] 二十年の[暮らしは] 夢に他ならなかったと悟った。泣きながら、あの世に一言、報告をした。兄は家のために働き、弟は学問をしていますと。）

・ほどなく、申時（十六時から十八時）に中洲らが到着すると、中洲らは亀吉らから茶や菓子の款待を受けた。その後、山下家の裏には当時築山があり、そこを登ると、「花木は瀟洒として、之に登り遠山を望む。俯しては海に近く、風致は絶佳なり」という趣であり、中洲は以下のように詠った。

遠島如眉隔海雲 遠島 眉の如く 海雲 隔つ
漣漪遠檻疊綾紋 漣漪 檻を遠りて綾紋を疊める
訪君始信居移氣 君を訪ね始めて信ず 居の氣を移すを
養出平生流麗文 平生流麗の文を養い出す

山下家築山の名残（市川本店提供）



(遠くの島が、海上に眉のように掛かった雲に隔てられている。さざ波が欄干を囲んで重なり合って、綾模様をなしている。君のもとを訪れて、初めて『孟子』でいう「環境が人間のあり方を変える」という語を信じることができた。

[このような人間があって、はじめて、君の] 日頃の流麗な文が養い込まれるのだから。)

・この賦詩を受けて、亀吉も以下のように次韻した。

水自吐煙山吐雲 水は自ら煙を吐き 山は雲を吐く

此如青黛彼如紋 此は青黛の如く 彼は紋の如し

貧家別占風光富 貧家 別して風光の富を占む

欲博先生錦繡文 先生が錦繡の文を博んと欲す

(水は煙を吐き出し、山は雲を吐きだしています。一方は青黛(青黒いまゆ墨)のようで、他方は紋様のようです。

[私の実家は] 貧家でありながら、格別に、景観の豊かさを有しており、先生の絹織物のような美しい文章を獲得しようとしているのです。)

・暫らくして、一行は、山下家を立ち、黄昏(午後七時から九時)に、今富村千葉禎太郎邸に着いた。

今富千葉家



千葉禎太郎邸宅(『千葉県史』中巻、二六六。)

・今富村で代々名主を務め、慶長十五年以来、久留里脇往還の本陣・問屋を務めた。

・千葉胤富の長男・千葉精胤(〜1640)に始まるとされる名家。

・歴代当主・・・六代・根本清胤(荻生徂徠に師事。領主・松下家の家政・領内の管理、いずれも細大漏らさず管理し、以後の当家の模範となった。)。九代・根本孝胤(文化二年、給人格および代官役に就く。文化五年、用人役に就く)。十一代・根本宣胤(大田錦城、鵜矢鹿門に師事。村民間に係争が起きると、一言で物事の本質を突いて問題を解決した)。十二代・根本祐胤(鵜矢鹿門に師事。江戸に赴いて、有職故実家松岡行義に小笠原流を学ぶ。文久元年、大庄屋に就く。慶応四年、主簿に移り、中士に列せられる)。十三代・千葉永胤(禎太郎)(4)

・中洲は千葉家が千葉氏の子孫であり、また、禎太郎が非常に親孝行で、何度も褒賞を受けたことを知り、感動して、以下のように詠んだという。

曾抛弓馬把鋤犁 曾て弓馬を抛ちて鋤犁を把り

十世綿綿守古棲 十世綿綿として古棲を守る

拔地奇巖當戸聳 地を抜く奇巖は戸に當りて聳え

參天喬木與雲齊 天に參わる喬木は雲と齊し

不須紫綬印三寸 紫綬印三寸を須たずして

自有素封田百畦 自ずから素封の田、百畦有り

尤喜傳家家訓好 尤も喜ぶ、傳家の家訓の好きを

幾旌孝順里門題 幾か孝順を旌し、里門に題す

(かつて[当家の先祖は] 弓と馬を捨てて、すきを執り、十代に渡り延々と、昔ながらの屋敷を守ってきた。地上から抜きでた奇岩は入口を見下ろすように立ち、天にそびえる高木は雲と等しく高い。国から召し出されずとも、[当家は] 富裕な百畦もの田畑を有する。とりわけ嬉しいことは、当家伝来の家訓が素晴らしいことだ。その孝行ぶりは、村の入口にいくたびも表彰された。)

・しかし、「陪遊録」によれば、千葉邸に赴く旅程は、養老川を渡って以降が相当の苦勞を強いられたらしい。日が暮れるにつれ、雨が降るようになり、道がでこぼこになって、車夫も乗客もへとへとになってしまった。そこで、その日は、千葉邸に着くなり、心ゆくまで酒を飲んで、すぐ就寝したという。

三. 明治十九年三月二十六日

・三月二十六日の朝になると、一行は禎太郎に導かれ、その自邸「梅花村莊」を散策したという。

・昼を過ぎると、禎太郎は、土肥石斎、鵜矢信一郎、佐久間元三郎、元吉元平、伊藤宣太郎、小出廉平ら十数人を自邸に招き、皆でともに酒を交わしたという。

土肥石斎

文政十年生。名は実匡。江戸詰の鳥取藩士。塩谷宕陰に学んだ。維新时期は、各地に至って、攘夷救長の講策に努めた。慶応三年、太政官に召され、さらに明治四年、山梨県令となったが、翌年八月に山梨県内に起きた騒動の責を負って、六年一月、免職。以後、消息不明。のち、同二十三年六月、元老院議員に挙げられ、後、小田原に閑居し、池田家の依頼によって鳥取藩史編纂に従事した。明治三十三年、小田原に死亡した。

この「南総応酬詩録」本編から、消息不明であった明治十九年に、旧市原郡今富村に寓居していたことがわかった。

向此記之非能記也。不能不記也。然則不立二人之傳者其不足爲遺憾也明矣。
復山下通言
家世著書曰。聖朝。銘不。欲。示人。豈。爲。精。進。左。右。遠。征。手。跡。也。是。下。何。爲。由。此。言。也。僕。評。是。下。之。文。者。因。學。時。夫。千。葉。君。之。讀。也。非。偶。亦。爲。之。偶。提。綱。之。而。讀。古。人。皆。惜。日。不。足。豈。求。而。評。足。下。輩。之。文。以。消。費。重。光。陰。乎。足。下。不。欲。使。之。而。何。以。自。足。之。其。取。之。而。無。一。語。今。日。之。神。而。不。取。而。云。乎。足。下。不。欲。廣。示。人。而。經。僕。之。則。非。僕。之。罪。足。下。其。論。諸。千。葉。君。所。示。府。君。之。稱。呼。例。及。先。考。府。君。之。出。處。兵。讀。且。思。不。能。默。々。而。世。傳。明。而。書。所。陳。死。後。尊。神。之。稱。曰。府。君。者。非。性。稱。父。也。若。若。尊。神。曾。曾。尊。神。之。非。性。父。也。然。則。也。於。他。人。亦。稱。之。而。稱。吾。之。父。考。曰。父。考。稱。人。之。父。考。亦。曰。父。考。不。特。足。不。特。示。子。之。以。公。而。公。則。稱。子。之。之。府。君。君。墓。也。亦。然。然。則。先。人。曰。府。君。而。爲。父。死。後。尊。神。之。稱。也。不。長。官。先。而。足。下。何。々。多。言。也。前。書。所。陳。稱。子。厚。先。傳。即。史。府。君。神。道。崇。敬。使。從。他。人。墓。地。之。何。則。當。曰。傳。史。先。府。君。神。道。崇。敬。以。先。人。之。墓。地。故。以。先。字。而。傳。史。上。也。足。下。曰。父。死。曰。考。則。諸。小。數。記。古。人。稱。用。之。生。前。亦。多。矣。又。引。說。文。而。曰。由。此。觀。之。考。字。爲。父。考。

・「陪遊録」によれば、この酒宴が終わった後、中洲はかつて自分が詠んだ「柴原議官宅看梅近作二律」を取り出し、亀吉に欠韻を命じたという。柴原議官とは千葉県初代知事の柴原和のこと。これに対し、亀吉は以下のように詠んだという。

陪遊何幸共清歡	陪遊 何の幸か清歡を共にす
又借梅林仔細看	又 梅林を借りて仔細に看る
風磬欲敲香雪墜	風磬 香雪を敲きて墜さんと欲し
苔根渾訝老龍蟠	苔根 渾べて訝かる 老龍の 蟠 るかと
野人於禮淡如水	野人は 禮に於て淡きこと水の如く
夫子之言幽似蘭	夫子の言は 幽なること蘭に似たり
此景此情皆道味	此の景 此の情 皆な道味あり
居然忘却世途酸	居然として世途の酸きを忘却す

柴原和（『千葉県の歴史』通史編近現代1）



（「この度、」風雅の楽しみを一緒にさせて戴いて、何と幸運なことでしょう。さらに、梅林を詳らかに見せて戴くことにもなりました。風鈴は、梅香る雪を叩き落とさんばかりに鋭く響き、苔のついた根は、老竜がとぐろを巻いているのではと驚くほどです。田舎者の私の礼儀は、水のように淡々としていますが、先生のお言葉は、味わい深く、蘭の花のように香しいものです。この景色、この情趣、すべてに隠棲の道に通じる味わいがあります。ここにいるだけで、人生の辛さを忘れてしまいます。）

一座新知與舊知	一座 新知と舊知と
酒三行後眼迷離	酒 三たび行われて後 眼は迷離す
梅花逢雨有矜色	梅花は雨に逢うて 矜色有り
山態隨雲無定姿	山態は雲に隨うて 定姿無し
所愧才疎吟易苦	愧る所は 才 疎くして 吟ずるに苦しみ易し
更兼腕弱筆難奇	更に兼ね 腕は弱く 筆は奇とし難し
自嘲自解君聴取	自ら嘲り自ら解す 君 聴取せよ
曾學文章不學詩	曾て文章を學ぶも 詩を學ばず

（同席者には、初見の方も顔見知りの方もいます。酒が三遍すると、視界がぼんやりしてきました。梅の花は雨に逢って誇らしげに咲いています。山のかたちは雲の動きにつれて一定ではありません。お恥ずかしいのは、[私が] 才能に乏しく、詩を詠むのに苦労することです。同時にまた、力量に欠け、優れた書を書き残すことができません。自ら嘲り、自ら言い訳する、この言葉を聞いて下さい。かつて散文は学びましたが、詩は学ばなかったのです。）

・この日の晩は、千葉邸で鴛矢信一郎と同宿した。

鴛矢信一郎書の幟



鴛矢信一郎

名は元彰。号は東洋。今富村名主・根本宣胤の三男で、すでに今富村で一家を構え、胤久と名のっていたが、文久二年、海保村の漢学者鴛矢鹿門の養子・元忠の急死をうけ、急速、養子として、妻子ともども海保村鴛矢家に迎え入れられた。信一郎元彰はその後、江戸期に名主、明治以後には、学区取締、地租改正総代人を務めた。能書家で知られ、多くの漢詩や金石文を残し、地域を代表する文化人として知られた。書家巖谷一六とは深い親交を有した。明治二十八年死亡。

巖谷一六

天保五年、近江国に生。水口藩士。維新後、内閣書記官、元老院議員、貴族院議員などを歴任した。明治十三年、清から楊守敬が来日後、日下部鳴鶴、松田雪柯とともに金石学を基礎とした六朝期の書法を学び、独自の一六流を確立した。明治三十八年死亡。



巖谷一六（平凡社提供）

・この際、信一郎は、巖谷一六の詩をもってきた。

欽君世外傲神仙	欽ぶ 君 世外に神仙傲るを
紅葉青山占別天	紅葉 青山に別天を占む
更約春風好時節	更に約す 春風の好時節
梅花香裏又同眠	梅花香裏に 又た眠を同じうせんことを

（信一郎さんが世に超然として、神仙のように誇り高いのを尊敬します。[見渡せば] 紅葉が青色をなす山々に映え、別天地を成しています。さらに、春風の吹く良い時節、梅の花が香るうちに、再びともに眠ることを誓います。）

・この一六の詩に中洲は以下のように次韻した。

洒然風骨似神仙	洒然として風骨は神仙に似たり
曾遇紅塵堆裏天	曾て紅塵堆裏の天に遇う
何料竹深梅密處	何ぞ料らん 竹深く梅密なる處に
同床一夜與君眠	床を同うして 一夜 君と眠らんとは

（[あなたの] あっさりとしたその風格は神仙を思わせます。かつて都会の塵が積もった空の下でお会いしましたね。[しかし、] 奥深い竹林と密集した梅林のなか、同じ寝床で一夜、あなたと眠るなどとは思ひもよりませんでした。）

・「陪遊録」からは、亀吉もこの中洲の次韻に倣って詩を詠んだことが窺える。

幾生修到小神仙 幾生か 修めて小神仙に到る
占斷乾坤以外天 占斷す 乾坤以外の天
夢裏珊珊環佩響 夢裏 珊珊として 環佩 響く
月團圓處抱花眠 月の團圓たる處 花を抱えて眠る

〔鴉矢さんは〕なんだか生まれ変わることで、ちょっとした神仙になり、俗世間以外の世界をも占め得ている。〔夜になって、鴉矢さんと寝ていると、私には〕夢うつの中、シャンシャンとおび玉が鳴り響く〔のが聞こえた〕。〔そうしたなか、私は〕月がまるまるしている下、花を抱きつつ眠ったのだ。〕



山下亀吉「四望皆宜亭記」(『新文詩』別集二十六号)

四. 明治十九年三月二十七日

・一行は、宮原村前原地区の元吉元平邸「観稼楼」に招かれた。中洲によれば、中洲はすでに元平と鷺津穀堂邸で面識があったらしい。



元吉元平邸宅(『千葉県博覧図』中巻、二六八。)

元吉元平(左写真、『千葉県議会史議員名鑑』)

天保元年、宮原村前原地区の元吉家に生まれた。沈雄寡言で、行実虚飾を喜ばない人物であったという。峰島来山の塾で句読を受け、さらに、月岡一郎に従って槍剣の術を学んだ。藤森天山にも学んでおり、「観稼楼」の名は、藤森天山につけてもらった。さらに請西郡方役所において名主役を命じられ、ほどなく郡中取締役に転じ、ついで中小



姓金穀主宰となった。慶応三年に、請西藩主林昌之助忠崇が官軍に反旗を翻すと、すぐさま身を起こして東奔西走し、官軍に逆らわないように説諭したが、容れられなかった。養老川の戦いの際は、金穀主宰として請西の陣屋を守っていた隙をつかれ、備前藩士たちに自宅の家財を略奪され、家屋も焼かれた。維新後、割元役、戸長などを経て、明治十三年、県会議員に補欠選挙に立候補して当選、以後三回にわたって連続当選を果たした。明治三十八年没。

元平は、学問・書画に深い趣味を有したといわれる。大槻磐溪、森春濤、川田甕江、巖谷一六、鷺津穀堂らはたびたび往来し、食客として長く逗留する者も少なかった。また、最後の朱子学者といわれる並木栗水(現多古町出身)も、明治二十一年十一月十六日から翌月二十五日まで、南総各地を歴訪した際、元吉家に立ち寄っている。



林忠崇(中村彰彦『脱藩大名の戊辰戦争』)

鷺津穀堂

文政八年生。尾張丹波郡人。伊勢で猪飼敬所に、さらに江戸で昌平黌に学ぶ。嘉永六年、久留里藩に招かれたが、文久中、同藩を辞し、尾張藩明倫堂教授、ついで督学となり、学政を掌った。明治初年、登米県の権知事などとなった。明治十五年、死亡。永井荷風『下谷叢話』によれば、元平の長女とわは、明治六年十二月一日、鷺津穀堂の長男精一郎に嫁いでいる。また、精一郎ととわには子がなかったため、永井荷風の弟貞次郎がその養子になったが、その貞次郎に元平の養子之和の娘・史が嫁いでいる。



鷺津穀堂(永井荷風『下谷叢話』)

・「南総応酬詩録」によれば、当日「観稼楼」に招かれた中洲は、以下のように詠んだという。

晩霽來登観稼楼 晩霽 來りて登る 観稼楼
溝渠春漲水如油 溝渠 春 漲りて 水 油の如し
一望二十余村落 一望す 二十余村落
想見黄雲・・秋 黄雲・・の秋を想見す

〔日暮れ時、晴れ渡ったなか観稼楼に登った。〔ふもとを見れば、〕水路は春になって溢れんばかりになり、水は油のようにつやつやしている。二十余村を一望のもとにみて、秋には、黄色い雲のもと稲穂がゆらぎ動くのだろうとおもった。〕



永井荷風(秋庭太郎『考証永井荷風』)

・「陪遊録」によれば、この詩は「観稼楼」に招かれて、そこからの絶景を目にした後、着座するなり、中洲から、すぐさま口をついて出た詩なのだという。この詩を受け、亀吉もその場から退いたのち、以下のように次韻している。

醉對春風倚書樓 酔うて春風に對し 書樓に倚る
繞田綠水漲如油 田を繞る綠水 漲りて油の如し
定知花謝鶯啼處 定めて知る 花謝り 鶯啼く處
笠雨蓑煙遇麥秋 笠に雨さし蓑に煙り 麥秋に遇うを

〔酒に酔い、書樓に寄りかかって、春風にあたっていると、〔眼下では、〕田圃を巡る綠水が漲って、油のようにつや

つやしている。花が散り、ホトトギスが鳴いているところは、きっと麦が熟する頃には、雨が降り、煙がもやるなか、笠や蓑をつけた農民たちが動きまわるのであろう。)

・「南総応酬詩録」によれば、さらに、この時、園内は老梅が盛りだったらしく、中洲が、土肥石斎が詠んだ詩韻を用いて、以下のように詠んだという。

故人迎我弄春華 故人 我を迎えて春華を弄せしむ
 昨飲南家今北家 昨は南家に飲み 今北家
 一洗都門塵俗氣 一えに洗う 都門塵俗の氣
 風流三日醉梅花 風流三日 梅花に酔う

(旧友がわたしを迎えて春の花々を見せてくれるという。[そこで] 昨日は南の家で飲んだのだが、今日は北の家で飲んでいる。都会の塵にまみれた気分を丸洗いして、風流のなか、[私は市原郡に来て] 三日間、梅花を目にして酔っている。)

・その後、夜になると、一行は千葉家に帰って就寝したという。



五 明治十九年三月二十八日

・三島一行は、同日晩に、新生村の佐久間元三郎邸に酒宴に招かれた。「陪游録」によると、亀吉は佐久間邸に至る道すがら、以下のように詠んだという。

桃菴杏村西又東 桃菴杏村 西又東す
 吟眸都在畫圖中 吟眸 都て畫圖の中に在り
 多情堪羨還堪惜 多情 羨むに堪え、還た惜むに堪う
 春事年年屬野翁 春事 年年 野翁に屬す

(桃花に囲まれた菴や、杏花に蔽われた村が、西に見えたり、東に見えたりしている。目に写る光景は、全て絵画の世界だ。感受性豊かな者は、どうして羨まないでいられようか、あるいは、惜しまないでいられようか。春の作業は、くる年もくる年も農民のものなのだ。)

・佐久間邸に到着した時は、すでに暮れ方になっていた。

佐久間元三郎邸宅(『千葉縣博覽圖』中巻、二六七)



第4表 千葉県大土地所有状況(明治23年)

	推定所有 総反別 (すべて 水田とし て換算) (1)	所有地 所在 郡数 ()内 は村数 (2)	郡名	居村	所有地 中居村 所在地 反別 (3)	比率 (4) (1) (3)	地租総額 (5)	所得税		業
								土地ノ利 益ヨリ生 ズル分 (6)	商業ノ利 益ヨリ生 ズル分 (7)	
1 菅井与左衛門	町 116.41	1 (1)	香取郡	佐原町	0.186	0.1	円 1,075.677	円 28.710	円 29.310	醤油・酒造
2 吉岡七郎兵衛	78.28	2 (11)	下埴生、香取郡	香取中郷村	21.56	27.5	763.904	18.963	0.094	農
2 佐久間元三郎	74.18	1 (4)	市原郡	海上村	47.21	65.0	743.659	19.98	—	農
4 征矢善四郎	71.74	1 (4)	市原郡	東海村	32.29	45.0	715.295	21.45	—	農
5 佐久間帯刀	62.55	1 (7)	望陀郡	中郷村	53.31	85.2	691.059	24.225	—	農
6 高橋喜惣治	59.52	3 (12)	上埴生、長柄、市原郡	上埴生、長柄、市原郡	31.06	52.0	655.203	17.310	—	農
7 五十嵐敬止	70.49	1 (2)	香取郡	多古村	68.98	97.8	651.353	15.87	—	農

新生村佐久間家

代々、新生村(同心給地領)の名主を務めた家で、元三郎の祖父で、名主を務めていた安五郎安卿は、文政三年、割元名主格に任命されている。また、元三郎の父従平信美(旧分目村岡田成美次男)は、文学を亀田綾瀬、武術を久須美閑適斎に学び、和歌を大国隆正から習い、安政三年には、割元名主格、明治二年には割元名主に任命されている。

佐久間元三郎

嘉永四年生、諱は信賢。戸長、海上村長を務めた。明治二十三年には、七百六十三円六十三銭九厘の税を納め、貴族院互選資格を得ている。丹羽邦男はここから逆算して、当時の当家の所持水田は、千葉県下第三位の七十四、一八町歩だったと推論している。元三郎は、製糸会社社長、銀行取締役、鉄道会社監査役、炭鉱会社社長、活版印刷社長などを務めるかたわら、明治三十年二月、第五回衆議院議員選挙に立候補、落選したが、翌三十一年八月、第六回衆議院選挙には当選。しかし、任期中、資金繰りに失敗し、明治三十二年に磊落、旧新生村の豪邸を捨て、東京へ寄寓することとなった。明治四十五年、死亡、享年六十二歳。

・元三郎はすでに濃厚な酒と新鮮な魚を準備していた。亀吉は飲酒すると、すぐさま耳が熱くなったため、下駄をはいて庭を歩き回った。すると、その時、亀吉に以下の絶句ができたという。

映對青松與白梅 映對せり 青松と白梅
夕陽影裏且徘徊 夕陽の影裏 且く徘徊す
他年修得斯文後 他年 斯文を修め得て後
養老山房養老來 養老山房に 老を養い來る

（青い松と白い梅花が互い照りはえている。[その光景を目にしつつ、わたしは] 夕陽を浴びながら、暫くぶらぶら歩いた。[そこで気づいたのは、わたしは] かつて儒学を修めて、[この今] はじめて、養老山房で三島先生の老いを養う（お年寄りを手厚く労わる）ことができたということだ。）

ここで亀吉は、庭園を歩きつつ、今日初めて中洲先生の「老いを養う」ことが叶ったと洒落ている。

・亀吉はこの詩を中洲に捧げると、中洲はこの詩に次韻をしたというのだが、「南総応酬詩録」によると、それは庭園のなかに老松や古梅が多く生えていたために、以下のようになったという。

仰對長松俯古梅 仰いで長松に對し 古梅に俯す
欲求佳句意徘徊 佳句を求めんと欲して 意 徘徊す
喜君先我吐金玉 君 我に先じて金玉を吐くを喜ぶ
頭角嶄然抽衆來 頭角 嶄然として衆に抽んじ來る

（見上げては、長大な松に向い、かがんでは、古梅を見る。[このようにして] 良い詩句を生み出そうと、あれこれ思案した。[すると、亀吉] 君がわたしより先に、優れた詩をつくりだしてくれた。その才能は多くの者達から突出して抜きん出ている。）

・さらに、「南総応酬詩録」によると、佐久間邸には「秋暉樓」という楼閣があり、酒に酔った後、そこに皆で登り、中洲がそこで詩を以下のように詠んだという。

醉登高閣捲簾幃 酔うて高閣に登り 簾幃を捲く
麥綠菜黃圖畫圍 麥綠菜黄 圖畫 圍む
漠漠輕煙天欲夕 漠漠たる輕煙 天 夕べならんと欲す
春暉澹蕩似秋暉 春暉は澹蕩として秋暉に似たり

（酒に酔って高閣に登り、御簾を巻き上げ[景色を眺め] れば、緑色の麦と黄色の菜花が絵画のように取り囲んでいる。空には一面に煙が垂れ込めて、いまにも日が暮れようとしている。春の光はおだやかで、まるで「秋暉」（秋の光）のようだ。）

「秋暉」は、言うまでもなく、「秋暉樓」に掛けている。

・この際、中洲は佐久間家の依頼を受けて、「養老山房記」という散文を記している。この散文は、当時の佐久間家の様子を彷彿とさせると同時に、素晴らしい名文に仕上がっている。にもかかわらず、従来、知られていなかったものであるため、長文であるが紹介する。

養老山房記

養老の水は、源を上総東南萬山中に發し、巉巖峭壁の間を經過し、市原郡に出でて、大川と爲り、迂餘逶迤すること十數里、西北のかた海に注ぐ。川を挟む平野は曠然として、竹樹の村落は、碁布星羅して、桃林最も多し。丙戌の春、余、千葉子興を今富村に訪ぬ。花は方に爛發し、白砂綠水と相照り映う。舟を其の間に棹させば、宛然として一桃源なり。既にして千葉氏に投じ、淹留すること數日。子興の内兄佐久間信賢來訪す。遂に余を其の家に延く。家は新生村に在り、今富を距つること十數町たり。老松鬱鬱として門巷を擁す。之に入らば則ち大廈巍然たり。園庭に多く梅を植え、麥畝菜畦は其の外を環繞す。桃林を回望すれば、灼灼として紅霞の如し。既に座に就き、欄間を仰ぎ見れば、則ち區して養老山房と曰う。龜田鵬齋の書く所たり。余竊かに疑えらく、「養老の川は全郡を貫く。而して佐久間氏、獨取りて以て其の居に命ずるは、何ぞや」と。少くして、信賢、酒を置きて款話し、遂に請うて曰く、「吾に老父有りて、信美と曰う。少くして文を龜田氏、武を久須美氏に學び、和歌を野野口氏に受く。家を治むること勤儉にして、大いに産を興す。戸長と爲り、區長に轉じ、職に在ること數十年。大いに人望を得たり。曾て荒蕪を拓き、良田數十頃を得たり。又養老川に沿うて桃樹を栽う。今の灼灼たる者は是なり。性、慈惠、金穀を捐て窮民を救うこと少からず。年は既に耳順を踰え、家を吾に譲る。風月を娛み、文雅を好み、以て優遊たり。子、幸いに山房記を作り、以て之を寵すれば、亦以て其の志を養うに足れり。」余は因りて信美翁を見れば、白髮龍眉、嬰鑠として少壯の如し。而して溫厚にして忠實たり。蓋し一郷の老成の人なり。是に於て、釋然として疑を解きて曰わく、「斯の父有りて斯の子有り。今、信賢懇懇として記を徴むる、亦以て其の平生の孝養を知る可きなり。且つ孝養の厚薄は貧富に従いて、信賢は益産を殖やす。富は一郡に冠たり。養老川に瀕りて居る者、信賢の老を養うの厚きに若くは莫し。然れば則ち、獨川名を取りて其の居に命ずるは、何の不可か之れ有らん。抑余は更に望有り。昔者、秦氏は先王の道德を廢し、専ら法律を以て天下を治め、刻薄、風を成す。是に於て、世を桃源に避け、古俗を守る者有り。近時洋學盛行し、人人、競いて法律を講じ、而して先聖孝悌の教、將に地を拂わんとす。今、佐久間氏の孝を聞くに、洵に喜ぶ可し。又、千葉氏も亦曾て孝を以て褒賞を蒙るを聞く。二家は皆、一郷の望族なり。苟しくも郷民を感化し、能く孝悌古道を守らしむれば、之を今代の桃源と謂うも亦可なり。余は將に淵明氏が桃源記を作るを續ぎて、姑く養老山房に記して、以て俟たんとす。（5）

養老川は、その源を、上総の東南にそびえる幾多の山々に發し、険しい岩や切り立つ崖を経て、市原郡に出て大河となり、十里程、くねくね折れ曲がって、西北方向に海に注いでいる。[この] 川を挟んで平野が広々と広がり、竹や樹木の生えた村落が、並んだ碁石や天空の星々のように広く散らばっているが、なかでも桃林が最も多い。明治十九年丙戌の春、わたしは今富村に千葉子興（禎太郎）を訪ねた。桃の花がちょうど鮮やかに咲いていて、砂の白さや川の緑に照り映えていた。そこで舟をこげば、まさに桃源郷さながらであった。すぐさま、千葉家に宿をとり、数日間とどまった。[すると、] 子興の義理の兄佐久間信賢がやってきて、そのなりゆきで、わたしをその家に招いたのだった。家は新生村にあり、今富から十數町離れていた。入り口付近は老松にこんもり覆われていて、なかに入ると大きな建物が高くそびえていた。庭園には梅がたくさん植えら

れ、麦畑や菜の花畑がその周囲を取り囲んでいた。振り返って桃林を見れば、色彩鮮やかに照り輝き、赤く霞がかかったようであった。座席に着いて、欄間を仰ぎ見ると、扁額に「養老山房」と書かれている。亀田鵬齋が書いたものである。わたしは心の中で、「養老の川は全部を貫いているが、佐久間氏だけがその名を取ってその住居に名付けているのはなぜだろう」と不思議に思った。少したって、信賢が酒をもってきた。話も打ち解けてくると、なりゆきで、お願いをしてきた。「わたしには信美という老父がおります。若い頃、文学を亀田綾瀬、武術を久須美閑適斎に学び、和歌を大国隆正から習いました。家の経営においては、無駄遣いをせず、仕事に励んで、大いに資産を増やしました。戸長を務め、区長に転任し、在職数十年、世間の人々から大いに信頼を集めました。かつて荒地を開拓し、良田数十頃を獲得しました。また養老川に沿って桃の木も植えました。現在、色彩鮮やかに照り輝いているのがそれです。人柄は慈悲深く、金銭や穀物を投げ出して困った人を助けたことも少なくありません。年齢はもう六十歳を超え、家督をわたくしに譲っております。美しい自然を楽しみ、文学や芸術を好み、ゆったりとしたんびりとしております。先生が折よく「山房記」を記す恩恵をくださいますなら、父にいつそうよくお仕え出来ます。」わたしはそこで信美翁に会ってみると、白髪で太い眉をもち、若者のように元気で、穏やかで優しく、まごころのある人であった。思うに、この土地の立派な人格者である。ここで、疑念はすっかり解けた。このような父親がいるからこそ、このような子がいるのだ。いま信賢は心を込めて執筆を求めているが、ここから日頃の孝行を窺うことができる。そのうえ、孝行が厚いかどうかは、貧富いかによるが、信賢はいっそう財産を増やしている。資産は全部で一番である。養老川沿いに住むもので、信賢ほど老人を手厚くいたわっている者はいない。そうであるなら、

「[当家]だけが川の名を取ってその住居に名付けていることに、どうして不適さを認められよう。しかし、わたしには、この上、さらにいっそうの要望がある。むかし、秦朝は、上古の優れた君主が見出した道徳を退け、専ら法律によって天下を統治し、冷酷な気風が行き渡った。そこで、乱世を逃れて桃源郷に隠れ、古からの習俗を守る者が出てきたのである。最近、洋学が盛んになり、人々は競って法律を研究し、聖人の見出した親孝行や年長者への敬愛の教えが、この世から消えかかっている。いま、佐久間家の孝行を耳にして、これは本当に喜ぶべきことだと思っている。さらに、千葉家もかつて親孝行で表彰されたことを耳にしている。二家はともに同じ地域の名門である。もし、地域の人々を感化して、親孝行や年長者への敬愛といった古からの道徳を守らせることができれば、ここを現在の桃源郷といっても過言でなくなるだろう。わたしは陶淵明氏が「桃花源記」を書いたのに習って、ひとまず養老山房のために文を書き、未来を期待したいと思うのである。



・「陪游録」によると、亀吉は中洲が「秋暉樓」で詠んだ詩に次韻しようとしたが、その場ではできなかった。そこで、夜、今富村千葉邸に戻ってから、以下の次韻詩を詠んだ。

林月煙籠竹裏扉 林月 煙籠む竹裏の扉
疎燈如豆影依微 疎燈 豆の如く 影 依微たり
一灣流水小橋外 一灣の流水 小橋の外
只有詩人扶醉歸 只だ詩人 酔いを扶けられ 歸る有り

(林から月光が差し込み、もやが竹製の扉を包み込んでいる。[そこへ] まばらな灯火が、豆粒大にぼんやり光った。ひと曲がりして流れる水に掛かった小橋の向うから、詩人が酒に酔って、人に支えられながら帰ってきた。)

どうやら、亀吉は先に千葉邸に戻り、後から、酔っ払った中洲が帰ってきたようで、亀吉はその中洲帰宅の模様を詠んだようである。亀吉は、このユーモラスな光景を時間の推移に沿って、明暗を効果的に活かしつつ、ありありと目に浮かぶように描写している。中洲も「余は、此の夜、泥酔し、諸子の扶る所と爲りて歸る。實に此の詩の如し。慙し慙し」と評しており、森槐南もこの詩を「光景は略る如し。小詩の佳境たり」と絶賛している。

六、明治十九年三月二十九日～三十日

・三月二十九日朝には、土肥石斎が千葉邸に生きのいい鯉を送ってきた。その鯉には詩が添えてあったらしく、「南総応酬詩録」では、中洲はその詩に対し、以下のような次韻詩を添えてお礼をしたとある。

錦鯉惠然投客居 錦鯉 惠然として客居に投ず
齒牙香迸放醜餘 齒牙に香 迸り 醜餘を 放 にくす
平生腹笥空疎甚 平生 腹笥 空疎なること甚し
今日便便不爲書 今日便便として書を爲さず

(有り難くも、キラキラ輝く鯉を寓居に届けてくれた。[その鯉を食べると、] 口の中に香りが迸り、食欲が思う存分満たされた。日頃、腹はベコベコだったが、今日、腹が満たされたことは言うまでもない。)

・中洲一行は、石斎が送ってきた鯉を賞味したのち、昼前に今富村伊藤宣太郎邸の酒宴に赴いた。

今富村伊藤家

平安末期の伊東祐親の子孫と伝わり、祐親より十七代の晋斎は、徳川秀忠の御殿医であったが、江戸を引き払って姉崎村に移住し、姓を伊東から伊藤に改めた。慶安二年(一六四九)正月、その子祐義が今富村に移住し、それ以来、該地に居住しているという。今富村で千葉家と並んで「旦那様」と尊称され、該地有数の教養と学識を有する家として著名であった。

伊藤宣太郎祐真

教養人で、漢学を小貫庸徳、小永井小舟に、書を日下部鳴鶴に学んでいる。川田甕江、重野成斎、巖谷一六などとも交流を有した。なかでも小永井とは親しく、当家には小永井は何度も当家を尋ねてきたと伝わっており、宣太郎は、父貞直の墓碑も小永井に書いてもらっている。

その父貞直も教養人で、錫矢鹿門に師事し、著作には『乾齋詩文稿』があったという。貞直の人柄は、貞直の墓碑「乾齋伊藤君墓碣銘」(市原市今富村満寺内伊藤家墓地)から窺える。この散文も、従来、全く知られていなかった大変な名文である(しかも、書は日下部鳴鶴)。以下抜粋で紹介する。

君、諱は貞直、字は子幹、號は乾齋、通稱は重左衛門、上總市原郡今富村の人なり。(中略) 和卿曰く、「吾が家は世里正なり。吾が父は、貧を賤い窮に業せしめ、徳は黨閥に加わる。人と接して、和氣、顔面に溢る。未だ嘗て慍怒の色を見せず。」予曰く、「恵みて和、里正爲るに負かず。」和卿又曰く、「明治初、徳川氏の遺黨、煽起し、市原望陀の要を扼ぎ、駿駿として

來侵す。里民は争いて相奔竄す。吾が父は家の老少を散じて、健奴三四人を留め以て守らしめ、之に勉めて曰く、『吾は里正なり。吾去らば、民は益す據を失い、一村も又完きこと無からん。且つ官軍、將に至らんとす。汝輩は輕がるしく遷動すること勿れ。』官事聞くと有れば、一村は遂に事無し。」予曰わく、『誼を知り、自重す。里正爲るに負かず。而して皆な忠厚より出る者か。以て文無しとす可けんや。』君、幼くして書を読み、鵠矢鹿門翁に従う。學は經史に涉り、時に文辭に發す。擊劔を善くし酒を嗜む。而れども未だ嘗て獨り飲まず。飲めば温恭和順にして、彌よ懈らず。人は此を以て之を敬う。(下略)

(6)

氏の諱は貞直、字は子幹、号は乾齋、通称は重左衛門であり、上総国市原郡今富村の人である。(中略)和卿は言った、「私の家は、代々名主を務めました。私の父は貧者を救い、志を得ない人に仕事を与えて、人徳を村里に及ぼしました。人と接する際は、穏やかな気持ちで顔にあふれ、怒った表情を見せたことは一度もありませんでした。」私は言った、「恩恵を与えると同時に穏やかでもあった。名主たるにふさわしい。」和卿は、さらに言った、「明治初頭、徳川方の逃亡兵が煽動して、市原郡や望陀郡の要地を塞いだうえ、盛大に來襲してきました。村の人々は我先にとあわてて逃げましたが、私の父は家の老人幼児を逃がしたうえ、壮健な使用人三、四人を留めて「家」を守らせ、力づけて言いました、「私は名主である。私が去ってしまえば、村民は一層よりどころを失い、村も害悪を蒙らないではいられないだろう。その上、官軍が今にもやってくる。お前たちは軽々しく移動するなよ。」官軍が事態を收拾したことが知れたときには、村は結局、何の害悪も蒙っていませんでした。」私は言った、「あるべき振る舞いがわかって、自分の言動の重さを知っている。名主たるにふさわしい。これらは全て、その親切丁寧で真心のある人柄から出たものであろう。文(温和で上品)のない人物といえようか。」氏は幼い時から書物を読み、鵠矢鹿門翁に師事した。その学問は經典歴史にわたり、時には「その見識」詩文に表した。劍術が得意で、酒を好んだ。しかし、いまだ一人で酒を飲んだことはなく、飲めば、穏やかで慎み深く、皆と仲良くした。[氏は、普段からきちっとして、酒を飲むや、]一層だらしない姿を見せることはなかった。このため、人々から尊敬された。(下略)



小永井小舟

小永井小舟(『福澤諭吉全集』三卷)

名は岳。佐倉藩平野重美の四男。兄に佐倉藩成徳書院総裁平野重久、佐倉藩権少参事田中從吾軒がいる。江戸にゆき、野田笛浦、古賀謹堂、羽倉簡堂に学問を受けた。安政五年、幕府の小永井藤左衛門の養子となり、万延元年、軍艦操練所の属吏となり、国信使にしたがい、米國に赴いた。維新後、一橋侯の侍読となり、ついで、尾張侯の招聘に応じて、明倫堂教頭となった。晩年は、浅草新堀で私塾濠西塾を始めた。明治二十一年病没。

日下部鳴鶴(『日下部鳴鶴伝』)

日下部鳴鶴

天保九年、彦根藩士田中惣右衛門の次男として江戸で生まれた。安政六年、彦根藩士日下部三郎右衛門の養子となり、大老・井伊直弼に仕えた。明治元年、徴士として明治政府に召されたが、十一年、大久保利通が暗殺されると、十二年には官を辞し、書法の研究に専念することを決意した。十三年、清國から楊守敬が來日すると、その下で四年間、巖谷一六、松田雪柯とともに漢魏六朝の書法を学んだ。二十四年には、ついに渡清し、俞樾、吳大澂、楊岷、吳昌碩らと交流し、「東海の書聖來たる」と称された。帰国後は後進の指導に力を注ぎ、書のみならず文人間との交流も図った。大正十一年死亡。

・「南総応酬詩録」によると、当主宣太郎は中洲たちがやって来ると、川田甕江の五言絶句を出してきて、中洲に次韻してほしいと言ってきたという。そこで中洲は以下のように次韻したという。

松筠遶家綠 松筠家を遶りて綠なり

非是俗人居 是れ俗人の居に非ず

聞説三年業 聞説くならく 三年業して

都門讀史書 都門に史書を読むと

(松や竹が家屋を囲んで緑色に染まっている。ここは俗人の住みかではない。聞くところによると、三年間修業を積んで、都で史書を学んだのだという。)

・「陪遊録」によれば、この際の酒宴には、美女が一人招かれ、一人一人酒をついでくれたため、趣がいっそう増したという。

・昼過ぎ、三島中洲一行は伊藤邸での酒宴が終えると、帰途につくこととした。そこで、千葉嶺太郎、土肥石斎、佐久間元三郎、伊藤宣太郎らに送られ、旧町田村にあった養老川の渡し場まで行った。



・現在、市原市町田附近には広大な梨林が広がっており、良質な梨の産地として有名であるが、当時は、一面の桃林であった。そこで、一行は広大な桃林を抜けて、渡し場へと向かうこととなり、途中、桃の花の下で、酒を傾けて、最後のお別れとしたという。

・亀吉は、この際の模様を「陪遊録」で以下のように述べている。

川上は町田村と曰う。桃花數千株、錦繡爛然たり。誠齋は先生を導いて林中に入り、殆く方嚮を迷う。林外、碧流一道、蜿蜒として長蛇の如し。即ち養老川なり。時は夕陽に方り、紅綠相い映ず。人をして武陵溪上の想、有ら使む。(7)



(川のほとりは町田村という。数千株の桃の花が、絹織物のように鮮やかに輝いていた。誠斎(千葉禎太郎)は先生を案内して、桃林のなかで道を間違えてしまい、危うく迷うところであった。桃林の外には、一筋の青い流れがうねうね長蛇のように続いていた。これが養老川であった。夕陽がさしこむ時にあたり、赤と緑が互い照り映えていた。陶淵明の「桃花源記」でいう武陵の溪谷を想像させた。)

途中、禎太郎が道を間違えたせいで、みなが迷いかけたという、ユーモリストの亀吉ならではのエピソードも窺え、微笑ましい。そして、亀吉はその別離の酒宴で、以下のように詠んだという。

遠處疑雲近處霞 遠處に雲かと疑えば 近處に霞なり
幾人尋到夕陽斜 幾人か尋ね到れば 夕陽斜なり
偶隨流水杳然去 偶 流水に隨いて杳然として去けば
便是武陵源上花 便是是れ武陵源上の花なり

(「養老川畔の桃林は」遠くから見ると、雲のように見えたが、近くからだ霞のようだった。何人かで訪ねて、たどり着いた時は、夕陽が斜めに傾いていた。陶淵明の「桃花源記」でいう、たまたま水の流れに沿って、遠くまで遡ってみたら、武陵の源流に花々が咲いていたという光景さながらだった。)

・他方、中洲のほうは、「南総応酬詩録」で、帰りの舟のなかで、以下のような絶句ができたと言っている。

送我遙遙到野川 我を送りて 遙遙として野川に到る
桃源花發欲蒸天 桃源に花 發し 天を蒸さんと欲す
回頭時自舟中望 頭を回す時 舟中自り望めば
岸上人還似李仙 岸上の人 還って李仙に似たり

(「皆さんが」わたしをはるばる鄙びた川まで見送ってくれると、「川沿いの」桃源郷では花々が開いて、「まるで」空を蒸気でふかしているように見えた。「舟に乗った後、」顔を巡らして、舟から遠くを見やると、「詩を詠んでいるこのわたしではなく、」岸辺の人が、逆に、李白のようにみえた。)

・三島中洲一行は町田から舟運をつかって川を下った後、一旦、千葉郡登戸村の海為隣楼に立ち寄り、千葉県の役人たちから款待を受けた後に帰り、明治十九年三月三十日夕方、東京に帰宅した。

・「陪游録」によると、帰宅後、亀吉は以下のように詠んだという。

歸來神逝總南州 歸來して 神は總南州に逝く
唱和杯盤樂事悠 唱和杯盤の樂事 悠かなり
勿率解囊先一笑 勿率に囊を解いて 先ず一笑す
探春遊是探詩遊 春を探る遊とは 是れ詩を探る遊なり

(帰ってくるや、ここは南総に走った。詩を贈りあったり、酒を交わしたりした楽しみは、はるか前のこととなった。あわただしく荷を解くと、まずひと笑い。春を探し求めた遊覧は、詩境を探し求める遊覧に他ならなかったのだ。)

注

- (1) 『二松學舎六十年史要』二松學舎発行、一九三七、九頁
- (2) 以上特記を除き、「三島中洲関係年表」『三島中洲と近代一其二』、二松學舎大学附属図書館、二〇一四に拠る。
- (3) 竹林貫一編『漢学者伝記集成』一三四六～一三五〇頁
- (4) 「旧市原郡今富村本陣名主千葉家の歴史—主に新発見の漢文資料を通じて—」『房総古代道研究』(六)、32～49頁、房総古代道研究会、2023.4

(5) 養老山房記「養老之水。發源上總東南萬山中。經過巖峭壁之間。出市原郡。爲大川。迂餘逶迤十數里。西北注海。挾川平野曠然。竹樹村落。縵布星羅。而桃林最多。丙戌之春。余訪千葉子興於今富村也。花方爛發。與白砂綠水相照映。棹舟其間。宛然一桃源也。既而投千葉氏淹留數日。子興內兄佐久間信賢來訪。遂延余其家。家在新生村。距今富十數町。老松鬱鬱擁門巷。入之則大廈巍然。園庭多植梅。麥畝菜畦。環繞其外。回望桃林灼灼如紅霞。既就座。仰見欄間。則匾曰養老山房。龜田鵬齋所書。余竊疑養老之川貫全郡。而佐久間氏獨取以命其居。何也。少焉。信賢置酒款話遂請曰。吾有老父。曰信美。少學文於龜田氏。武於久須美氏。受和歌於野野口氏。治家勤儉。大興產。爲戶長。轉區長。在職數十年。大得人望。曾拓荒蕪。得良田數十頃。又沿養老川栽桃樹。今之灼灼者是也。性慈惠捐金穀救窮民不少。年既踰耳順。讓家於吾。娛風月。好文雅以優遊。子幸作山房記以寵之。亦足以養其志矣。余因見信美翁。白髮龐眉。矍鑠如少壯。而溫厚忠實。蓋一鄉老成人也。於是釋然解疑曰。有斯父有斯子。今信賢懇懇徵記。亦可以知其平生孝養也。且孝養厚薄從貧富。而信賢益殖產。富冠一郡。溯養老川而居者。莫信賢養老之厚若焉。然則獨取川名而命其居。何不可之有。抑余更有望焉。昔者秦氏廢先王道德。專以法律治天下。刻薄成風。於是有遺世桃源守古俗者。近時洋學盛行。人人競講法律。而先聖孝悌之教。將拂地。今聞佐久間氏之孝。洵可喜。又聞千葉氏亦曾以孝蒙褒賞。二家皆一鄉望族也。苟感化鄉民。能守孝悌古道。謂之今代桃源亦可也。余將續淵明氏作桃源記。姑記養老山房以俟。」

(6) 「乾齋伊藤君墓碣銘」東京小永井岳撰。「君諱貞直、字子幹、號乾齋、通稱重左衛門、上總市」原郡今富郷人、(中略)和卿曰、吾家世里正也、吾父賤貧業窮、德加黨」間、與人接、和氣溢頰面、未嘗見愠怒之色、予曰、惠」而和、不負爲里正矣、和卿又曰、明治初、徳川氏逋」黨煽起、陋市原望陀之要、駿駿來侵、里民爭相奔」竄、吾父散家老少、而留健奴三四人以守、勉之曰、」吾里正也、吾去、民益失據、一村又無完、且官軍將」至、汝輩勿輕運動、有聞官事、一村遂無事、予曰、知」誼自重、不負爲里正矣、而皆出於忠厚者歟、可以」無文哉、君幼讀書從錫矢鹿門翁、學涉經史、時發於文辭、善擊鈔嗜酒、而未嘗獨飲、飲而溫恭和順、」彌不懈、人以此敬之(下略)」明治十八年九月 正五位日下部東作書

(7) 川上曰町田村。桃花數千株。錦繡爛然。誠齋導先生入林中。殆迷方嚮矣。林外碧流一道。蜿蜒如長蛇。即養老川也。時方夕陽。紅綠相映。使人有武陵溪上之想。

明治十五年迅速測図(今富、今富高沼、宮原、新生、町田位置関係)

(帰ってくるや、ここは南総に走った。詩を贈りあったり、酒を交わしたりした楽しみは、はるか前のこととなった。あわただしく荷を解くと、まずひと笑い。春を探し求めた遊覧は、詩境を探し求める遊覧に他ならなかったのだ。)

注

- (1) 『二松學舎六十年史要』二松學舎発行、一九三七、九頁
- (2) 以上特記を除き、「三島中洲関係年表」『三島中洲と近代—其二—』、二松學舎大学附属図書館、二〇一四に拠る。
- (3) 竹林貫一編『漢学者伝記集成』一三四六～一三五〇頁
- (4) 「旧市原郡今富村本陣名主千葉家の歴史—主に新発見の漢文資料を通じて—」『房総古代道研究』(六)、32～49頁、房総古代道研究会、2023.4
- (5) 養老山房記「養老之水。發源上總東南萬山中。經過巉巖峭壁之間。出市原郡。爲大川。迂餘逶迤十數里。西北注海。挾川平野曠然。竹樹村落。縵布星羅。而桃林最多。丙戌之春。余訪千葉子興於今富村也。花方爛發。與白砂綠水相照映。棹舟其間。宛然一桃源也。既而投千葉氏淹留數日。子興內兄佐久間信賢來訪。遂延余其家。家在新生村。距今富十數町。老松鬱鬱擁門巷。入之則大廈巍然。園庭多植梅。麥畝菜畦。環繞其外。回望桃林灼灼如紅霞。既就座。仰見楣間。則匾曰養老山房。龜田鵬齋所書。余竊疑養老之川貫全郡。而佐久間氏獨取以命其居。何也。少焉。信賢置酒款話遂請曰。吾有老父。曰信美。少學文於龜田氏。武於久須美氏。受和歌於野野口氏。治家勤儉。大興產。爲戶長。轉區長。在職數十年。大得人望。曾拓荒蕪。得良田數十頃。又沿養老川栽桃樹。今之灼灼者是也。性慈惠捐金穀救窮民不少。年既踰耳順。讓家於吾。娛風月。好文雅以優遊。子幸作山房記以寵之。亦足以養其志矣。余因見信美翁。白髮龐眉。矍鑠如少壯。而溫厚忠實。蓋一鄉老成人也。於是釋然解疑曰。有斯父有斯子。今信賢懇懇微記。亦可以知其平生孝養也。且孝養厚薄從貧富。而信賢益殖產。富冠一郡。瀕養老川而居者。莫信賢養老之厚若焉。然則獨取川名而命其居。何不可之有。抑余更有望焉。昔者秦氏廢先王道德。專以法律治天下。刻薄成風。於是有避世桃源守古俗者。近時洋學盛行。人人競講法律。而先聖孝悌之教。將拂地。今聞佐久間氏之孝。洵可喜。又聞千葉氏亦曾以孝蒙褒賞。二家皆一鄉望族也。苟感化鄉民。能守孝悌古道。謂之今代桃源亦可也。余將續淵明氏作桃源記。姑記養老山房以俟。」
- (6) 「乾齋伊藤君墓碣銘」東京小永井岳撰。「君諱貞直、字子幹、號乾齋、通稱重左衛門、上總市」原郡今富郷人、(中略)和卿曰、吾家世里正也、吾父賤貧業窮、德加黨間、與人接、和氣溢類面、未嘗見愠怒之色、予曰、惠而和、不負爲里正矣、和卿又曰、明治初、德川氏通黨煽起、陋市原望陀之要、駭駭來侵、里民爭相奔竄、吾父散家老少、而留健奴三四人以守、勉之曰、吾里正也、吾去、民益失據、一村又無完、且官軍將至、汝輩勿輕遷動、有聞官事、一村遂無事、予曰、知誼自重、不負爲里正矣、而皆出於忠厚者歟、可以無文哉、君幼讀書從錫矢鹿門翁、學涉經史、時發於文辭、善擊劍嗜酒、而未嘗獨飲、飲而溫恭和順、彌不懈、人以此敬之(下略)明治十八年九月 正五位日下部東作書
- (7) 川上曰町田村。桃花數千株。錦繡爛然。誠齋導先生入林中。殆迷方嚮矣。林外碧流一道。蜿蜒如長蛇。即養老川也。時方夕陽。紅綠相映。使人有武陵溪上之想。

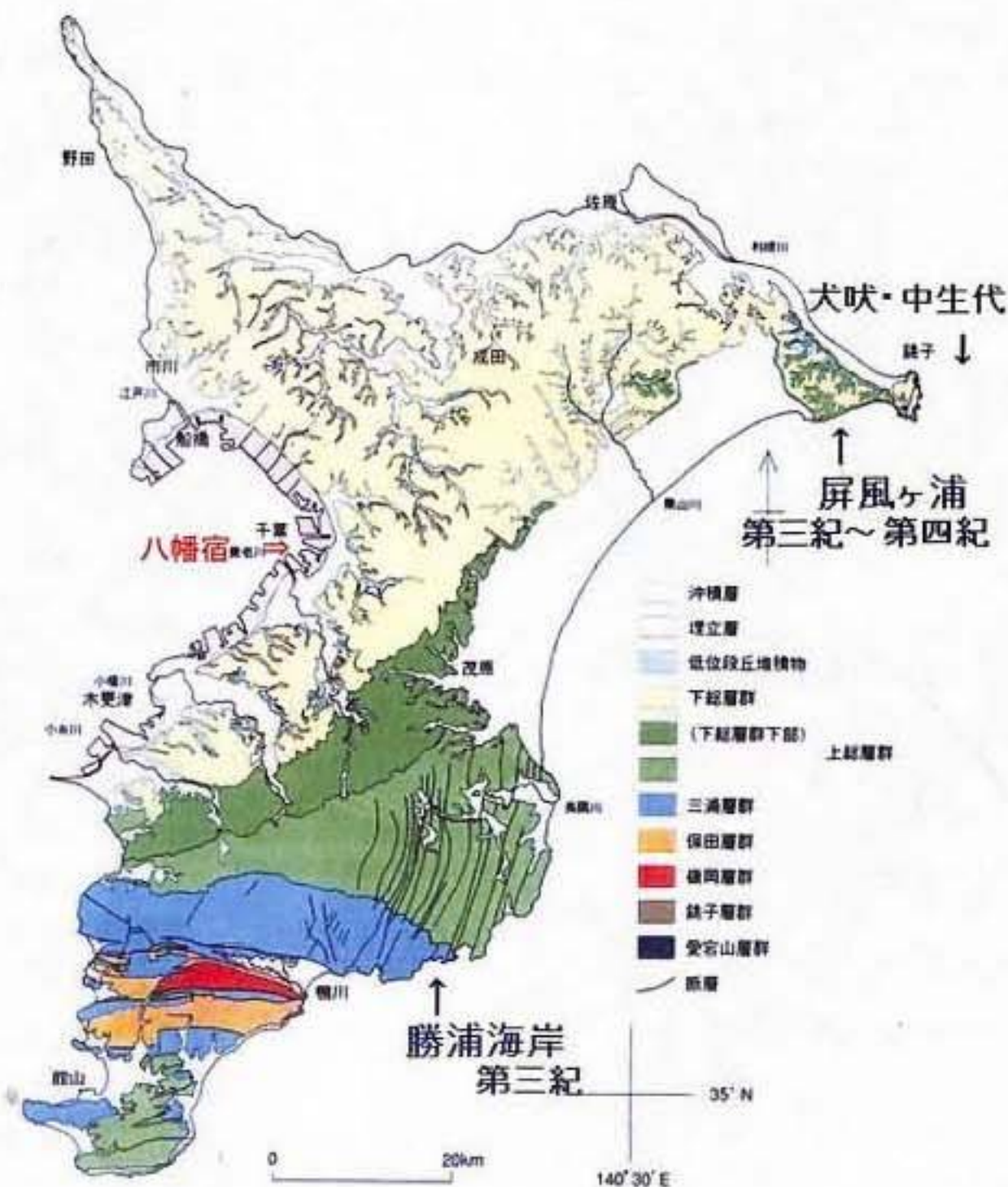
明治十五年迅速測図(今富、今富高沼、宮原、新生、町田位置関係)

地図から見た八幡宿

清和大学 小関 勇次

1 地質図・地形環境から見た八幡宿

下の地図は千葉県地質構造を表しています。八幡宿は東京湾岸がピンク色ですから埋め立て地（人工造成地）をしめしていますが、沿岸付近は白ですから沖積地となります。ですから八幡宿は沖積地という低地に位置しています。沖積地というのは流水の作用で形成された低地ですが、縄文海進といって6000年～7000年かけて干上がっていった低地です。海岸部には砂堆（砂丘までいかない風成砂の堆積による微高地）が海岸に面して列状に形成され、この砂堆の上に八幡宿・五井・姉ヶ崎があります。内房線もこの砂堆上を通過しています。千葉県全体で見ると東京湾に向かって盆地状の傾きをしていることがわかります。ですから、養老川・小櫃川・小糸川などの河川はすべて東京湾に流れ込んでいます。

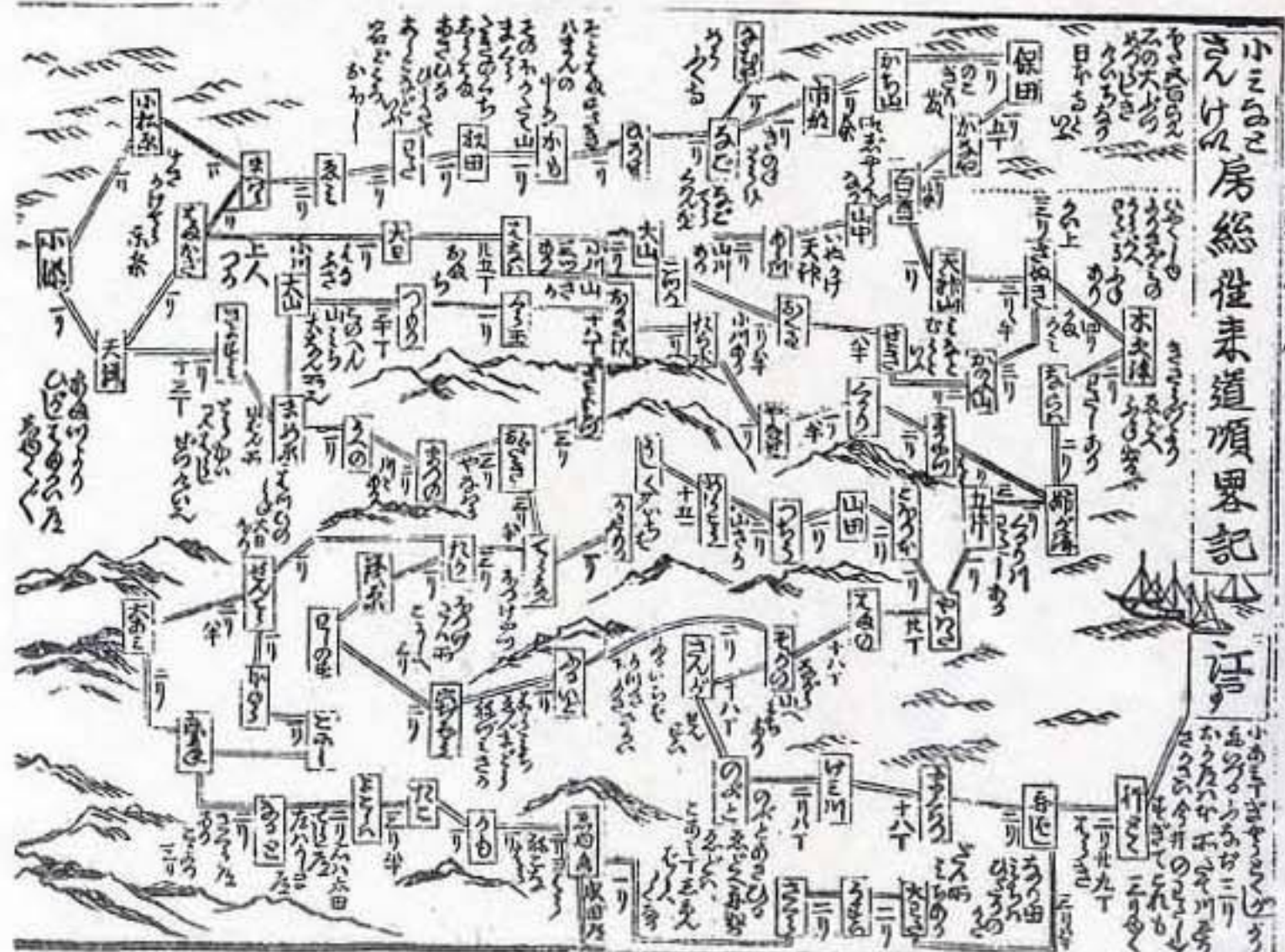


2 地図でたどる八幡宿

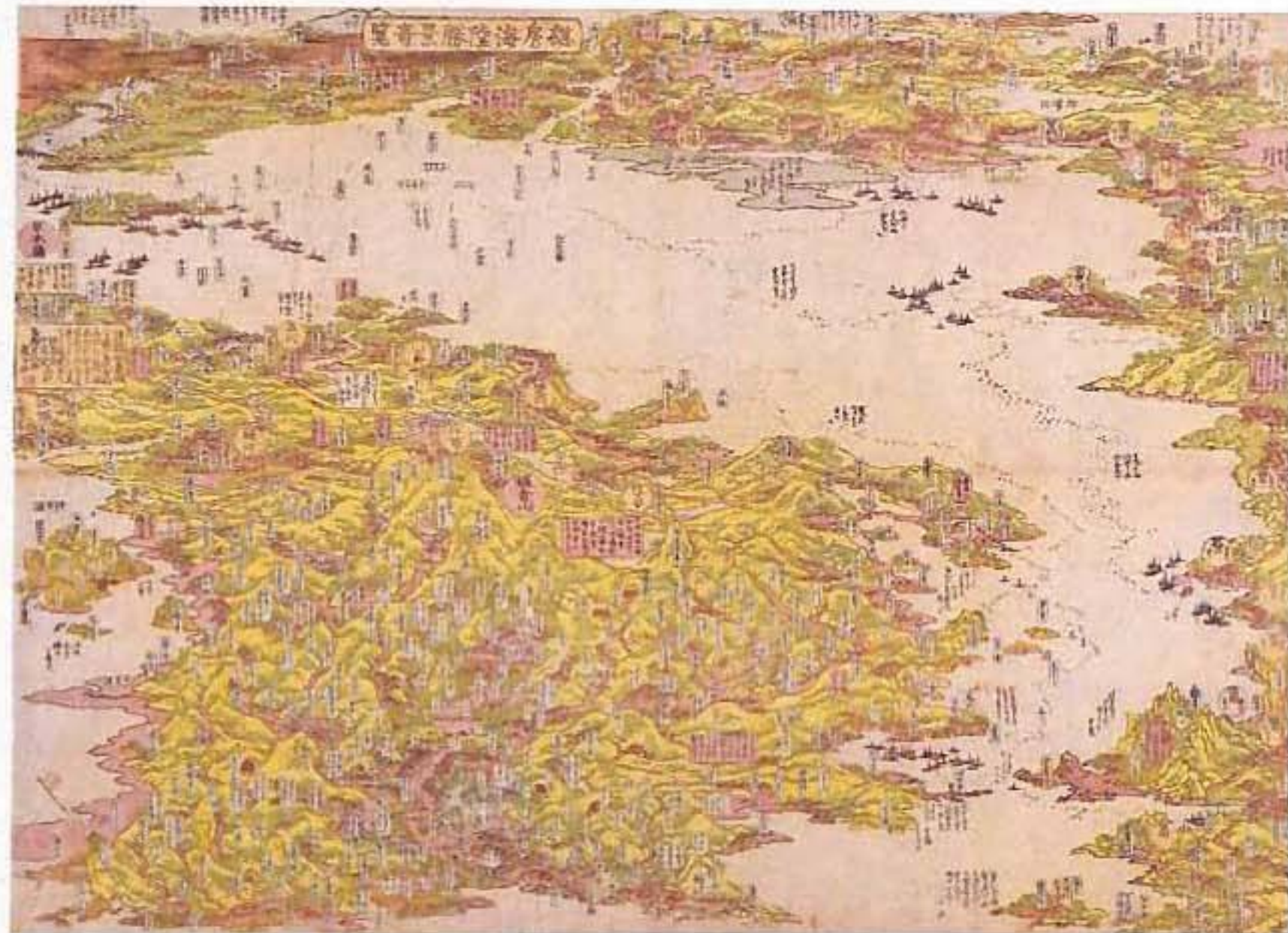
上総国図 1808 (江戸時代)



十返舎一九 小湊参詣房総往来道順略記 1813 頃～



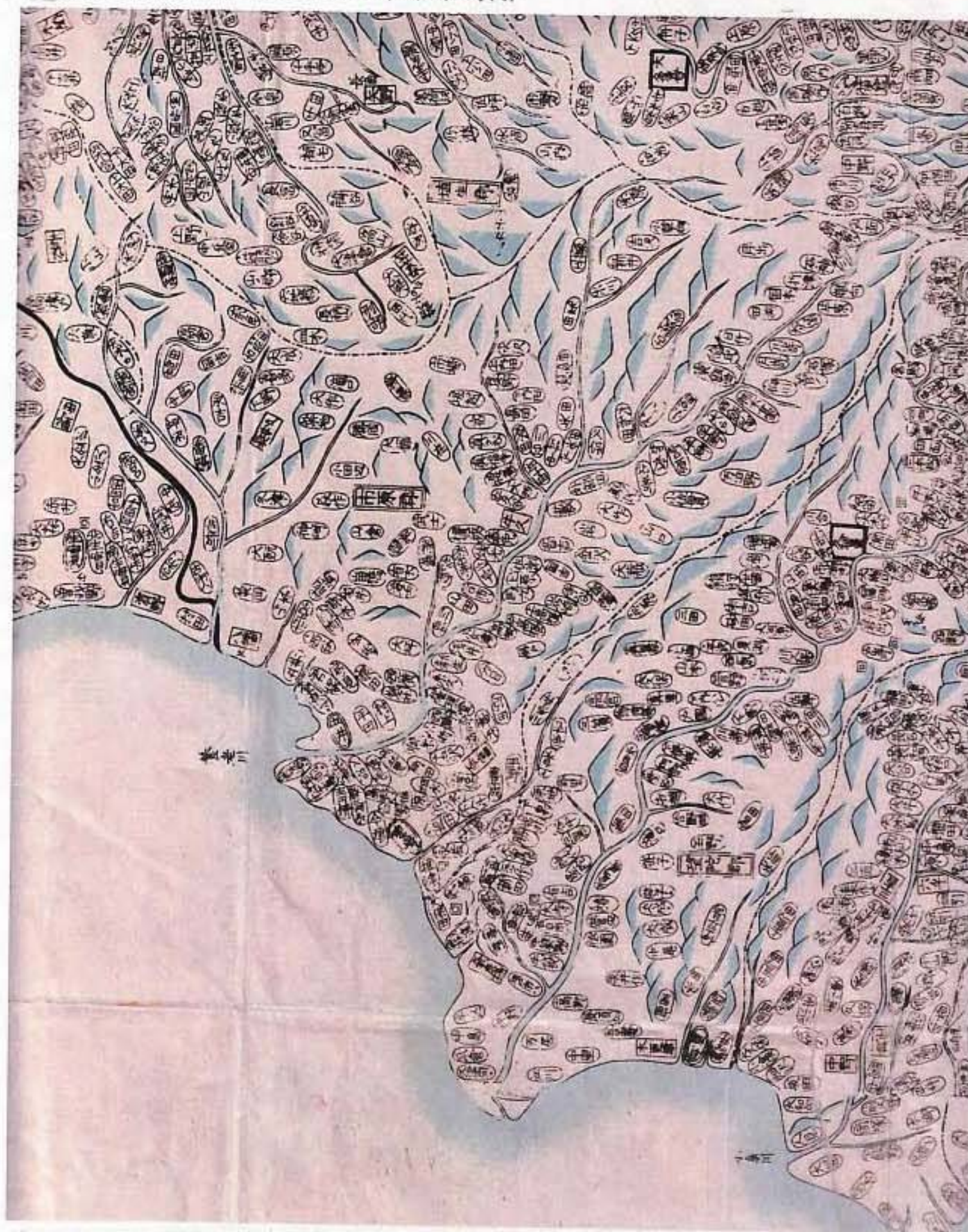
総房海陸勝景奇覧 葛飾北斎 1818~1830 年頃



上総国輿地全図 江戸時代後期

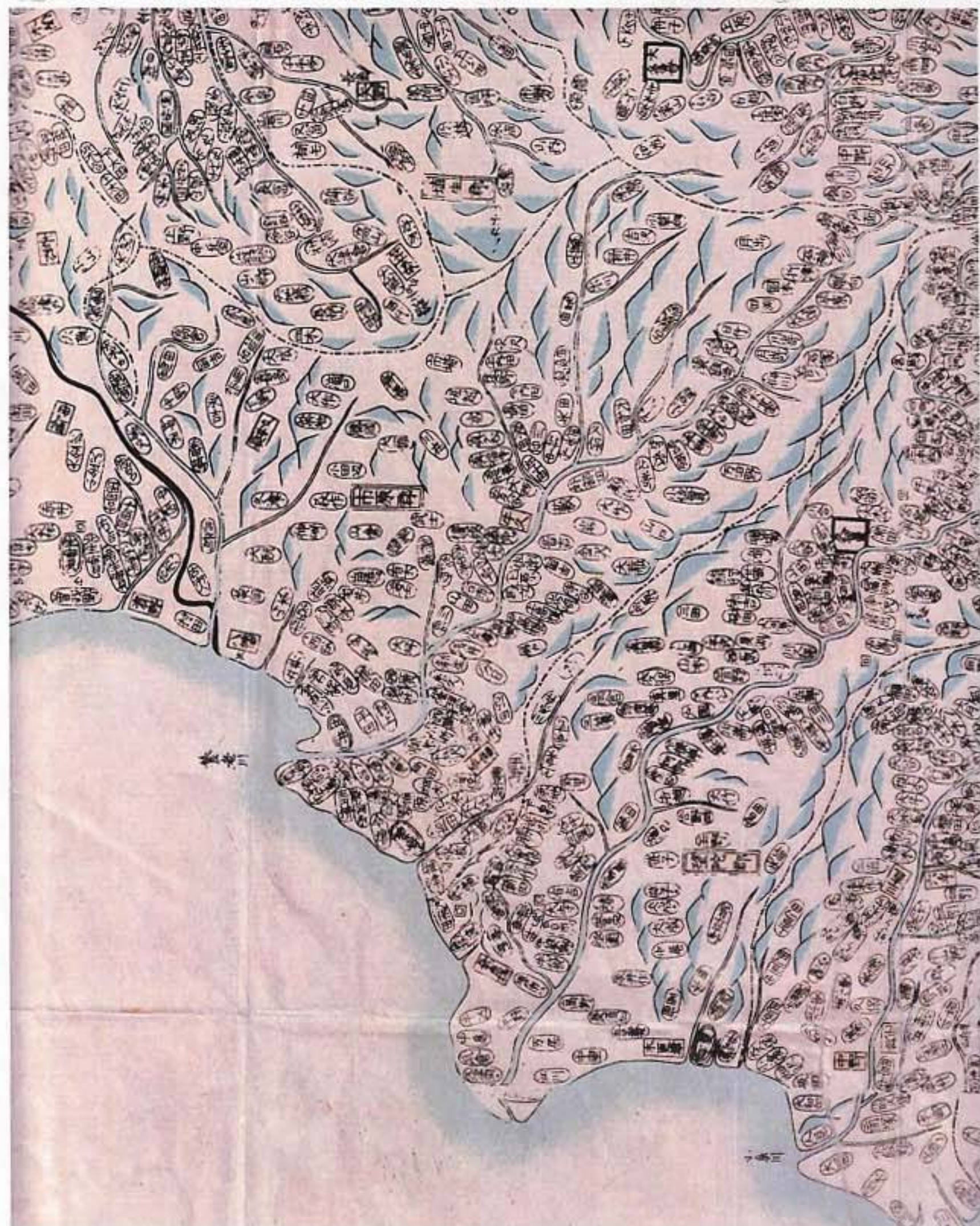


富士見十三州輿地全図（上総）1842 年（江戸時代）



富士山を眺望できる関東の 8 か国と伊豆・駿河・遠江・甲斐・信濃の 5 か国を収めた大型の地図。町村・街道・河川などを詳細に描く。江戸後期の刊行図としては高い水準 実測図でなく方位・縮尺・距離は不正確。

富士見十三州輿地全図（上総）1842 年（江戸時代）

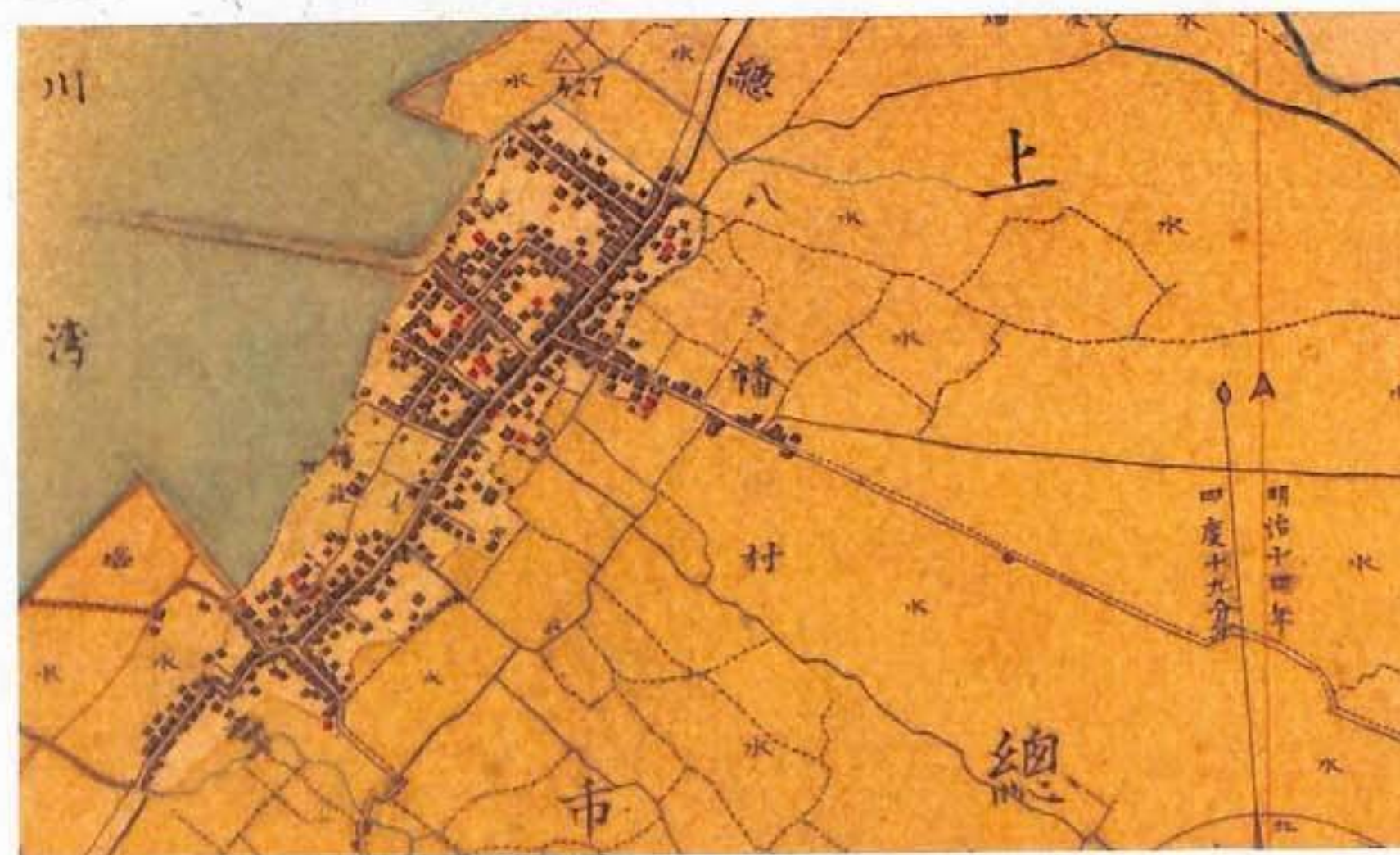


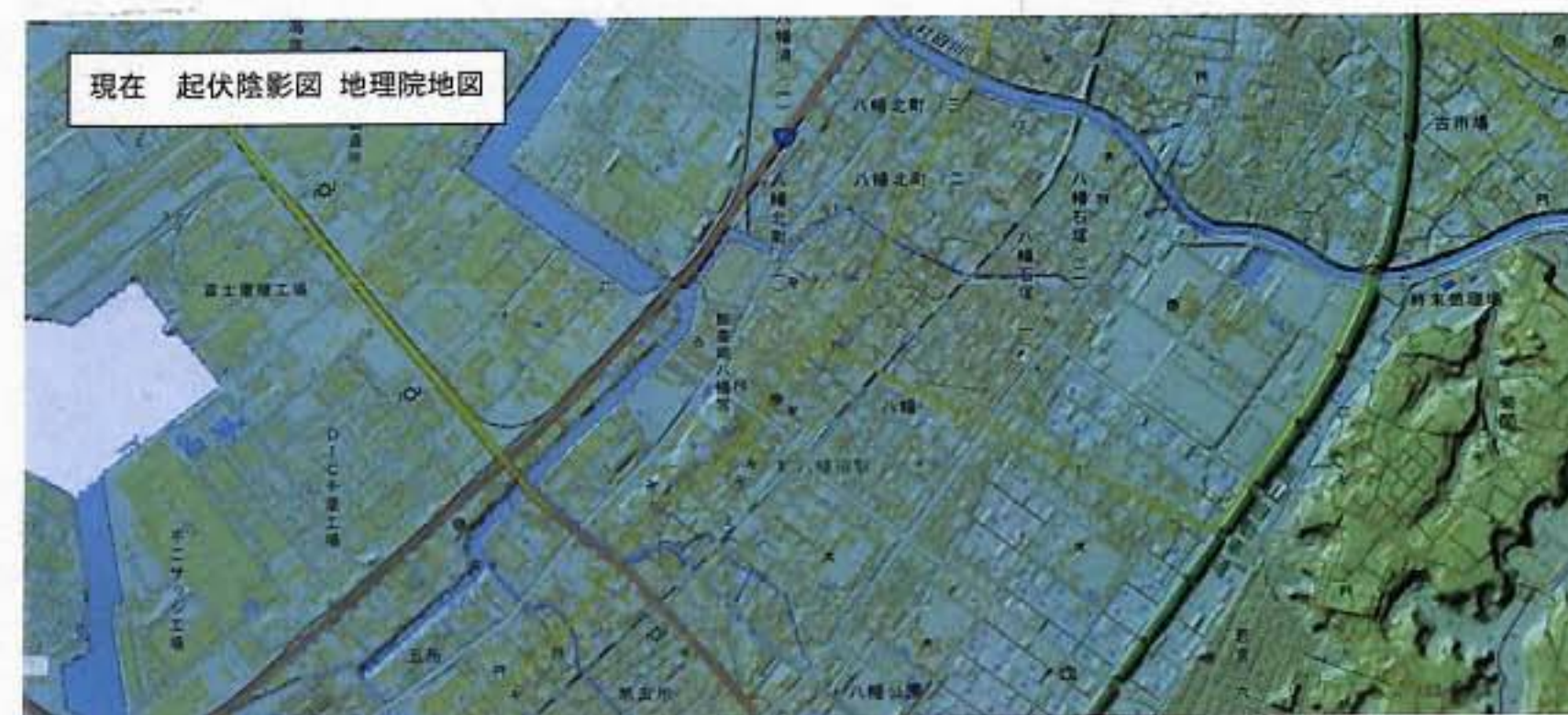
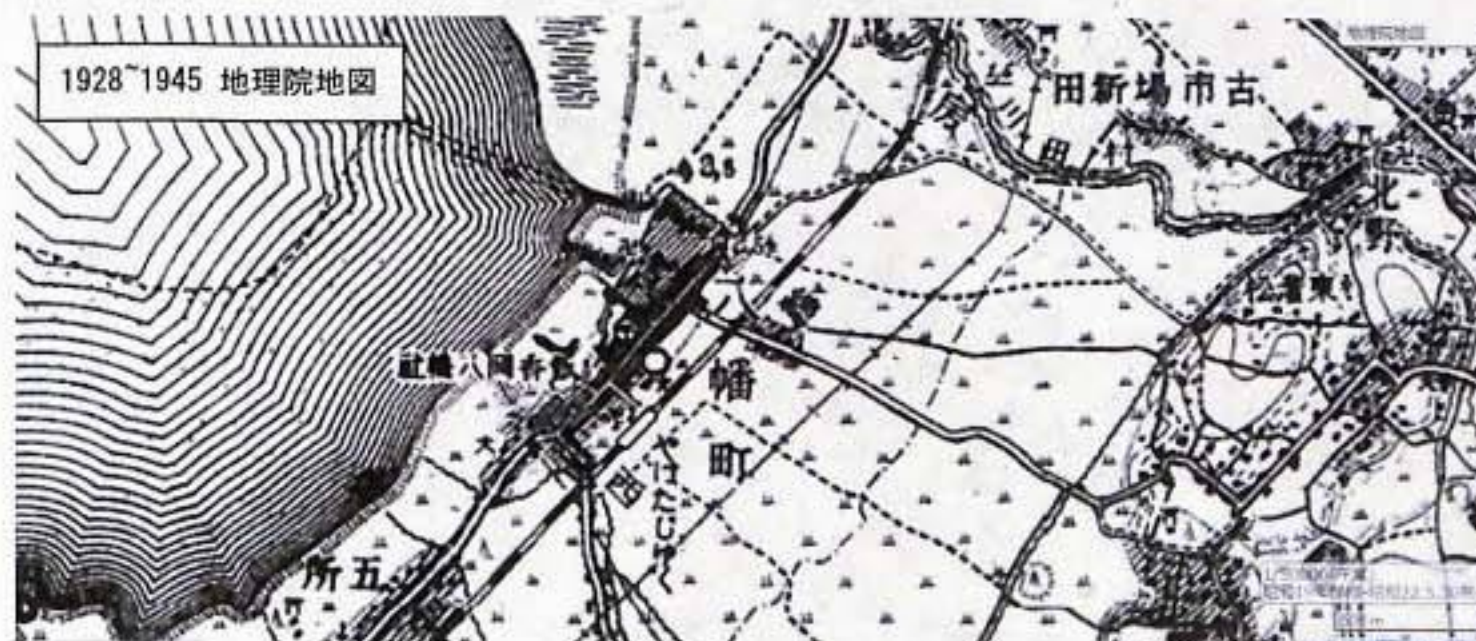
富士山を眺望できる関東の8か国と伊豆・駿河・遠江・甲斐・信濃の5か国を収めた大型の地図。町村・街道・河川などを詳細に描く。江戸後期の刊行図としては高い水準 実測図でなく方位・縮尺・距離は不正確。

従上総・下総海辺富士遠望 1868 年（明治元年）



迅速測図 陸軍参謀本部陸地測量部（明示 15 年～）



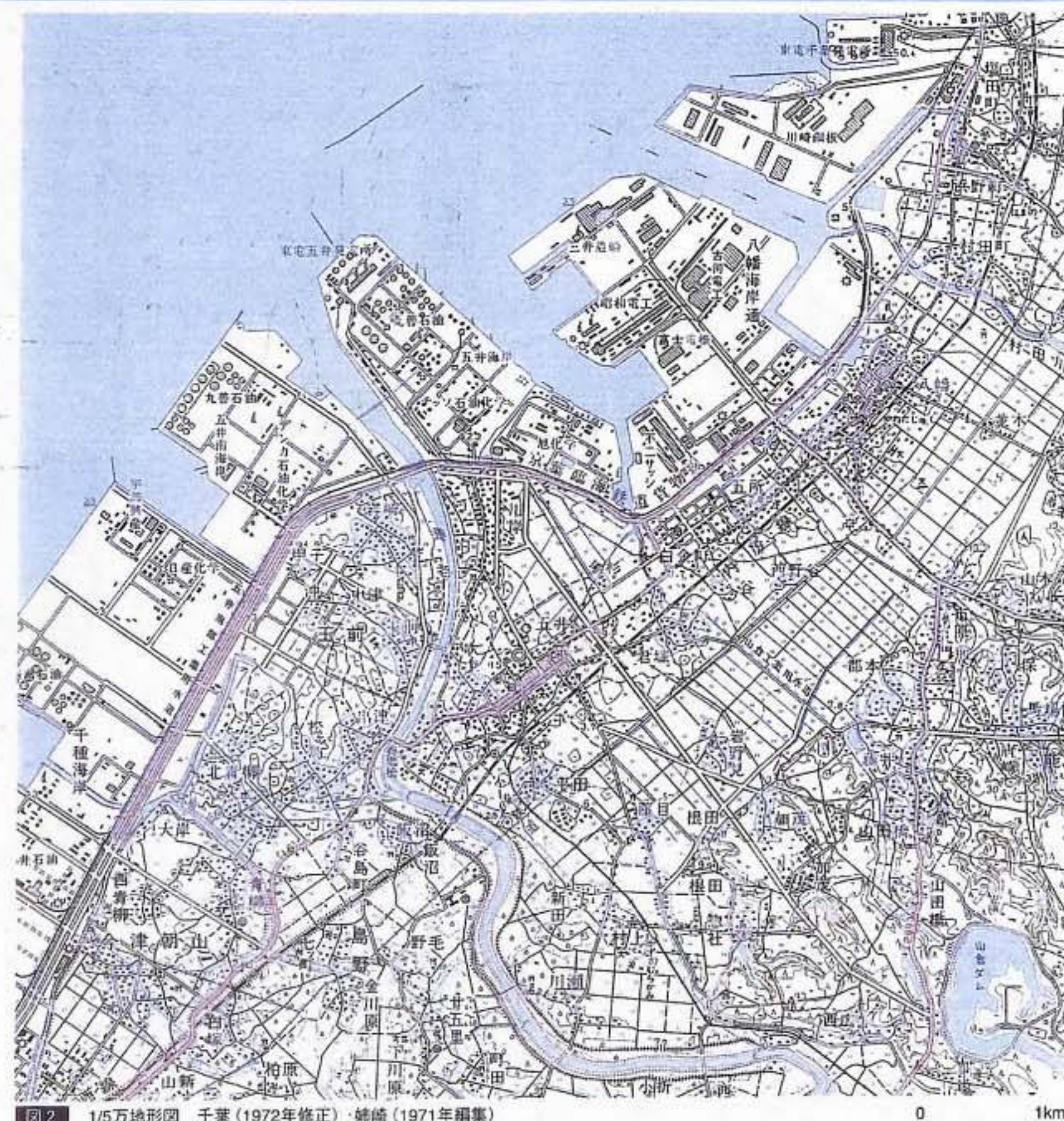




養老川三角洲 JR内房線五井駅を中心とする地域は、今日の市原市の中核をなす地域であり、過去40年間で最も大きく変容した地域である。地形的には、養老川の下流部にあたり、市原台地と袖ヶ浦台地、その間の養老川低地、八幡や姉崎の砂州と海岸平野などからなっている。そのうち本来の養老川低地は、その河口を頂点として東京湾に突出した三角州低地であり、海岸線には干潟が広がっていた。この三角州低地の自然の姿は図1に描かれており、この地形図に示されている自然と人文の

諸現象が、昭和20年代までのこの地域の原風景であった。

市原の原風景 その風景を一言で言えば、水田の広がる農村であり、海岸地帯は半農半漁の村々であった。台地では薪炭・竹・豆類・麦などが生産され、低地の主要部は米、自然堤防や砂州の微高地では桑やタバコやナシなどが栽培されていた。海岸地帯では貝・ノリの養殖が盛んであり、特に青柳産のバカ貝は「アオヤギ」の美称で通るほどよく知られていた。明治期には、河口近くの干潟に塩田が開かれていた。国分寺台(市原台地)には、



上総国分寺の存在は知られてはいたが、まとまった集落はなく、畑と林地の広がる土地であり、姉崎方面も同様であった。千葉街道に沿って八幡宿・五井などの集落があり、これらは砂州の上に位置している。鉄道は1912(明治45)年に現在のJR内房線が、これらの集落を連ねて木更津まで開通した。1925(大正14)年には小湊鉄道の五井～里見間が開通し、養老川流域の人や物資の移動に大きな役割を果たした。五井はその拠点となっていたが、駅前集落の域を出るものではなかった。

臨海工業地帯の形成 京葉臨海工業地帯の形成により、この地域は工業化と都市化の波に洗われることになり、著しい地域変容を遂げるようになった。千葉県は1958(昭和33)年に京葉工業地帯造成計画を立案し、本格的に東京湾岸の開発を進めることになった。1963年に市原・五井・姉崎・市津・三和の5町が合併し、市原市となって市制を施行した。さらに、1967年には南総町・加茂村を合併して県下最大の広域市となり、行政の体制を整えた。当初の造成計画では、浦安地区から五井・市

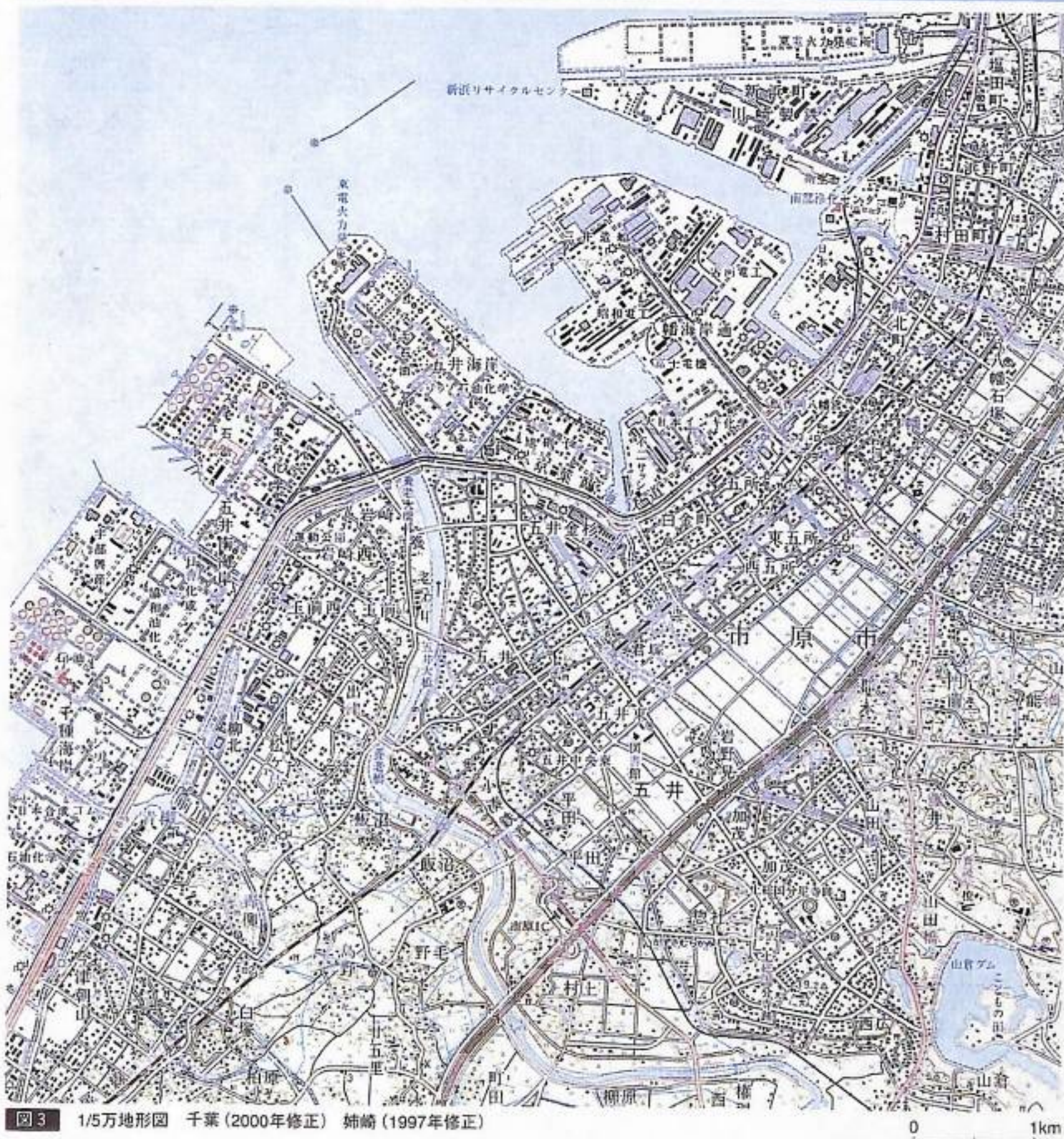


図3 1/5万地形図 千葉（2000年修正） 姉崎（1997年修正）

原地区までを対象としていた。しかし、翌年の京葉臨海工業地帯造成計画では範囲が拡大され、五井・姉崎地区もこれに組み込まれている。

五井・市原地区（1957～68年）では714haが造成され、そのうち今日の八幡海岸通りには、三井造船・昭和電工・古河電工・富士電機などの多種類の工場が進出した。また、五井海岸には丸善石油（現コスモ石油）関連の工場群などが立地し、東京電力五井火力発電所も進出した。1962～73年にかけて、五井・姉崎地区では1,468ha

の干潟埋立工事が進められ、海岸線は2 kmも遠くなり、工業用地は直線で区切られた専用の泊地を持った楕形状のものに変わった。ここには、出光興産と出光石油化学など4つの石油化学コンビナートが造られ、姉崎の巨大火力発電所（360万kW）も立地して、京葉臨海工業地帯の中核を形成した。これら工場群へは京葉臨海鉄道貨物線が引き込まれ、工業用水道も造られている。従来の千葉街道に平行して高規格の国道16号が整備された。

ありがとう八幡公民館77年 わたしたちの心にあって
不滅です

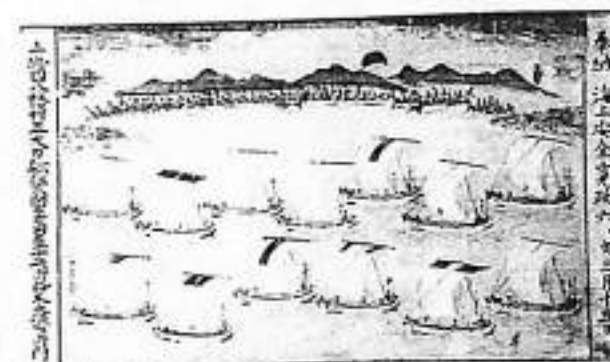
山岸弘明
八幡公民館主催事業八幡史学館代表講師
令和7年10月7日



飯香岡真景 南総八幡
(明治43年=飯香岡八幡宮坂本)
市総は上総のこと。八幡宮の高
台から、洋々と広がる東京湾と
富士山を遠望。かつての八幡海
岸が偲ばれる。

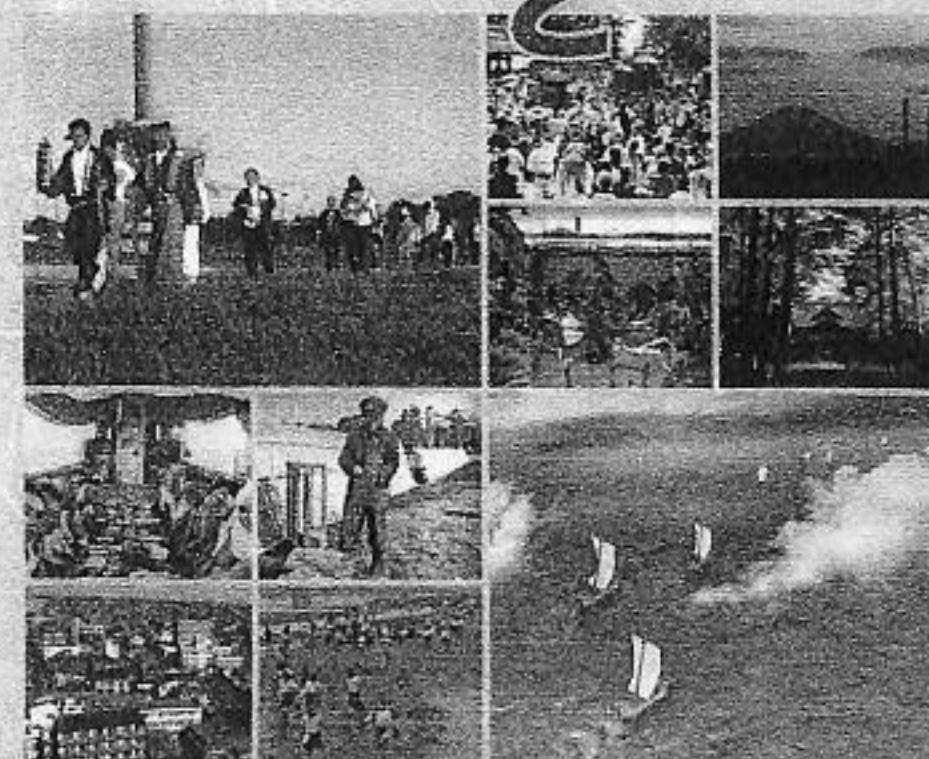


戦後、八幡町の司令塔だった初代公民館
初代公民館＝昭和23年6月、菅野眞作町長の呼びかけで
えた職工組合と町びとたちの奉仕作業で創立。土ま
構、木材は旧習志野造船解体残材を活用した。公民
特筆活動に「新生活運動」があった。「公民館結成式
「全国結成会」が各地に応じ、文藝大賞者に贈った。



八幡村五大力船々揃³の図
(寛政6年=飯倉四八幡宮大檢馬)

初代登孝北斎画。ピカソに影響を与えたとされる葛飾北斎の門人で、北斎の洋風版画を引き継いだ傑作的造詣。市原台地の目の品、青松林の遠近法などに片鱗。11代将軍家斉代、江戸廻船問屋・丸屋十兵衛せがれ育ち。春季大祭の船出の面を画く。船名が伏図、寝み荷、服装や合図の手信号などから、*とくろく*と想定されている。



市原市立八幡公民館運営委員会

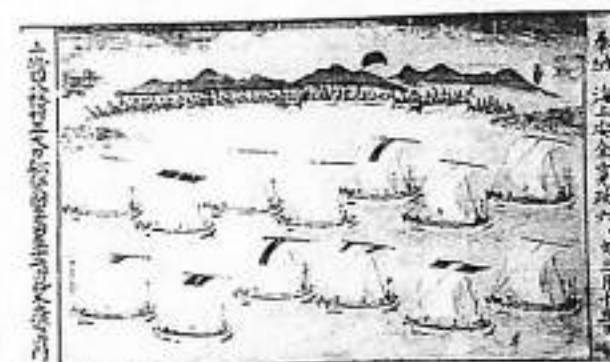
八幡史学館参加者特別謹呈



飯香岡真景 南総八幡
(明治43年=飯香岡八幡宮坂本)
市総は上総のこと。八幡宮の高
台から、洋々と広がる東京湾と
富士山を遠望。かつての八幡海
岸が偲ばれる。

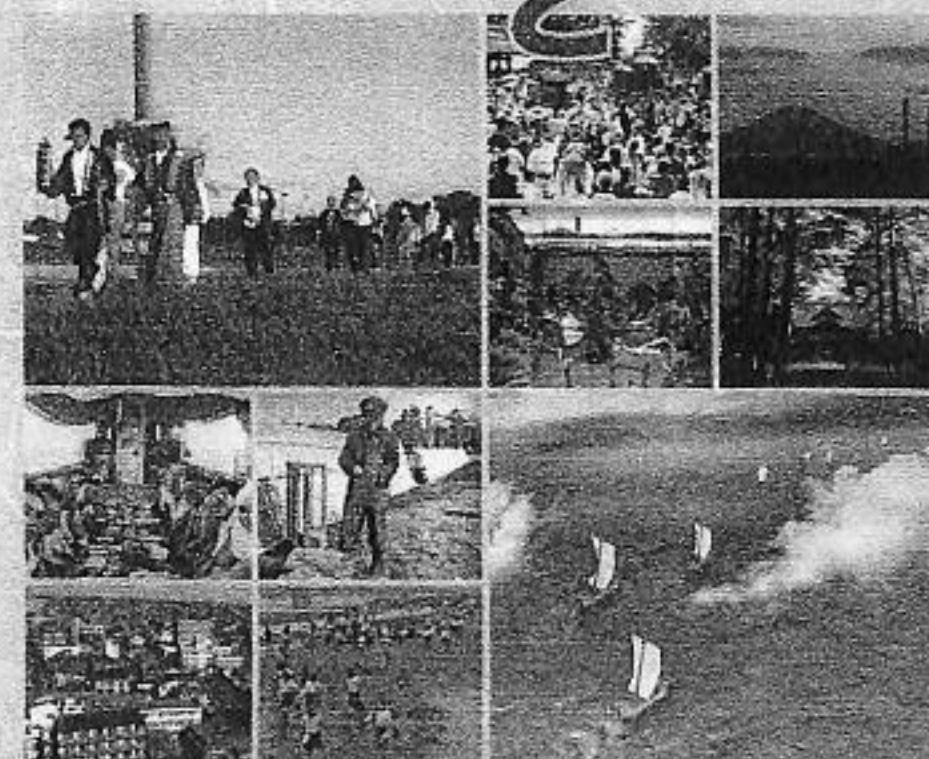


戦後、八幡町の司令塔だった初代公民館
初代公民館＝昭和23年6月、菅野眞作町長の呼びかけで
えた職工組合と町びとたちの奉仕作業で創立。土
構、木材は旧田舎志野隊解体残材を活用した。公民
特筆活動に「新生活運動」があった。「公民館結成式
「全国結成会」が各地に応じ、文藝大賞に輝いた。



八幡村五大力船々揃³図
(寛政6年=飯倉四八幡宮大檢馬)

初代登孝北斎画。ピカソに影響を与えたとされる葛飾北斎の門人で、北斎の洋風版画を引き継いだ個性の逸品。市原台地の目の品、青松林の遠近法などに片鱗。11代将軍家斉代、江戸廻船問屋・丸屋十兵衛せがれ育ち。春季大祭の船出の面を画く。船名が伏前、寝み荷、服装や合図の手信号などから、*とくろく*と想定されている。



市原市立八幡公民館運営委員会

八幡村と八幡宿

江戸と房総を結ぶ海運陸路の要衝

「八幡」は村田川下流の海岸平野に造る。市街市の東北角からついで上陸。下流市街の堤川を挟んで商業市に達して居る。その貴江口東岸に面した港で、「明総述往」が可を縣驛とした。天明元年（1787）「八幡村村規刊行」による村付成は、南北、五所村地を八幡川川境まで1250間、東西、海岸より南間村境まで550間、家数445軒江戸屋が18村付分の約半の写し「奥州前」は村田川と五所村境まで1183間5分7寸となつてゐる。

慶應時代、当論は小田原北条氏の分國で、千葉公城の原胤榮が所領した。「八幡」の初見は印正9年（1581）の原胤榮刊印状で、同18年、小田原征伐時の豊臣氏書「禁制」に「八幡」19年、秀吉の命で関大附した徳川家康の150石「寄進状」も「八幡村の四」とある。

「八幡村」は江戸時代の村名で初見は文禄3年（1594）の「下総国石高村名覚帳」、関東郡國後大、大久保三村高、同郡の村名が記す。村高は持3年1404石、元禄14年（1701）「元禄郷帳」1379石、寛政5年（1793）「市郡部戸口帳」



八正山妙長寺

往時は中本寺で末寺にか寺を擁す

山崎長等は、山崎宗道と上野寺村門下で、山崎を本山とし、その時侯は鎌倉中期正応年間（一二八八—一三〇一）間、當時の時長正元元年（一四二八）創立、往時は「真里谷・妙長寺」・津窪浦田・妙長寺」とし「上総三妙長寺」となわれた。また、中本寺（ちもとこうほんじ）地方名で、時に寺名十二か寺を有した。明治初年より寺名が衰退してゐたといわれる。

明治維新後の「千葉県市町村明細帳」によれば、「正長元年創建」とする国府原町長坂戸石塚村と宇計谷の両、八幡山妙長寺と号し候ところ、宣徳二年（一四四〇）、

6世西山院日念代、山崎の八幡山を八幡山と改め、その由は曲曲にせられたいとも書置なり。（一七六三年）社地無きより出火、被災仕り候に、すずみに遷移し置候事とある。

古く時代の文書には活字の大誤で、すべて消失したが、江戸中期以降の通達帳と寺の取寄帳の「雲渡院建立立て」（4冊）中の「第1題」が伝来する。第1題は享保6年（一七二一）、第12位日尊が起願、80年後の享徳二年（一八〇二）、第20位日尊が第2回を起こした。

その情報は始めに臺灣修文、歴



選はこどもたちの天国だった



山口達而伯の「近世にて」(八幡公民館展示)



この問題を画いた「八幡町十景」



(八) 續公序良俗



「八幡町建設のうた」

①華麗な「元祿拝殿」

飯を同八幡宮の建高様式は拝殿幣殿・相の間、本殿が直線に並び、雄偉堂々であり、日光東照宮と同じ、雄偉の名も東照宮に因んでいる。拝殿は参拝者の待合、本殿は持株にお住まい、真ん中の幣殿は宮司が祝詞（のりと）をあげ、供物や献金・物を受け渡すの部屋となる。

現在寺の拝殿は元禄4年（1699）に再建、一帯の有形文化財に指定されている。ともに八幡宮一万石領主であった松尾重良と久次侯松尾が造営者として松尾を尊ぶ、町の氏子たちが助力した。

「座敷（入母屋）（いりもや）」並り、「当利は活きの強い椿を置いて手招板として良材とした椿皮（び

355 銅板平蓋。同図されたばかりの車庫式神威丸銅板がはなれた。墓所や有力者の墓以外にはない貴重品の時代である。墨田区にあり後醍醐天皇が2か所、山内耕経連殿と中央の天皇陵前が並立、皇太后の御殿が建て、明使16歳の皇太子が皇太子で、皇太子との深がかわり示している。

正面の開口。銅面間の母屋は寛30間、坪数、山内氏と通り縁が中付、喜戸1つ、土古戸1つ、中付の縁の縁ととにえたる、縁丹(二)並りにかに顔科を置けた。防衛、暖色性で、塵除けをはか出、防衛、暖色性で、すける。銅の柱や、南の彫刻に見られる獅子や、虎などの彫刻は彫形色で、富麗な元禄文化の建築美を伝えている。



拝殿内部から本殿をのぞむ。入母屋屋根の飾り破風が美しい拝殿。



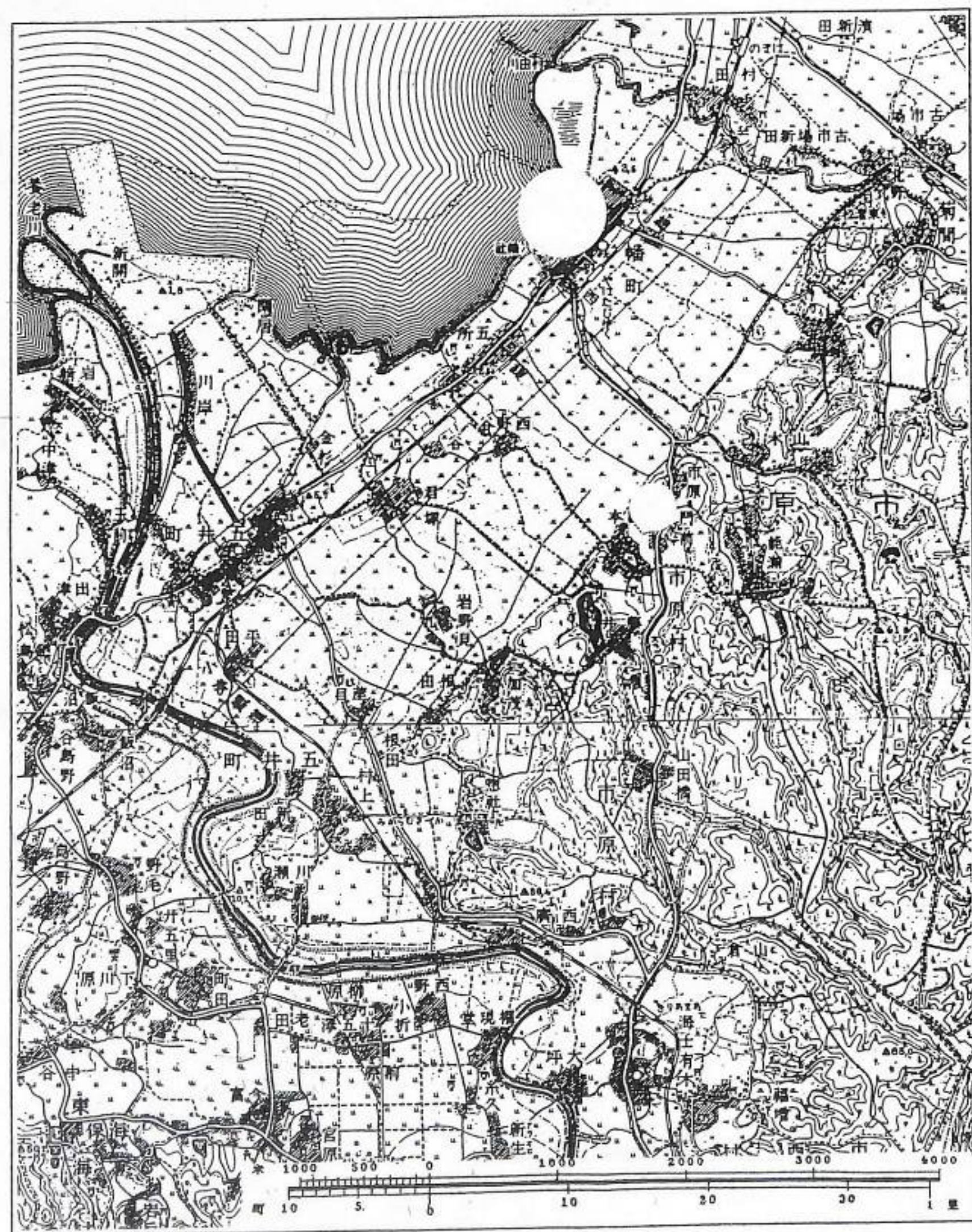


図1 市原市主要部地形図 (旧市原村・八幡町・五井町等)
(五万分一地形図「千葉・姉ヶ崎」明治36年測図・昭和19年部分測図による)

中世都市「府中」の展開(小川信)平成13

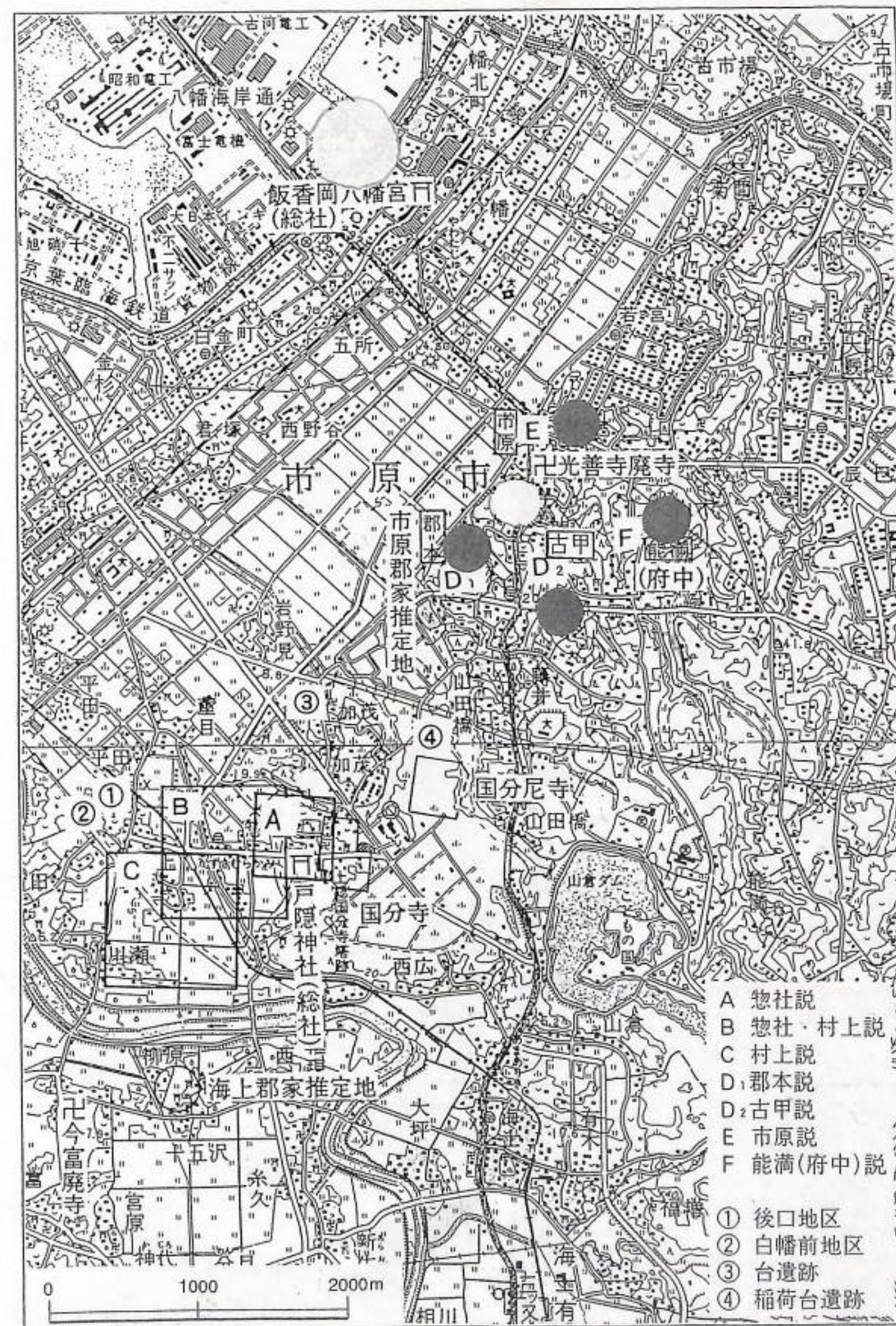


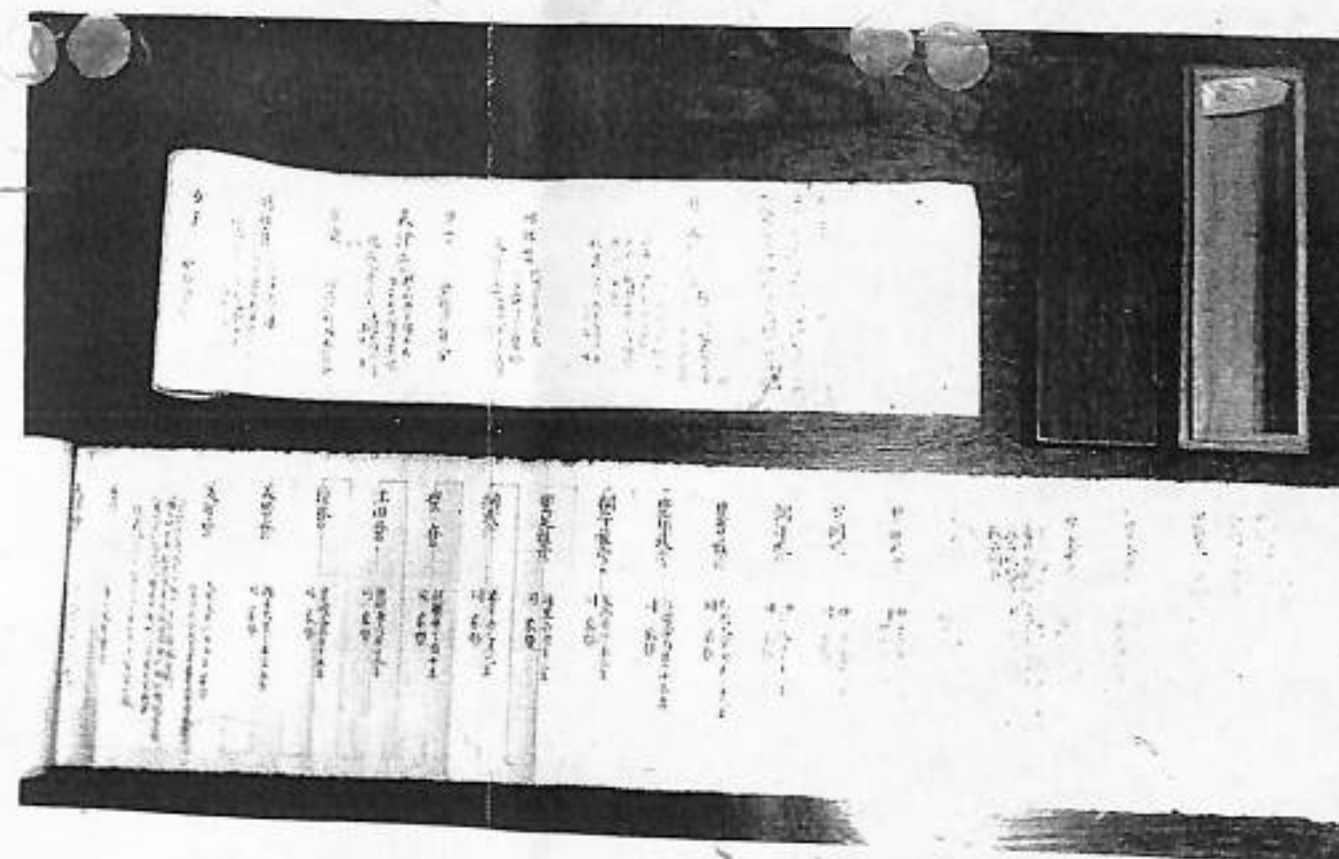
図2 古代上総国府想定図

(『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 共同研究「古代の国府の研究」所載
「上総国府学説地図」による。ただしA-Fの符号は付け替え①-④の符号を付加した)



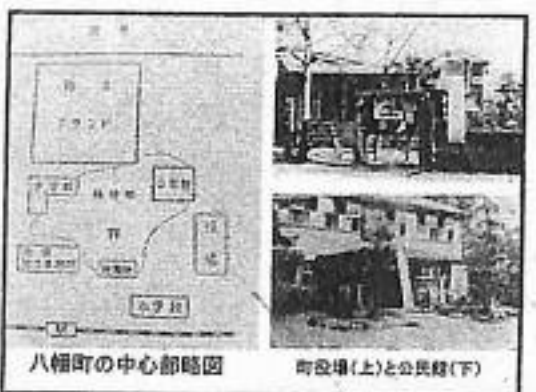
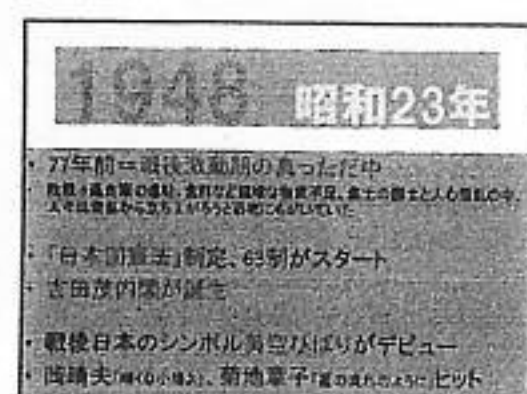
市川邦教自画像

市川邦教が作成した「神代の絵巻」



<p>譽田家系</p> <p>豐城入彦命長子</p> <p>八綱田王末男</p> <p>伊靜武彦臣 <small>神仁天皇二十五年 受命命御影社仕神官</small></p> <p>三豐木武彦 <small>豐珠武彦臣 豐田家祖</small></p>	<p>○豐木武彦</p> <p>神仁天皇丁酉六十五年</p> <p>御影神社仕神官</p>	<p>豐永武彦</p> <p>景行天皇庚辰二十五年</p> <p>同社祠官家督</p> <p>景行天皇四十二年日本武尊東夷御征伐之御時 當社御臨降被為在御目見奉酒飯御悅給此 飯香固地号予賜依是是御影社改之 飯香固地</p>	<p>豐長武彦</p> <p>成務天皇庚辰二十年</p> <p>同社祠官家督</p>	<p>豐雅武彦</p> <p>仲哀天皇乙卯八年</p> <p>同社祠官家督</p>	<p>網伴武彦</p> <p>神乃戊子六十八年</p> <p>同家督</p>	<p>豐貴推彦</p> <p>仁德天皇庚寅三十九年</p> <p>同家督</p>	<p>豐邦武彦</p> <p>仁德帝丙丑六十五年</p> <p>同家督</p>	<p>網守推彦</p> <p>反正帝丁未二年</p> <p>同家督</p>	<p>豐足推彦</p> <p>雄略帝己亥三年</p> <p>同家督</p>	<p>網武彦</p> <p>顯宗帝乙丑元年</p> <p>同家督</p>	<p>豐</p> <p>繼體帝丁酉十年</p> <p>同家督</p>	<p>津田</p> <p>欽明帝戊寅十九年</p> <p>同家督</p>	<p>種</p> <p>崇峻天皇壬午五年</p> <p>同家督</p>	<p>美貴</p> <p>推古天皇丁丑三十五年</p> <p>同家督</p>	<p>美智</p> <p>天智天皇丙辰五年家督</p> <p>從五位式部大夫實藤實智智風養子 人皇千代天武天皇自鳳也乙丑年當飯香固地 八幡大神宮奉勅諸依是飯香固地御影神社為祠官處 此處改立以後代々傳言司為祠官言被定置傳事 號義公彦丁丑年七月六日行年百七歲</p> <p>養子美智智室</p>	<p>美津</p> <p>文武天皇己亥三年家督</p> <p>從五位左京大夫室中臣今藤三女 号晴公彦丁丑年四月十日行年百十五歲</p> <p>倉橋良智室</p>	<p>邦雅</p> <p>養老丁卯年家督</p> <p>從五位式部大夫室中條隆季娘 号誠元真人感尊于壬午年行年百十八歲</p> <p>家貞 神代總理太夫養子</p>	<p>勝雅</p> <p>天平勝八丙申年家督</p> <p>從五位中務大夫室神代總理娘 号真正彦丁丑年六月十日</p> <p>為清 三良太夫伯列太原住</p> <p>女子 中川藏人直基室</p>	<p>勝</p> <p>室建八丁巳年家督</p> <p>從五位民部大夫室高倉太夫範水二女 号宗學子真人天長六癸亥年七月十九日行年九十五歲</p> <p>矩雅 佐野帶刀養子</p>	<p>基良</p> <p>延暦二十丁巳年家督</p> <p>從五位民部大夫室高倉太夫範水二女 号基良彦養和十癸亥九月十日行年七十八歲</p> <p>矩基 朝倉内舍人延暦十壬申年村家屬 中條左近室</p>	<p>基道</p> <p>弘仁十四癸卯年家督</p> <p>從五位式部大夫室小野好雄娘 号義仁彦丁丑年四月十日行年七十八歲</p> <p>女子 河野宣考室</p>	<p>基邦</p> <p>養和十丁巳年家督</p> <p>從五位左馬頭室朝倉矩行娘 号貞仁彦丁丑年七月七日行年六十七歲</p> <p>女子 柳原右門太室</p>	<p>義磨</p> <p>貞觀癸未年家督</p> <p>從五位藏人室日野弘隆娘 号德將彦寬平九丁巳年十月十日行年七十三歲</p> <p>女子 田内左馬次養子 田中主計正行室</p>	<p>邦實</p> <p>元慶八甲辰年家督</p> <p>從五位右衛門大夫室高倉太夫隆娘 延喜二十丙寅於延喜官公卿像賜 号宗貞彦延喜丁未年七月十日行年七十五歲</p> <p>義實 高橋左門尉</p>	<p>義道</p> <p>延喜九乙丑年家督</p> <p>從五位式部大夫室中太膳亮二女 号義道彦養平七丁酉年十月十六日行年七十三歲</p> <p>義康 中條權太夫養子 田辺水主父室</p>	<p>義量</p> <p>承平三癸巳年家督</p> <p>從五位民部大夫室安部吉親娘 号義量彦天曆九卯年四月十日行年九十一歲</p> <p>女子 堀川圖書光重室 錦町太夫養子</p>	<p>義宗</p> <p>天曆六壬子年家督</p> <p>從五位中務大夫室北條為俊娘 号義宗彦丁丑年二月十日行年六十三歲</p> <p>貞昌 大炊人 中山太膳太夫養子</p> <p>女子 田辺時親室</p>	<p>義邦</p> <p>天曆庚戌年家督</p> <p>從五位中務大夫室豐岡藏人娘 号孝仁彦丁丑年四月十日行年八十八歲</p> <p>貞光 大炊頭</p>
--	---	---	--	---	--	--	---	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	--	---	--	--	---	---	---	---	--	--	---	--	---	---	---

ありがとう八幡公民館 77年 ①



②

スライドショー(あらすじ)



八幡から海が無くなって久しい。工業都市に生まれ変わったかつての「海の町」にいまはもう潮の香りすらたどることができない。

むかし海があったころの八幡、五所はどんな町だったのだろうか、「100選チーム」会長で町の歴史に詳しい小出惣治さんに戦時下のこのころの思い出や暮らし、戦後の町起こしや海岸埋め立てなどを聞いた。

♡きょうは小出さんが若かったころの八幡や五所のお話を伺いたいと思います。お生まれは？

昭和8年五所生まれの76才です。気持ちはいつも若いつもりなんです。近ごろはどうもね。もうそんな年なのかと思うとちょっと寂しいね。(笑)

八幡の歴史文化をみんなに 親しんでもらいたい 五所・小出惣治さんにインタビュー



自宅で盆栽作りを楽しむ小出さん

インタビューした人*鷺津寛子

♡8年という昭和恐慌のころ？

前年に「5・15事件」があって9年には「日華事変」が始まる。日本が徐々に戦争に引き込まれていく。そんな時代でした。

のりとアサリが唯一の現金収入だった

♡こどものころの八幡や五所の様子はどんなでしたか

町の大半は半農半漁、うちもそうだった。がみんなどうでもね、たんぼは借り物で半分は年貢と税金で取られてしまう。亡くなった父はよく「いくら働いても少しも暮らしたくはない」とってこぼしてた。のり採りとアサリ取りが唯一の現金収入、生活は海が中心、潮に合わせて海に出て合間に農業をやる。家はトタン屋根で8畳と6畳、それに台所とトイレ、土間。いまも17まで育った家が旧道を少し入った所に昔のまま残っているんだ。

ど、前を通るたびにこどものころを思い出すね。

竹やりで米軍をやっつけるんだ

♡小学校は八幡ですね

戦時下、八幡尋常小学校と高等科といった。いまの八幡宿駅前にあった。毎朝上級生が引率して10人くらいずつまとまって学校へ行く。教科書は「サイタサイタ、サクラガサイタ」、音楽も国語も「ヨカレン」とか「爆弾三勇士」、外地で戦っている兵隊さんの話ばかりで剣道や竹やり訓練もあった。「エイ、ヤー」ってやるんだ、米軍が攻めてきたらやっつけるんだ、みんな本気で考えてたんだから恐ろしい時代だった。

♡戦時中のこどもたちの遊びは？

どの家も貧しいからまず親の手伝い。朝「縄ない」や「のりす」作りをやったから学校へ行く。帰ってもじっさん、ばっさんのモミの片付けが待っていた。

♡遊ぶヒマがない？

手伝いのない日もある。こんな時は仲間と外で遊んだ。夏は海。いまは埋め立てられてしまったけど当時は八幡様のすぐ前まで海水浴場、潮が引いてる時はボートピアの「シヨバ(製塩場)」の水門の池がプール代わり。水門から飛び込んだこともう遠い思い出だね。帰りは北川の所にあった「フーカシ」の工場へ

振った。五所からも多くの人が駆り出されたけどそれきりって人もあった。家内の兄はビルマで戦病死、マラリアだったんだろ。位牌になって帰ってきた。

♡戦争がいよいよ激しくなる

はじめはB29、その内に九十九里海岸近くまでアメリカの大艦隊が来て艦載機のP51が超低空を飛んでくるようになった。ヤクの向かい側に探照灯陣地が作られて高射砲が設置された。みんな期待したけど最後まで1発も打たなかった。

♡八幡に爆撃はなかったのですか？

昭和20年3月10日の東京大空襲は空が真っ赤になった。見ているだけでもそりゃ怖かった。千葉も空襲で焼けただけ。ここは幸いにも大きな被害はなかった。南町で舟の手入れをしていた人が掃射されて亡くなった。P51は動く物を見つけると急降下してくる。パイロットが見えるくらいまで降りてきてパッパッと機関銃を打つ。弾が砂煙りを上げて追っつけ

るんだから浜にいたらたまらないよ。

♡学校は大丈夫でしたか

授業中にも「空襲警報」のサイレンが鳴る。みんな一斉に校庭に飛び出て防空壕に飛び込んで伏せる。もう生きた心地はしなかった。

♡終戦の詔勅は？

昭和20年の8月は高等科の1年で12だった。正午にラジオで重大発表があるというので家中正座して聞いた。最初意味が判らなかったけど、アナウンサーの説明で終戦だとわかった。やれやれこれで戦争が終わったって内心ホッとした。

♡戦後、八幡の民主化運動が始まる訳です

先頭にたったのが民選初代八幡町長の菅野儀作さんだった。戦後の学制改革で我われ高等科の1年生が旧制2年に進む、新制の3年生になるか選択することになった。

♡新制中学が誕生した

八幡中学校はできたが校舎がない。取りあえず1年生は小学校の新校舎、2年生は警察署道場と廃校になっていた南総中学校、3年生は商工会の所にあった町役場と青年学校に分散した。なんとか新校

行く。

♡なんですか？

剥き身のおさをふかす工場があった。みんな「フーカシ、フーカシ」って言ってた。こんなとわき出る井戸があった風呂みたいでドボンと漬かって帰る。

♡夏以外は八幡様？

学校帰りは八幡様で、帰ってからは近くの神明様だ。木登りやチャンバラ、メシコ、ペイゴが多かった。遊び道具はみんな手作り、竹を切ってツリさおを作ったり、木刀を削り、パチンコや水鉄砲なんかも自分たちで作った。

♡空襲警報で防空壕へ飛び込む

♡戦時下の思い出あったら？

出征する兵隊があると先生が生徒をホームの下に連れていく。なにしろ学校のまんな前に駅があって校庭みたいだった。「ばんざい、ばんざい」と叫んで小旗を

合を建てようということになって、菅野さんが習志野の旧兵舎を解体してトラックで運んできた。当時八幡様の境内だった八幡幼稚園から公民館周辺の松林を切り開いて工事が始まった。

♡ボランティアと聞いていますが

町長が先頭に立って町の人たちがみんな手伝った。学校は始まったといっても授業はない。毎日古くきを延ばしたり工事の雑用を手伝って、卒業式は工事中の新校舎でやった。まだ残材があるというので公民館も建てることになった。当時の人たちはみんな「八幡の町を作ろう」とって張り切っていたんだ。

♡昭和32年に漁業権を放棄して八幡海岸の埋め立てを認めるわけですが、反対

はなかったのですか

先祖からの海を無くしてはいけない、最初はみんな反対だった。それが賛成に変わったのは菅野さんの「ヌシ」は長男だから海の仕事をこそこ食べていけるかもしれないが、弟やこどもたちをどうするのだ」の一言だった。

歴史は進化しながら引き継がれる

♡八幡に海はなくなったが

町は豊かになった。その一方で海や文化など失ったものも大きかった。その後八幡に引越してきた人や若い人たちに当時の話をするとみんな驚く。八幡に海がなくなってもう50年、すっかり昔話になってしまった。

八幡史学館チーム初代会長(故人)

♡いまなぜ「名所百選」なのですか？

八幡は昔、陸と海の要衝として発展した歴史ある町だ。町の歴史をもっとみんなに親しんでもらいたいというのが趣旨。かつて遠浅で波静か、運動公園の岸壁までが海だった。先祖たちはこの海の幸を守り、のりや貝を採って生活していた。潮干狩りや海水浴場として賑わった時代もあった。町の歴史は進化しながら脈々と引き継がれているんです。

♡八幡は歴史の町でもある？

そうです。こうした八幡の歴史文化を大切に守って行きたいと思っています。

♡きょうはどうもありがとうございます

やわた名所百選

八幡史学館名所100選チーム会報「パブリシティ」ニュース

第1号=平成22年5月

